＜新訳＞魔法少女リリカルなのは～空っぽの少年の物語～

漆黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
＜新訳＞魔法少女リリカルなのは～空っぽの少年の物語～

【Ｎコード】
Ｎ２４０３Ｔ

【作者名】
漆黒

【あらすじ】
～心に「空白」を抱いた少年と「運命」の名を冠する少女が出会うとき、物語は始まる～

プロローグ

これは、恋の物語。
暖かくて、切なくて、どうしようもなく歪んだ、恋の物語。

４月某日　海鳴小学校　教室内
窓の外を、重そうな雲が泳いでいる。重そうなのに、動きたくないだろうに。
それでも雲は空を泳いでいくのだろう。当たり前だが。

そんなことを、教室の窓際最後列で神近綺羅は思った。教卓では教師が授業中。わかりにくい説明で何かの公式を説明している。綺羅の興味の持てる内容ではないようだ。
再び、窓の外に視線を移す。春だというのに、この天候では気温は上がらないだろう。雨も降るかもしれない。幸い学校からバスで帰る彼に悪天候は関係ないのだが。

どんよりとして、なぜか空虚な空。
（ああ、そうか。俺に似ているんだ、この空は。）
見飽きない理由を、彼は自己の内側に見つけた。
神近綺羅には、１年前からの記憶がない。自分が何者で、どこから来て、どこに行くのかも。
すべてを失い、彼は空白を心の裡に抱いた。
綺羅は今でも思い出す。今の彼が持つ最古の記憶を。
すべてが終わり、すべてが始まった、あの日を。

あの日。綺羅は１人で家にいた。このとき、既に両親は他界していた気がする。
彼を育ててくれたのは兄だ。神近翼という名の。

翼は既に就職しており、その収入で綺羅を養ってくれていたのだった。
この日、翼は「仕事に行く」と言い、家を出て行ったきり帰ってきていなかった。しかし綺羅は、「帰りが遅いな」くらいにしか感じてはいなかった。翼が遅く帰ってくるのは珍しくなかったし、１晩家を空けることもあったのだから。
午後１０時。シャワーを浴び終えた彼に、家のインターホンの発した音が聞こえた。
ドアを開けると、見知らぬ男が２人。
そして、彼は告げられる。
「神近翼が、仕事中の事故で死亡した」、と。
頭が真っ白になったのを覚えている。その後、真っ白になった記憶は戻っていない。
信じられなかった。兄は、そんな「仕事」に就いていたのか？
気付けば、２人の男は消え、すべての記憶を失った綺羅だけが残されていた。

その後、カウンセラーの親身な対処もあってか、綺羅の精神状態は普通に社会生活を送ることが出来るまでに回復した。今も、普通に学校に通い、数少ない友と笑顔を交わしている。
しかし、失った記憶は戻らないのだ。彼はもう、死んだ両親との思い出を懐かしむことすら出来ない。
兄がどんな顔をしていたのかも。ただ、ぼんやりとしたビジョンが浮かぶだけだ。
心の空白のなか、綺羅は思う。
（俺は、どこへ向かおうとしているんだろう…）

「…君？神近君？」
誰かが綺羅の肩を揺さぶっているようだ。そこで彼は初めて、自分が眠っていた事に気付いた。

顔を上げると、先ほどまで教卓に立っていた女性教師が、苦笑しながら綺羅を見つめていた。
「神近君、もう授業終わっちゃうよ？」
時計を見ると、そろそろ号令がかかる時間であった。
本日の授業はこれが最後なので、その後は放課となる。
覚醒していない頭で周囲を見渡すと、茶色の髪をサイドテールに結った女子がこちらを向いて苦笑していた。
彼女の名は高町なのは。綺羅の友人だ。家は商店街の喫茶店「翠屋」。両親の愛情を一身に受けて育ったように見えて、彼には多少羨ましくも思える。

そこで、彼の思考を遮断するかのようにチャイムが鳴り、クラスメイトたちは三々五々教室を出ていた。

なのは達とバスに向かおうとした綺羅は、傘を教室に忘れたことに気がついた。
「やば、傘忘れたみたいだ。悪い、先行っててくれ。」
なのはが頷く。
「うん、わかったよ。綺羅君の席、取っておくね。」
「ん、さんきゅ。」
教室に戻る途中、ポケットから携帯を取り出してメールをチェックする。
「そういやこの携帯、誰が使用料払ってるんだ？」
兄から買ってもらったような気がするスマートフォンは、未だ一度も料金請求が来ていない。そんあことは、考えたことすらなかった。
「まあ、いいか。」
使えるんだからな、と納得することにした。
教室に着き、傘を回収する。携帯の時刻表示を見ると、もうバスはギリギリだった。走れば間に合う。
しかし、

「次ので行くか。走るのも面倒だし。」
綺羅は、次のバスで帰ることを選択した。彼は面倒なことを嫌う傾向が強いのだ。
とりあえずマックで時間をつぶそうと、外に出る。しばらく歩くと、彼の目が妙な人物を映した。
女の子だ。綺麗な金髪をツインテールに結っている。その顔立ちも、とても整っている。大きな赤い瞳に、綺羅は引きずり込まれそうになった。
（か、可愛い…）
しかし、妙なのは凄く可愛いからではない。いや、それも十分な要素なのだが。
「傘、さしてないな…」
その少女は、傘をささずに、濡れながら歩いていた。急ぐ様子もなく。
（あのままじゃ、風邪引くんじゃないか？）
考えるより、体が先に動いた。
「ねえ、ちょっと」
すると、その女の子は、戸惑ったように
「え、私？」
と、顔を上げた。
綺羅は傘を差し出し、
「こんな雨の中、傘もささないで濡れてたら風邪引いちゃうよ？傘貸してあげるから、使って？」
金髪のその子は、躊躇ったようなそぶりを見せる。
「え、でも、迷惑じゃない？それに、あなたも濡れちゃうし…」
綺羅は安心させるように優しく微笑むと、続けた。
「俺なら大丈夫。他人より頑丈に出来てるしね。それに、俺より可愛い君のほうが重要じゃない？」
一般に、自然にこういった台詞が出てくる人間を旗人間というのだが、本人はそんなことを知らない。

少女は俯いて顔を真っ赤に染めてから、ちょこんと頷いた。
綺羅は傘を渡し、
「返さなくていいよ。安物だし。じゃ、また会えるといいね。」
また、と言って手を振り、背を向けた。と、
「あ、あの！」
少女が綺羅を呼び止める。振り向いた綺羅に、
「あ、ありがと…」
綺羅は「どういたしまして」と言い、そのままその場を離れた。

これは、ほんの始まり。些細で、誰も気に留めないような小さな出会い。
しかし、この出会いは確実に、2人の運命を変えていく。

これは、恋の物語。
暖かくて、切なくて、どうしようもなく歪んでしまった、恋の物語…

主人公設定

主人公設定

ＮＡＭＥ：神近　綺羅
（カミチカ　キラ）

ＡＧＥ　：９

性別　：♂

詳細　：１年前にとある「事故」で家族を亡くし、記憶喪失となる。過去の自分と踏ん切りがつかず、人付き合いスキルは低め。無口というわけでは、ない。スチューデント・アパシー（学生特有の無気力）患者。成績、運動神経共に抜群である。クールで冷静に見えるが、正確には不明。

※「キラ・ヤマト」とは何の関係もありません。オリ主です。

外見　：髪は黒のストレート。セミストレートくらいかな・・・

デバイス

「Ｄｙｄａｌｏｓ」（日本語表記：ダイダロス）

武装

・実体剣「エシュリデータ」

・フォトンライフル

・フォトンサーベル×２

・魔力刃ブーメラン×２

実体剣は普通のロングソードサイズ。

フォトンライフルとサーベル、ブーメランはビーム兵器みたいなもんだと思ってください。

要するに「魔力弾を撃てる銃と、魔力刃のサーベルにブーメラン」です。

エシュリデータとフォトンライフルは腰に、フォトンサーベルは袖の裏側、ブーメランは肩にマウントします。

バリアジャケットデザイン
インナーはダークブルー、マットブラックのロングコート。デニムも黒。

待機形態：スマートフォン
普通に携帯として使えます。ネットワークに強制介入しているため、代金は発生しません。

作成者：ネタバレするから非公開

#1　幕開けもしくは日常の終焉（前書き）

OP「SCARLET　KNIGHT」水樹奈々
ED「フレンズ」ステファニー

#1　幕開けもしくは日常の終焉

汗が一滴頬をを伝う。
見据えるは敵。
砲火をかいくぐり、接近し、剣を振るうが、防御フィールドに弾かれた。
1度旋回し、左手に握ったライフルで牽制の連弾を放ちながら、もう1度接近する。
敵が零距離砲撃を恐れ防御を固めるが、砲撃はブラフ。
体の後ろに隠れていた実体剣を一閃、敵が両断される――
と、いうところで目が覚めた。
「…どんな夢だよ。」
綺羅は肩を竦めた。どうやら夢だったらしい。
「あり得ないっての。俺が正義の味方なんてさ。」
なんだか自分が勇者にでもなったかのようだった。
が、彼はそんな夢を、幻想を否定した。詳しくは思い出せないが、兄は「正義の味方」をやっていて死んだのだから。
未だにわめいている目覚まし代わりの携帯を黙らせ、洗面所に。顔を洗い、トースターに食パンを叩き込む。焼きあがるまでに冷蔵庫からペットボトルを取り出し、中身を口に運ぶ。
ついでにＰＣも立ち上げ、ニュースをチェックしておく。相変わらずネット上では、どこの国で民主化革命が起きただとかそれに国連が介入したとかだという記事が踊っていた。
「みなさん元気だねえ。俺はこんなにも無気力だと言うのに。…関係ないか。」
トーストを頬張り、そのまま制服に着替える。ついでに髪をセットし、鞄の中身と財布を確認する。
洗濯物を洗濯機に放りこんでいると、携帯がアラームを鳴らす。バスの時間だ。

「やっぱ。いってきます、と。」
結局洗濯は断念し、自分以外誰も住んでいない家を後にした。

「はよーっす。」
家から歩いて5分、無事バスに駆け込んだ綺羅は、先に最後列に陣取っていた友人に片手を挙げ挨拶した。
「おはよー」
「綺羅君、おはよう」
「うん、おはよう。」
3人が三者三様の挨拶を返す。
3人の名は月村すずか、高町なのは、アリサ・バニングスという。
眠たげに座り込んだ綺羅に、アリサがため息をつく。
「うわ、眠そう。また夜更かし？」
「まあな…あふ…」
欠伸をした綺羅に、なのはが苦笑した。
「ちゃんと寝なきゃだめだよ…」
「5時間くらいは寝たんだがな」
「それ、ちゃんとって言わないよ…」
すずかがちょっと引いていた。
「大丈夫だよ。多分…」
その後は取り留めのない会話が続き、バスは学校に滑り込んだ。

午前の授業は、長い瞬きをしている間に終わっていた。
昼休み直前の授業は、職業についての発表会だったか。
ところ変わって屋上。綺羅はアリサ、なのは、すずかと昼食を囲んでいた。
「そういえば綺羅君、毎日パンだよね」
「ん？ああ、面倒だからな。作るの。」
「あんたらしいって言えばそうなんだろうけどね」
「ほっとけ。」

普段通りの会話を交わす。空は青空だ。
キュイ、とコーラを喉に流し込み、綺羅はグラウンドを眺める。
サッカーをしている者たち。鉄棒から落ちているやつもいる。
（あいつらは知っている。自分が誰なのかを。これからどこに行くのかも。立ち止まっているのは、俺だけだ。）
静かに目を閉じる。失くした物を思い出そうとしてみるが、心に浮かぶのは痛いまでに混じり気のない「白」だった。
「…。おーい。起きろー。」
気付くと、アリサが頬をペシペシと叩いていた。
「おっと、ちょっとトんでたか。」
すずかが僅かに目を細めた。
「大丈夫？保健室行ったほうが…」
綺羅は「大丈夫」と言いそれを遮り、チャイムの鳴り始めた校内へ急いだ。

午後６時　綺羅宅
「っかしいな…確かに買ったはずなんだが…」
帰宅した綺羅は晩餐を作ろうと冷蔵庫を開けたが、肝心の肉が無かったのだった。冷蔵庫に半ば身を突っ込みごそごそと探すが、見つかる兆しは無い。
「しょうがない、買ってくるか。」
財布を確認し、携帯をポケットに放り込み家を出る。
これが運命の分かれ道とは知らずに。
そして、彼は気付かなかった。気付くはずも無かった。
塀の影から綺羅に視線を投げていたものが、立ち去る彼を見て確かに笑ったことを。
その手に、彼が探していた食用肉のパックがあったことを。

３０分後　綺羅宅付近
「さすがにこの時間に安いのはないか。」

スーパーのを持った綺羅が呟く。なかなかシュールな画だが、気にするものはいない。
携帯を操作し、プラウザを閉じる。あと1つ角を曲がれば自宅だ。
しかし、彼は帰宅することを辞めた。
「――――ッ！」
体の内側に、何か嫌な感覚が通り過ぎていったからである。
それは、まさに「何か」としか形容できないものであった。
わからないのに、理解できないのにはっきりと「嫌な感覚」であることはわかる。しかし、逃げることも出来ない。
その「何か」は綺羅を気配の発信源に向かわせる磁力的パワーを持っていたのだ。
ほぼ本能に従い、走った彼は。
見た。
黒い「何か」が道路の真ん中で脈動を繰り返しているのを。

（何だ、アレは。俺は、何を見ている？）
「それ」は、少なくとも綺羅の脳内に記憶の形として存在しないものであった。
生物ではない。しかし無機物でもない。脈動を繰り返し、ただ蠢いている。
息が荒くなる。脳が「逃げろ」と命令しているのに、脚が言うことをきかない。
そして。
「ッ！！」
「何か」が綺羅のほうを向いた。目に類する器官は確認できないのに、「見られている」というのはわかった。
状況の変化は、一瞬であった。
「何か」の周りに黒い球状の物体が浮かび、発射される。
このとき綺羅が反射的に腰を落としたのは、ほぼ奇跡だった。
刹那、球状の弾丸がブロック塀に激突、コンクリートで出来たそれ

は粉々に砕け散る。
「うそ、だろ？」
息を呑む暇すらない。二次波が来る。綺羅は道路を転がるように避けた。
（何で、こんなことに！）
綺羅は「日常」にいたはずだったのに。仲間ととりとめのない会話を交わしていたはずだったのに。
しかし、そんな思考も断ち切られる。
起き上がった綺羅は、見た。
「何か」の体が剣先のように鋭く変化し、自分の方に伸びてくるのを。
「…ッ！」

綺羅は、思考の海を漂っていた。
……死ぬのか。俺は。
こんなところで。誰にも気付かれずに。
虫けらのように。空っぽのまま。
死ぬのか。
……嫌だ。
そんなのは、嫌だ――――――！

瞬間、彼のポケットが光を放った。
ギィンッ！
鋭い音がして、綺羅は目を開けた。自分の体に穴が開いて音ではない。痛みもない。
そして、見た。
光の盾が、致命傷となる刺突を防いでいるのを。
『早くシステムを立ち上げてください。』
突如、頭の中に声が響いた。システム？立ち上げる？
「お前は誰だ？何を言っている？」

『時間がありません。急いでください。早く！』
「どうすればいいんだよ！」
『簡単です。＜システム・オンラインと私が認知できる声量で発声してください。＞』
「わかったよ！やればいいんだろ！」
半ば自棄になっていた綺羅は、覚悟を決めた。
叫ぶ。
「システム・オンライン！！」
瞬間。ポケットの光が広がり。
綺羅を包み込んだ――

『マスター認証＜神近綺羅＞。バリアジャケット・セットアップ。』
声が聞こえたと思うと、綺羅の身につけていたものは変化していた。
ジャージは黒のロングコートに。
左腰には鞘に入った剣が、右腰には長銃が。
両肩にはブーメランが装備され、袖の裏側には剣の柄のようなものがバンドで留められた。

『セットアップ、完了。』
綺羅は装いの変わった自分を見渡す。
何がなんだかわからないが、少なくとも次の行動は決まっている。
こう叫ぶことだ。
「だから、どうしろと！！？」

#2 「Dydalos」

『全システム起動を確認。オールウエポンズ・フリー。シーリングモード異常なし。魔力出力、規定値を確認。システム・オールグリーン。』
綺羅は、頭の中に響く声を、呪文を聞いているような気分で聞いていた。
これまでのことを整理してみる。

住宅街で妙な気配を感じ取ってここまでやって来た。
←
謎の化け物に殺されかけた。
←
頭の中に変な声が響き、指示に従ったらこうなった。

（だ、駄目だ…さっぱりわけがわからん。）
綺羅は改めて自分の体を見渡す。
両腰に銃と剣が1つずつ。
袖の裏に剣の柄のような何か。
肩に金属片。

（役に立ちそうなものが無い…）
『マスター、来ます！』
「来るって何が…わあっ！？」
謎の現象に気をとられているうちに、例の化け物が再び剣状の触手（？）を伸ばしてきた。
とっさに飛びのいたかれは、勢い余って地面に転がる。
「あれ？こんな飛べたっけ、俺…？」
するとそれに反応したのか、再び頭の中に声が。

『システム起動中は、アシスト機能によりマスターの魔力により身体機能が上昇します。目安としては、通常時の約１６倍程の能力を発揮できます。』
「…は？」
今、こいつは何と言った？魔力？
「魔力ってなんだよ！？俺にはそんなもの――」
ない、と言おうとしたところで声は再び遮られる。
『説明している暇はありません。回避にも限界があります。応戦を。』
距離をとったためか、放たれた黒い弾を回避したところで、綺羅は再び覚悟を決める。
「くそ…やりゃあいいんだろ！」
右腰からライフルを引き抜く。特殊な素材で出来ているのか、重厚な作りと裏腹にかなり軽いそれを、化け物に向かって構え、連続でトリガーを引く。
すると光の弾――こちらのものは赤みがかった白だ――が放たれ、敵を直撃する。着弾箇所から爆発に似たスモークが立ち込めた。
（倒した、か？――ッ！！）
スモークを割って伸ばされた剣先を、ほぼ反射的に引き抜いた左腰の実体剣で弾く。
「き、効いてないじゃん！？」
『あれは特定遺失捜索物の一種、ジュエルシードの暴走体です。物理的に破壊するのはほぼ不可能なので、ある程度ダメージを与えたら封印しましょう。』
また謎ワードが出てきた。今度は「特定遺失捜索物」に「ジュエルシード」に「封印」だ。
「封印って、どうやって！」
『まずはダメージを。手順は追って説明します。』
綺羅は唇を噛む。確かにこいつの言う通りだ。強敵に立ち向かうときは、まずは弱らせるのが定石である。

彼はこの短時間で、恐ろしいほど戦闘に適応していた。普段では出来ないような機敏な動きを、通常の１６倍の身体能力でこなす。
黒い弾が放たれる。こんどは時間差だ。しかし。
（芸がないな。もう見える！）
左手の剣を右手に持ち替えると、アスファルトを蹴り右へ左へと鋭角的に回避していく。１つ、２つ、３つ、４つ！
「これで、どうだっ！」
最後に大きく飛び上がると、剣を両手で握り、大上段から振り下ろした。流麗で曲線的な刃が、暴走体の頭から食い込む。
敵の巨大さゆえ両断には至らなかったが、深々とその身に裂傷を刻み込んだ。
「封印、いけるか！？」
『ご心配なく。―シーリングモード・セットアップ―。』
すると、綺羅の前に妙な円盤が出現した。薄くて広いそれの側面のスリットには、プレート状のなにかが挿入されていた。
「これで、どう封印しろと？」
『ええと、今マスターにはジュエルシードのシリアルナンバーが見えているはずです。』
みると、暴走体の前に縦長で八面体の結晶が浮かんでいる。中央には「ＸＩ」という文字が。
「シリアルナンバー？あの、ローマ数字のやつか！？」
『それです。で、シリアルナンバーを宣言した後、コード「封印」を言ってカードを投げれば大丈夫ですよ。』
綺羅は言われたとおりにカードを引き抜く。暴走体に向かい構え、
「ジュエルシード、シリアルＸＩ、封印！」
投げ放たれたカードは、暴走体の裂傷に刺さり、眩い光を放った。
「――――――！！！！！」
暴走体が聞き取れない悲鳴を上げ、
光が、
収束し。

綺羅の元に、カードが宙を舞って戻ってきた。キャッチしたカードには、先ほどの結晶が描かれている。
「終わった、のか？」
『はい。封印は終了しました。』
綺羅は大きくため息をついた。思い疲労がある。当たり前だ。通常時の１６倍という能力は、彼の肉体にかなりの過負荷を強いていたのだ。
『お疲れですか、マスター？』
綺羅は頷く。
「ああ。それと、１つ教えてほしいんだが。」
『なんでしょうか？』
彼はああ、と間を置き、自信たっぷりにたずねた。
「これ、どうやって元の服に戻すんだ？」

翌日。綺羅宅。
『モードリリース』と言えば元に戻ると教えてもらった綺羅は服を元に戻し、無事帰宅していた。
が、見事に寝坊してしまい、彼は今日学校に行きそびれていた。
「ふむふむ、あれは過去の遺物で遺跡に埋まっていたはずだったが、どっかの馬鹿がそれを管理ミスで散らばしてしまった、と。てか、魔法までは信じるけどさ、異世界ってどうなの？この世界はそんなにファンタジー？」
自らを「ダイダロス」と称した携帯電話（綺羅の物）は、流暢に話を続けた。
『まあ、「どうか」と聞かれたら「そうだ」と言うしかありませんね。』
「ええー…ま、いいけどさ。」
『いいんですか…？簡単に信じて。』
「信じるも何も、物的証拠があるんじゃあ信じるしかないでしょ。」
綺羅は例のカードをテーブルに投げた。八面体の青い結晶が描かれ

たカード。
『なんか、マスターって適応力高いですね。』
「ほっとけ。それより、お前は何で俺のそばにいた？何であの時起動した？それを答えてほしい。」
すると、ダイダロスは初めて言葉を詰まらせた。
『後者の質問については、私は回答する権限を与えられていません。私は上位の存在により管理されている存在に過ぎませんので。前者の回答についてお答えすると、私はあなたのお兄様により建造され、あなたへと送られました。２年ほど前でしょうかね？』
綺羅の体が僅かに跳ねた。
「兄さん、だと？兄さんは魔法や異世界に関わっていたのか？」
『ええ。あなたは記憶を失っているようですが、あなたのお兄様は確かに魔導士でした。とても良いお人でしたことを記憶しています。…惜しいお人を亡くしました。』
綺羅は急いてたずねた。
「兄さんは、どうして死んだんだ？」
だが、ダイダロスの答えは呆気なかった。
『私は回答する権限を与えられておりません。』
「そうか…」
綺羅は僅かに肩を落とした。記憶を取り戻す手がかりを見つけたと思っていたためだ。
『この世界に漂着したジュエルシードは２２個。全てこの付近に漂着したものと思われます。このままでは、ジュエルシードの暴走で一般市民に危害が及ぶ可能性があります。』
綺羅は目を細める。その「一般市民」には、なのはやアリサ、すずかも混じっている。
「分かった。どうせ、俺以外に出来るやつはいないんだろ？」
『何が分かったと？』
ダイダロスの質問に、綺羅ははっきりと答えた。
「愚問だな。ジュエルシードの封印、やるって言ってんだよ。」

『え？マスターの性格上、絶対に消極的になると思っていたのですが…』
綺羅は苦笑した。
「出来るのが俺だけなら、やるしかない。危害を及ぼしたくない人がいるしな。それに。」
『それに？』
「兄さんも魔法に関わっていたのなら、このことを通して手がかりが攫めるかも知れない。そうすれば、俺の記憶だって…」
『危険ですよ、と言ったら？』
「そんなことを心配するキャラじゃないだろ、と言う。」
『マスター、凹みますよ私。』
「勝手にしろ。」

こうして、綺羅はジュエルシードの封印を（消極的な側面も含んでいるが）やることを決意した。
これは、ほんの始まり。
綺羅は、否応なしに戦いの連鎖に巻き込まれていく。

部屋の中
一人の少年が、中空モニターを操作していた。
モニターには、ダイダロスを起動させ戦う綺羅が映し出されていた。
口元を僅かに持ち上げ、言葉を紡ぐ。
「さあ、始めよう。終わりの始まりを…」
少年はさらに別のモニターを操作すると、全てのモニターを閉じ部屋を退出した。
彼の口元に浮かんだ笑みは。
はるか高みから全てを見下ろす、超越者の高慢な笑みだった……

#3　運命

朝。
今日は普通に起きることが出来た綺羅は、いつもどおりのバスで学校に向かっていた。
思いっきり爆睡しているが。
それを見ていたアリサとすずかが小声でささやきあう。
「どうしたんだろうね？」
「さ、さあ…？」
さらに、なのはも眠ってしまっている。
「なんか変なもの食べたのかな？」
「綺羅はともかく、なのはについてそれはないでしょ。」
「確かに…」
余談であるが、彼女たちは先日にフェレットを拾っており、なのはが世話をすることになっている。
「寝ないでお世話してた、とか？」
「いやいや、病気じゃあるまいし。」
考えども答えは出ず、バスはそのまま学校の敷地内に滑り込んだ。

授業中。
「で、ここにこの公式が使えるから、この式の値が…って、聞いてる？」
教科担当が振り返った先では、綺羅が机に突っ伏して睡眠をとっていた。
「はい起きる。睡眠学習なんて出来ないんだからね？」
そこかしこで笑い声が起こり、綺羅は眠気と戦いながら授業を受けた。

綺羅が最近睡魔に襲われっぱなしなのは、勿論特定遺失捜索物――

『ジュエルシード』の捜索と封印を行っているからである。これまでに封印したそれは3つ。当初不慣れだった綺羅も場を踏むごとに慣れ、最近では効率的な戦闘技術について考える余裕すら出てきた。
「今日は発動なしか？」
綺羅がダイダロスに尋ねる。指定したもの以外に会話を聞こえなくする『念話』という技術らしい。
『そのようです。サーチも使っているので、見つかるとは思いますが。』
「俺的には見つかってほしくない側面もあるんだが…」
『見つから無ければそれに越したことはありませんよ。』
「見つかってしまうんだろ？」
綺羅の声色に憂いが混じっている。
「俺の睡眠時間が…誰かが変わりにやってくれればいいんだが」
と言うのは、彼らは先日に大規模な魔力を感知したからである。それから綺羅は「変わってくれないかな」と思っている。
まあ、過去の自分を知るためにも封印をやめるわけにはいかないのだが。
（面倒だよな、色々と…）
綺羅は外を仰ぎ、流れていくはぐれ雲を見つめた。

同時刻。
ビルの屋上に、2つの影があった。1つは、金色の長い髪をした少女のもの。もう1つは、とてつもなく大きなイヌ科の動物のものだった。
「母さんの探し物…ジュエルシードは…ここにある…」
少女が噛み砕くように言う。それにあわせ、巨大な犬が首を縦に振った。
「行こう、アルフ…母さんを待たせちゃいけないから…」
アルフと呼ばれた犬が今度ははっきりとうなずき、2つの影はビルの屋上から消えた。

その少女の手には、
しばらく前に綺羅が彼女に貸した傘が握られていた…

夜。
「くそ…今日に限って見つからないな…」
『人生そんなものですよ、マスター。』
綺羅はダイダロスといつもどおりのやり取りをしながらジュエルシードを探していた。
「機械に人生を説かれるとはな。世も末だ。」
『ひどいですよマスター。私にだって心はあります！』
「そういう問題じゃねえし」
言いながら綺羅はダイダロスのシーリングモードを呼び出し、じっくりと見つめてみる。
「これ、どっかで見たような気がするんだよな…」
確かアレはテレビで…朝にやってて…
「考えるな俺！」
『どうしました？』
「い、いや、なんでもないぞ？」
『そうですか？』
（あ、危なかった…）
妙なものが頭に浮かびかけたので、思考を強制的にシャットアウトしたのだった。
しかし、と綺羅はダイダロスのモニターを見る。携帯もかねているそのディスプレイの時刻表示は、そろそろ２０時を回りそうだった。
（宿題もあったし…あの先生課題やんないと放課後残されるんだよな…帰るか？）
やけに普通の小学生じみたことを考え、綺羅は捜索を打ち切ろうとした。その時。
『マスター！センサーに反応！ジュエルシードです！』
「何！？最高のタイミングだなおい！」

『方向は南東、距離６０です！』
「しかも近い！」
ダイダロスが言った『距離』の単位はメートルである。
「行くぞ、システム・オンライン！」
『システム、起動。』
起動コードとともに、綺羅の体が見慣れたバリアジャケットに包まれる。バリアジャケットには光の羽根が追加されているのは、綺羅が飛行魔法をマスターしたためである。
武装をチェックし、システムの走査も終了する。いざ飛び立とうとしたとき、異変は起きた。
『マスター、熱源反応です！砲撃、来ます！』
「は？…おおっと！？」
ダイダロスの警告、その数刹那後、金色の光で構成された槍が彼の体めがけて撃ちだされた。
「やばっ！？」
とっさに回避、攻撃元を仰ぐ。
そこには、長い金髪をツインテールに縛った少女が滞空していた。背後の月のせいで顔はよく分からないが、年齢は自分と同程度か。
（あの子…どっかで見たような…）
だが、彼が記憶を手繰ろうとする前に、少女は動いた。その手に握られた棒状が光の刃を形成し、綺羅に急接近してきた。
「考える暇もくれないってか！」
距離的に、腰の実体剣は間に合わない。綺羅は空のままの腕を構えた。
『フォトン・サーベル』
瞬間、綺羅の袖からバンドで留められていた剣の柄が飛び出し、彼が握ったと同時に光の刃が出現する。
間近に迫っていた少女の鎌を、綺羅がサーベルで受けた。２つの高エネルギー体が中空で十字を描き、エネルギーの波濤と眩いスパークを散らした。

このとき、両者は初めてお互いの顔を認識し。
一瞬後、弾かれたかのように離れた。
「君は…」
綺羅が息を呑む。少女も同様に固まってしまっていた。
「あなたは…」
理由は、簡単かつ明快だった。
綺羅に光の鎌で襲い掛かった少女は。
帰りのバスに乗り遅れた日、綺羅が傘を貸した少女だったのだから
――――

＃４　約束（前書き）

レイジングハート起動は都合上流してます。すいません・へ・

#4　約束

月明かりの下、2人の魔法使いは再び対峙する。だが、両者の瞳には先ほどまでの決意は無く、むしろ戸惑いと困惑に揺れているようにも見えた。
フォトンサーベルを右手に握ったまま、綺羅は心の中で舌を打つ。
（どんな運命の展開だよ、ったく…）
暫く前に傘を貸した少女。確かに綺羅は再会を願った。
だが、こんな皮肉な再会を用意しなくてもいいではないか。
（やるしかないんだよな、これって…）
目的は不明だが、目の前に滞空する彼女は綺羅のジュエルシード封印を妨害しようとした。
要するに、彼女もジュエルシードが必要、ということだ。
恐らく、自分よりも切迫した理由で。
重苦しい空気を払いのけるように、綺羅は言葉を紡いだ。
「皮肉な再会、だね。」
「ッ…」
返答は無かった。しかし、少女の顔が小さく、だが確かに歪んだ。
それは哀しみか、それとも怒りなのか。
綺羅は続けた。肩を竦め、あやすように。
「怖い顔してるね。何も取って食おうというわけじゃない。ただ、俺を攻撃した理由を聞きたいだけさ。」
「それは…」
綺羅は遮り言う。
「ジュエルシード、だね？」
「ッ！」
図星だ。何も語らずとも、彼女の美しい髪が空気を叩くような音が聞こえたし、動揺がはっきりと表情に現れている。
「まあ、俺の目的も一緒だけどさ。そうすると被るわけだ。けど、

俺はそこまでジュエルシードが必要なわけじゃない。悪いように使わないって言うんだったら道をあける。だから、アレを集める理由を教えてほしいんだ。」
このとき、綺羅は彼女がジュエルシードを集めているという確証があったわけではない。ただ、少女の表情の微細な変化を読み取ることに奇跡的に成功し、彼女はこれまでもこうしてきたのだと思っただけである。
もうひとつ、彼が対話という方法を採ったのは、自分が再会を願った彼女と戦うのが嫌だったのだ。戦ってはいけない気がしたのだ。
そして、綺羅の行動は正しく報われた。
少女が口を開き、言葉を紡ごうとしてくれたのだ。
「私が…ジュエルシードを集める理由は…」
「話す必要なんかない！」
だが、語りきる前に言葉は遮られ、なにか巨大な物体が綺羅めがけて飛びかかってきた。
「ッ！」
反射的にライフルを引き抜き、トリガーを絞るが、敵はシールドのようなものを張り、光弾を弾き飛ばした。
警戒し、大きく距離をとった綺羅がみたそれは。
「フェイト、大丈夫かい！？」
「アルフ…」
「…犬？？」
いや、正しくは犬のようななにか、か。少なくとも綺羅のしっているイヌ科の動物は言葉を発したり光の盾を出現させることはできないし、あんなに大きくもない。
『マスター、あれは使い魔です。主人と契約し、与えられた魔力により構成された魔法生物です。』
「使い魔、ねえ。どんどんファンタジーになってない俺の人生は。」
頭の中にダイダロスの声が響き、謎のイヌ科生物（？）について説明してくれた。要するに映画とかに出てくる使い魔と同じような存

在だということらしい。
アルフ、と呼ばれた使い魔が続ける。
「フェイト、構うことなんてない！敵は倒すしかないんだよ！」
（くそ、なんてことを言うんだ！）
綺羅が歯軋りをした。うまく話がまとまりそうだったのに、ここまできて状況が悪いほうへ悪いほうへと傾いている。
「けど…」
「こんなやつの話を聞いても、利用されるだけだよ！見ず知らずの奴を助けてくれる人間なんていないって、フェイトが一番良く知ってるだろう！？」
綺羅はこらえきれずに叫んだ。
「違う、そんなんじゃない！俺はただ――」
「違うものか！」
（あれは、本気の目だ――）
綺羅は、使い魔の目を見て悟った。恐らくあのアルフという使い魔は、何かの原因で人を極端に信用できなくなっている。それも、よほど重度に。
「フェイト！」
アルフがもう一度、少女の――フェイトの名を呼んだ。
フェイト、と呼ばれた少女が唇を噛み。
そして――――
「バルディッシュ、サイズフォーム…」
綺羅の祈りも虚しく、もう一度鎌を構えた。
「やるしかないのか…やるしか！」
半ば自棄になった綺羅は、フォトンサーベルを戻し実体剣を引き抜き、左手にライフルを構えた。
念話でダイダロスに通信を行う。
「高機動空中戦、いけるか？」
『お任せください。』
綺羅は背中の羽根を展開し、フェイトを見据えた。

「俺が勝ったら…理由、聞かせてもらうからな！」
大きく地を蹴り、空中に舞い上がる。視界に十字レティクルが浮かび、フェイトを捉えたところで赤く変色し固定される。ロックオンしたのだ。
「行けッ！」
立て続けにトリガーを絞る。フェイトが機動力で無駄弾たらしめるが、上位システムのバックアップを受けているダイダロスのシステムは、レティクルからフェイトを逃がさない。
「だったら…」
と、フェイトの動きが変わる。ステップを踏んで回避していた彼女が、鋭角的に動き綺羅に迫ってきた。無論1発の被弾もない。
フェイトが鎌を振りかぶる。
「行け…」
「くそッ！」
回避は叶わないと判断した綺羅は右手の実体剣で粒子の刃を受けた。激突面からすさまじいスパークが散り、深夜の閑静な住宅街をコロシアムへと変える。
「頂くよ、青二才！」
鍔競り合いを演じているそこに、アルフが飛びかかってきた。恐らく爪で引き裂くつもりだ。
「ッ、させるか！」
『フォトン・サーベル』
綺羅はすぐに反応した。ライフルを戻し、左腕の袖からサーベルの柄を引きだす。次の瞬間光剣を翻し、フェイトの鎌に叩きつけた。
「ああっ！！」
フェイトが弾き飛ばされ、綺羅はアルフの突撃軌道から逃れる。半瞬前に綺羅がいたそこをアルフの鋭い爪が通過し、背後をとった綺羅がアルフに踵を振り下ろした。
「うあああッ！」
「アルフ！」

アルフが踵落としをまともに受け、墜ちる。その姿に気をとられてできたフェイトの隙を、綺羅は逃さなかった。
「もらった！！」
「ッ！」
ほぼ不意打ちの形で実体剣を振り下ろす。フェイトはすばやく反応し鎌で受けるが、綺羅に同じ展開を繰り返す気はない。
「せやあッ！」
左手のフォトンサーベルを振り上げ、鎌の柄に叩き込む。フェイトの体が鎌に合わせて揺れ、決定的な隙を生んだ。
「チェックメイト、だ。」
「ッ・・・」
左手の光剣は、フェイトの首筋に到達する直前でぴたりと静止していた。
「フェイト！」
体を起こしたアルフが叫んだが、首に剣を突きつけられているフェイトを見るとおとなしくなった。
「さて、フェイト、って言ったかな。俺の勝ち、ってことでいい？」
フェイトは悔しげに俯いていたが、やがてコクン、と小さく頷いた。地上にいるアルフが憎々しげに言った。
「要求はなんだい？」
綺羅は肩を竦めると、フォトンサーベルを消し、実体剣を左右に振り腰に収めると言った。
「だから、俺は聞きたいだけ。フェイトがジュエルシードを何に使うのか、をね。」
アルフもフェイトも、唖然とした様子で数秒黙った。首を振るとアルフが信じられない様子で言った。
「そ、それだけなのかい？あたしはてっきり集めたジュエルシードをよこせとか自分の言うことを聞けとか言うものだと・・・」
綺羅は苦笑した。アルフは漫画でも読みすぎたのかもしれない。
「それだけだよ。言ったろ？悪いことに使うつもりじゃなきゃ道は

開けるってさ。」
フェイトもまた、呆然として言った。
「それ、本当なの？」
綺羅は頷く。
「当たり前だよ。俺は嘘をつかない。絶対にだ。」
「・・・・・・・・」
フェイトとアルフは暫くアイコンタクト（恐らく念話）をした後、フェイトが話し始めた。
「母さんが・・・」
「母さんって、親御さん？」
フェイトがコクリと頷く。
（こういう仕草も、可愛い・・・）
内心赤面している綺羅を他所に、フェイトはとつとつと話した。
「母さんが、ジュエルシードは絶対に必要なものだから、って・・・」
最後は綺羅が引き取った。
「集めてるの？」
フェイトはまた小さく頷いた。
綺羅は肩を竦めて見せ、笑顔で言った。
「なんだ、そういうことなら早く言ってくれれば良かったのに。寧ろ俺が今まで封印した奴も譲ったやりたいくらいだ！」
フェイトは驚いたように綺羅を見つめた。
「え、じゃあ・・・」
綺羅は頷いた。
「ああ、俺はフェイトの邪魔をしない。どうぞ封印してくださいってやつだよ！」
アルフもフェイトも、信じられないものを見るような目で綺羅を見ていた。
「ほんとに、譲ってくれた・・・」
「こんなやつもいるんだねえ・・・」

綺羅は最後に、
「まあ、そういうことだよ。じゃ、がんばってね。」
とだけ言うと、家の方角に向かい地面を蹴ろうとした。と、
「ちょっと待っておくれよ！」
アルフが呼び止めてきた。
（？俺、なんかしたかな・・・）
「どうしたの？」
綺羅は振り向き、言った。
アルフが続けた。
「さっきはさんざんなことを言って、虫のいい話かもしれないけど、フェイトを手伝ってやってくれないかい？」
「ッ・・・」
綺羅は小さく息を呑む。アルフの言葉は続いた。
「フェイト、この前あんたに傘を借りた。それから、フェイトはあんたの話ばっかりするんだよ。今理由を話したのだって、あんたを信用してたから。だから・・・」
綺羅は反射的に頷きそうになった。再会を願ったフェイトの隣に立つことができる。それは何より魅力的に見えた。しかし。
あの日、ダイダロスは言っていた。
『あなたのお兄様は、最後まで＜正義の味方＞になろうとして、お亡くなりになりました』
と。
正義の味方の役割を演じ、死んだ兄。そして、自分は？
綺羅は自問し。
そして・・・
「ごめん、それはできない」
とだけ言った。
フェイトの表情が歪み、アルフが済まなそうに言った。
「や、やっぱりまだ・・・」
綺羅は首を振る。

「違うんだ。俺の兄さんは、そういう立場にいて、死んだから・・・。怖いんだ。何にも関係はないけど、やっぱり怖いから・・・」
アルフが打たれたように沈み込んだ。
「ご、ごめんよ。悲しいことを思い出させたね・・・」
綺羅は悲しげに笑顔を無理やり作り言った。
「気にしないで。・・・ごめんね、フェイト、アルフ。・・・それじゃあ。」
綺羅は振り返らず、地面を蹴って飛翔した。

その後　綺羅宅
『なんであの話、受けなかったんですか？』
ダイダロスが綺羅に尋ねた。綺羅は忙しげに組まれた脚を変えながら答える。
「言ったとおりだよ。兄さんは＜正義の味方＞をやって死んだ。俺はそんなのはごめんだ。そんな役割をしたくないんだ。」
では、とダイダロスは言う。
『なぜそんなにも心配げなんですか？心残りがある証拠では？』
ダン、と綺羅が床に拳を振り下ろした。
「じゃあ、どうすればいいんだ！」
『回答することがマスターの益になるとは思えません。他人に指示をされて動くような人なのですか、あなたは？』
「それは・・・」
手伝ってくれ、と言われ頷きたかったのは嘘ではない。だが反面、そうやって生き死んだ兄は？そう考えると、一歩引いてしまう自分がいるのだ。
「俺は・・・」
ダイダロスが独り言のように言った。
『そういえば、今回の発動場所の近くに人がいましたね・・・』
綺羅は思わず聞き返した。

「何だって！？その人は・・・」
ダイダロスは続けた。
『その人自身は大丈夫ですが、フェイトさんは危ないかもしれません。』
「え！？」
『その人の願いが、＜強さ＞に類似したものだとしたら、封印に向かったフェイトさんは・・・』
綺羅は息を呑んだ。そして、携帯型のデバイスを見つめる。
それは、彼の力だ。そして、彼にはその力を扱うだけの力がまたあった。
（俺は、正義の味方にはなれない。でも・・・、せめて！）
綺羅は告げた。持てるだけの力と共に。
「システム・オンライン！」

同時刻
フェイトは苦戦していた。
発動したジュエルシードを捕捉したまではよかった。だが、そのジュエルシードは暴走体を発現させ、実体を持っていたのだ。
「フォトンランサー！」
光の槍が数個、宙を裂き疾走する。しかし。
「――――！」
暴走体が腕を振ると、槍はあっけなく消滅してしまう。
そして、反撃がくる。黒く染まった弾丸が４つ、フェイトを追う。
「ッ！」
直線軌道は回避した。しかし、この弾は屈曲し、さらに追いすがってくるのだ。
「しまった・・・！」
２つは振り切った。しかし、残りの２つが直撃コースだ。
「フェイト！」
アルフがシールドを張る。だが、攻撃力は凄まじいもので、シール

ドで相殺できたのは1発。
「ッ・・・」
最後の1発が、フェイトの体を――――
捕らえなかった。
痛みと衝撃を覚悟したフェイトが知覚したのは、金属同士が干渉しあうような鋭い音だった。
「え・・・？」
「あんたは！」
そう、とっさのタイミングでシールドを張り、フェイトを救ったのは。
「名乗り忘れていたね。俺の名は綺羅――神近綺羅。」
「キラ・・・？」
綺羅は頷いた。そのまま力任せに敵を押しのける。暴走体が弾丸を放ってくる。数は7。
（いい狙いだ。・・・だけど！）
回避した綺羅に追いすがる弾丸。
「フルオート！」
『フォトンライフル・フルオートスタンバイ』
「行けっ！」
全自動で発射された熱線は7本。綺羅には見なくてもその結末が分かった。
黒い弾丸に、己が放った弾が吸い込まれていくのが。
中空に爆発の華が咲く。2本の光剣を携え、スモークをを突っ切った綺羅が叫んだ。
「俺は確かに、正義の味方になんてなれない。けど！」
1対の光剣を翻し、暴走体の頭部に振り下ろした。
「フェイトの味方にだったら、なってやる！」
高エネルギー体が暴走体の体表を切り裂く。
「ダイダロス、シーリングモード！」
『ＡＬＬ　ＲＩＧＨＴ』

見慣れた円盤が出現し、綺羅はプレートを1枚抜き、
「ジュエルシード、シリアル?、封印！」
投げ放った。暴走体に突き刺さり、まばゆい光を放つ。
それが収束し、自らの下に舞い戻ったプレートを綺羅がキャッチする。
こうして、ジュエルシードシリアル?は封印された。

ダイダロス詳細設定（前書き）

あまりにもご都合主義なシステムばっかりなので1回はっきりさせます

ダイダロス詳細設定

詳細設定

アシストシステム

綺羅の脳波と直接リンクする。よって他者の使用は不可能。

各部神経系に作用する。

・身体能力

ニューロンに過剰な刺激を与え筋肉活動量を増大させる。

約１６倍の運動能力を発揮することが可能

・ロックオンシステム

視覚野に作用。網膜に映像を流し、対象を固定し追尾できる。

・視界モニターシステム

視覚野に作用。機体状況、身体ダメージ量、魔力生産量、残存魔力量、システム状態をリアルタイムで視界に出現させる。また、機体の重大な損傷やシステムエラーなどの情報は緊急として表示する。

各能力とも、動力は綺羅の魔力。

武装についての詳細設定

・ライフル

綺羅やリンカーコアにて生産された魔力は常に1部が圧縮されており、ライフルはそれをエネルギーパック内に保存、発射する。シングル（単発）、3点バースト（1度トリガーを引きっぱなしにすると3発まで発射できる）、フルオート（1度トリガーを引きっぱなしにすれば無制限に連射できる）の3モード。

また、魔力ブーストにより出力向上（バーストモード）も使用可能。

・フォトンサーベル

ビームサーベルのイメージで間違いない。握られた圧力に反応し、綺羅の魔力供給を受け刃を構成する。魔力シールドの干渉を大きく

受ける。ごく軽量。

・実体剣

両刃片手長剣。透き通った紅い刃を持つ。魔力シールドの干渉を受けにくい。フォトンサーベルより重量があるが、片手で使用するのに障害が起こらない範囲である。

・魔力刃ブーメラン

フォトンサーベルと同じ原理にて刃を構成するが、滑空時の刃発現維持のため、内部に魔力コンデンサーを持つ。緊急時には近接戦闘武装としても使用可能。

各武装とも、パワー源は綺羅の魔力とダイダロスのリンカーコア。綺羅やリンカーコアで生産される魔力は常に圧縮され、武装や動力、推進系に利用されている。

また、圧縮魔力を用いるシステムも登録されているようだが、ロックがされており現在利用することはできなくなっている。

#5　綺羅とフェイト（前書き）

見返して気付く。
「なのは視点０」どうしたものか

#5　綺羅とフェイト

暗いどこか

『・・・システム最上位、クリア。〜預言〜を表示します』

脳内に響く電子音声に、「彼」はただ実行、と言った。

彼は漂っていた。その空間は無重力で、全身の力を抜いて他の誰もいない空間に浮遊していた。

それでも、彼は交信していた。

全時空間情報処理収集システム『ヴァルハラ』と。

このシステムははるか昔に全ての時空間を支配しようとした馬鹿が構築したシステムで、全ての時空間に存在する情報を自動収集、自身のシステムに取り込む。そうすることで、システムを通じて世界の全てを知ることができるのだ。

（しかし、これを作った奴は本当に頭がいい。情報の有利を攫むことで、実戦を行わずとも敵を屈服させることもできることだしな）

〜預言〜が呼び出されるまでの間、彼は自身の思考の海を漂うことにした。ちょうど彼の体がそうであるように。

本当に『ヴァルハラ』を作った奴は頭が良かった。戦争における有利を、はるか太古から見越していたのだから。実際、そいつが屈服させた世界もいくつかある。

しかし、彼の者は死んだ。敗死ではない。野望が満たされたわけでもない。

その怪死の謎を握っているのが、〜預言〜のはずだった。彼はいろいろなデータベースを閲覧したが、全て〜預言〜に関連する項目は厳重なセキュリティロックが施されていたのだ。

それほど、〜預言〜というやつは危険なものなのだ。『ヴァルハラ』を構築した奴も、〜預言〜を閲覧した後に、狂って死んだ。その後にも、〜預言〜を見た奴はろくな目にあっていなかった。

しかし、彼は既に〜預言〜の深部に到達しようとしていた。そのた

めにこんな、打ち捨てられた禁忌の世界にやってきたのだ。
1つ付け加えるなら、『ヴァルハラ』を利用した奴はもう1人いる。
神近翼、という人間だ。
（まあ、奴も～預言～を見て狂わなかった時点で、ヒトとは言い難いか。）
余談であるが、綺羅のデバイス『ダイダロス』も『ヴァルハラ』のバックアップを受けている。反面、干渉も受けるが。
「・・・来たか」
～預言～が呼び出された。膨大な情報が、彼の裡に流れ込んでいく。
～預言～とは、記憶の塊だ。遥か昔、まだヒトがいなかった時代に、運命を決めるカミサマとやらが見た夢の記憶だ。
そして、その夢は叶ってきた。『ヴァルハラ』も、それを構築した馬鹿も、きちんと登場する。
もちろん、今～預言～を見ている彼もいた。
情報が流れていく。常人が見たら情報量に耐え切れず脳が融解するレベルだ。しかし彼は、余計な記憶を『ヴァルハラ』へと流し、必要な情報だけを取り込んでいく。
「違う・・・もっと深くだ」
彼は映像を早送りする。彼が見たいのはこんな浅瀬にあるものではない。もっと深部。奴が、このシステムを作った奴が見たものを。
『1フリスト終了。更に深部へとアクセスしますか？』
彼はまた実行、と唱えた。更に深部へと潜っていく。
早送りされていく～預言～。その中には、綺羅も、フェイトも出てくる。だが、ここではない。しかし、近かった。
『2フリスト終了。更に深部へ、最深部3フリストにアクセスしますか？』
彼は唇を持ち上げ、やれ、と声に出した。
瞬間。
流れていく。支配者を狂わせた文字の羅列が。ここだけは映像ではなく、文字で綴られていた。ヒトの世界にはない文字で。

だが、彼には読めた。恐らく古代の支配者にも、神近翼にも読めたのだろう。
恐ろしい勢いで、恐ろしいことが記された文字がシフトしていく。
なるほど、と彼は思う。確かにこれは、永遠の栄華を望んだ支配者には耐え切れぬものであっただろう。
だが、彼は。
「その程度か？」
とだけ言った。同時に。
『～預言～の再生は終了しました。～預言～の再生は・・・』
電子音声が響き、～預言～の終了を告げた。確かに、恐るべきものではあったが、彼にしてみればくだらないと切り捨てられるものであった。
「シーンサーチ。座標・・・」
更にもう1つ、彼は欲しかった情報が出てくるシーンを抜き出し、所持していた端末に書き写した。
もう用はない。
彼は僅かに哂い、その空間から退出した。

地球
ジュエルシードを封印した綺羅は、フォトンサーベルを収納するとフェイトの前にゆっくりと着地した。茫然自失としているフェイトに、綺羅は声をかける。
「間に合ってよかった。怪我はしてない？」
その言葉で我に返ったフェイトは、こくこくこく。連続で頷いた。
「え、あ、うん、大丈夫。」
彼は良かった、と言うと、アルフにも言った。
「悪いな、変なこと言って。ジュエルシードの封印、俺にも手伝わせてくれないかな」
と、フェイトとアルフの声が重なった。
「いいの！？」

「ほんとかい！？」
綺羅は頷く。
「ああ。俺にできることなんて限られてるけど、それでも、俺にできることをしたいんだ。」
アルフがきょとんとしている。
「な、なんか・・・キャラ変わってない？」
綺羅は苦笑する。
「分かったんだよ。フェイトが危ない、ってダイダロスが言ったとき、俺は反射的に助けたい、って思った。それが俺の本心なんだとも。こうしたかったんだ、最初から。」
でも、とフェイトが言った。
「キラの迷惑になるんじゃ・・・それに、お兄さんのことも・・・」
綺羅はあんなのただの言い訳だよ、と言った後、続けた。
「俺と兄さんは違う。それに、正義の味方じゃない。フェイトの味方だ。」
フェイトはまた赤面癖をひろうすると、何度か噛みそうになりながらも、ありがとう、とだけ何とか言った。
綺羅は、礼を言うのはこっちのほうさ、と言った後、
「で、まあ、勢いで出てきてしまったわけなんだけれども、これからどうするの？とりあえず今日は解散？連絡は念話を使えばいいとして、俺は学校以外ならいつでも、まあ授業中でも行けるからさ。」
じゃあそういうことで、と綺羅が背を向けたとき。
「あ、ちょっと待って！」
アルフに呼び止められた。こいつ、呼び止めるの好きだな、と思いつつ振り向く。
「どうした？」
アルフは言いにくそうに言う。
「ええとだね・・・ジュエルシード封印以外にも手伝って、というかお願いしたいことがあるんだよ・・・」
綺羅はなにかな、と聞く。フェイトが言っちゃ駄目、と言った仕草

を見せているがアルフには見えているのかスルーしているのか。
「その、フェイト、この世界に来てからあんまりご飯とか食べてないんだよ。生活もめちゃくちゃだし。」
「はあ。で？」
「キラの家で、お世話になるわけにはいかないかい？」
フェイトが稲妻に打たれたような表情で固まる。いや、綺羅は実際打たれそうになったのだが。
あれは、なんというか「断られたらどうするの！？」とかそういう風に見える。
まあ、どっちにせよ答えは決まっているが。
「ん？別にいいよ？」
「ホントに！？」
なぜか金縛りから解けたフェイトが声を上げた。
「ああ、別に飯なんて1人分も3人分も同じだし、そのほうがいろいろとうまくいくだろうし。」
寧ろこっちからお願いしたいくらいなのは秘密である。
（というかフェイト、実は凄く表情豊かなんだな・・・）
そんなことを考えて赤面する綺羅も、十分表情豊かだ。
「ええと、じゃあ荷物は明日運んでいいかな？今日はちょっと疲れちゃった」
綺羅はそうだね、と言うとこっちだよ、とフェイトを自宅にまで案内した。
余談ではあるが、最後尾の人間モード（？）のアルフがニヤニヤしているのが気になると言えば気になった。

綺羅宅

「んで、風呂があっちで、洗面所があっち。向こうがリビング・ダイニング。寝室は適当に使ってくれ。」
フェイトを家に上げた綺羅は、自宅の構成や各部屋の配置を説明した。フェイト用の鍵も作らなきゃだな、と小さく呟く。

と、ダイダロスから念話が届く。
『あれ、一緒に寝るんじゃないのですか？』
「叩き折るぞ貴様！」
「？キラ、どうかした？」
「あ、いやなんでもない。あははは・・・」
反射的に声帯が震えたらしい。
『やっぱりバリバリ意識しちゃってますねえ。』
『わかってるんなら黙っててくれませんかねえ！』
念話で壮絶なバトルが繰り広げられているのは露知らず、フェイトはシャワーを浴びに行った。
綺羅はリビングに引っ込むと、ソファに転がった。
と。
「あれ、覗きに行ったりしないのかい？」
ソファから転げ落ちた。
「どーしてどいつもこいつも俺を変態扱いするんだ！」
アルフ、大爆笑。
「いやいや、まんざらじゃないかもよ？」
「ざっけんな！と言うかだいぶフレンドリーなのな・・・」
アルフはそうかい？と首をかしげると、
「まあ、そんな奴には見えないしねえ。でも、許されるのは今のうちだよ？」
と言い、欠伸をしながら2階にひっこんで行った。
綺羅はふむ、と頷き、
「やんぱ変態扱いされてるね、俺・・・」
がっくりと項垂れた。

その夜　フェイトの寝室
「寝れない・・・」
何度と無く寝返りを打つフェイト。寝ようとすればするほど、頭の中に綺羅の屈託のない笑顔や、人を食ったような皮肉で、しかし魅

力的な表情がフラッシュバックする。
そして。
『俺は正義の味方になんてなれない。けど、フェイトの味方になら、なってやる！』
あの台詞が繰り返される。そのたびに赤面し、枕を抱き寄せる。
「こりゃ、またずいぶんと重症だねえ・・・。」
アルフが呆れたように苦笑していた。
（キラ、かっこよかった・・・）
幾度と無く繰り替えされる思考を強制的にシャットアウトするも、やはりループのように繰り返される記憶。
（早く寝ないと。明日は荷物の移動をするんだから・・・）
理由付けに何とか成功し、眠りにつくことに成功するフェイト。
その胸に、新たな生活への希望と綺羅への想いを抱えて。

同時刻　綺羅の寝室
「フェイト、か・・・」
『どうしました？』
「いや、一気にファンタジーになったよな、と思ってさ。暫く前までは魔法すら知らなかったのに。てか、魔法すら、とか行ってる時点でおかしいよな。」
『あくまでこの地球と言う世界で、と限定すればですが。』
「そうですか。どうせ俺は田舎者ですよ。」
綺羅は寝返りを打って目を閉じる。
「まあ、フェイトともう一回合えたっつーかこういうシチュになったのは明らかに感謝すべきなんだろうけどな。」
と、ダイダロスが自動で動き、綺羅の頭をごつん、と殴った。
『メタな発言は禁止です！』
「理不尽だろおい！」
また夜が更けていくのであった。

#5　綺羅とフェイト（後書き）

漆黒（以後漆）えーと、この回からあとがきを書いてみました。
綺羅（以後綺）また妙な事を・・・つーかこの方式デジャヴなんだが・・・
漆　メタな発言禁止！
綺　ってーな！何様だ！
漆　作者（神）
綺　なにが（神）だ！お前なんて（馬）で十分だ！文才も無いくせに！
漆　ちょｗｗそれは突っ込まないでｗｗ
フェイト（以後フェ）まあまあ落ち着いてよ。それより漆黒はバイト大丈夫？
漆　過労死しそうなほど忙しいね。
フェ　こんなことしてる場合じゃないんじゃ・・・
綺　大丈夫だよ。馬鹿は死ななきゃ直らないって言うし。
漆　お前にそっくりそのまま返すわ、色馬鹿。
綺　なんだと！この歩く性犯罪者！
漆　同意の上だ！犯罪じゃない！
フェ　はい落ち着く！（ガスッ）
漆・綺　がはっ！？
フェ　落ち着いた？
漆　出血量が落ち着けないレベル。
フェ　あとがきだし。補正かかってるでしょ？
綺　なんかいい感じに壊れてるなお前・・・
漆　こうなったら奥義だ。作者権限で落ち着かせる！
綺　まとめられないのを秘匿した！？
漆　さっさと解説へ。
フェ　スルースキルが凄いね・・・

綺　まあいいけどな。序盤はなんだありゃ？
漆　複線だよ。割とシリーズ終盤まで回収しないのもある。
フェ　～預言～とか、悪い予感しかしないよ・・・
漆　悪いものじゃなかったら物語が成立しないことに気付け。
綺　お前の都合だがな。
漆　（ガン無視）あとは、分かりにくい綺羅の家の配置とかは追って公開していく予定だな。
フェ　たしかに分かりにくいよね。挿絵とかないし。
漆　俺の画力は絶望的だ。
綺　ざまあ（笑）
漆　裁きっ！
綺　ぎゃっ！？金盥！？
フェ　脱線してるよっ！！
漆　まあ、話すこともないし〆に入るか。
綺　次回予告！
漆　フェイトと協力してジュエルシードを回収し始めた綺羅！
フェ　しかし、その前に立ちはがかるもう1組の収集者！
綺　果たしてその正体は？
3人　お楽しみに！！

この方式のあとがきを発明した人、勝手にアイディアを使わせていただきました。
気分を害されたら申し訳ありません。ご容赦くださいm（＿＿）m

#6　もう1人（前書き）

最初にちょいちょい複線が入ります。分かりにくくてごめんなさい。

#6　もう1人

それは、いつだったのだろうか。
『ここにしよう』
あの人がそう言ったのは。
なぜ、と訊く自分に、彼は言った。
『平和なことはいいことだ。だが、この世界の連中の悩みは何だと思う？』
『分からない』
『平和なことさ。平和で、退屈なのが悩みなのさ。』
そう、と答え、続ける。
『優しいのね、この世界は。』
彼が微笑む。
『全くだ。この世界は優しすぎる。なにせ恋に破れたとか、勉強がうまくいかないというだけで死ねる世界だからね。』
微笑む自分。
『なら、彼らは何に絶望するのかしら？』
彼はふむ、と考えた。
『さあね。僕らでは分かるはずもない。・・・不公平だよ。世の中には母親の前で娘が犯され殺されようが、人買いに奴隷として売られようが耐えるしかない世界だってある。それなのに、ここの奴らときたら、働くのが面倒だ、給料が安い、なんてばかり言っている。何故だろうね？』
独白のように続けられた。
『簡単さ。この世界の【絶望】が少なくなるように、誰かが運命を弄っている。腹が立つよ。世界は誰のものだと思っている？』
思い出すのにも疲れたため、やめる。目を閉じる。
「この世界に、【幸福】を」
とだけ呟いて。

地球
神近綺羅のここ最近の朝は早い。まず顔を洗い、用を足して、歯も磨き、髪を整える。
その後は、朝食の準備である。これが忙しい。
彼の家には、住人が2人増えたのだから。
フライパンを返しながら、トースターにパンを放り込む。目玉焼きを皿に盛ると、ケトルの湯をコーヒーカップへ。フェイトの砂糖の好みは調査済みだ。
トースターのパンが跳ね上がる直前に、フェイトの寝室へ。
「朝だぞー・・・っと」
可愛らしい寝顔に胸を高鳴らせながらゆさぶる。やがて彼女が目を覚まし、洗濯機を操作していたアルフも顔を見せた。
寝癖がついたフェイトの金髪を整えるのも（何故か）綺羅の仕事である。アイロンとドライヤーを操り、ぼさぼさになった髪を元に戻す。
そこで、やっと彼は食事にありつくのだ。

「美味しい・・・」
「それはよかった。」
アルフ、フェイト、綺羅の3人で食卓を囲む。初めて他人に振舞うものであったため不安ではあったが、どうやら問題はなさそうだ。
フェイトが焦げ目のついたベーコンを咀嚼する。アルフはバターの載せすぎのトースターと格闘している。
（昔は、俺もこんな風だったのかな・・・？）
いくら失くしたと言っても、記憶は残っている。兄の顔はなんとなくだが覚えているし、よく言っていたことも思い出すことができる。
（兄さん、俺のことどう思ってるのかな・・・？）
兄と同じような道を歩むこととなった綺羅。逝去した神近翼は彼にどのような感情を抱いているのか。

ふと浮かんだ光景では、翼は「血は争えないって奴か？」とこれ以上ないほど苦笑していた。
（確かに、血は争えないな・・・けど、悪くない）
「キラ？どうかした？」
食べ終わったフェイトの声で我に返った綺羅は、「なんでもないよ」と手を振るに留めた。

数時間後
「よ・・・っと。これで最後か？」
「うん、ありがと」
「気にすんなよ。もとはと言えば善意の押し付けなんだからな」
「そんなことないよ。やっぱり嬉しいから。」
「そっか、そりゃ良かった」
綺羅とフェイトは予定してあった荷物の運び込みを終え、ひと段落をついていた。アルフはと言うと、「あとはごゆっくり」と言い残して先ほどどこかへ行ってしまった。
時刻は夕刻。家路に着く子供たちの声、道路を行きかう車のエンジン音、空を行きかう鳥たち。その全てがＢＧＭとなり、２人をドレスアップいていた。
太陽が力尽きたように、地平線に沈んでいく。
「綺麗だね・・・」
魅入られたように呟くフェイト。
「だろ？お気に入りの景色なんだ。」
彼らはそれ以上何も言わず、ただ紅く輝く太陽を見つめた。
沈み行く夕日はとても壮麗で、巨大で。見つめている２人はとてつもなくちっぽけに見えた。
そんな中で、すがる様に、フェイトの左手が綺羅の右手に伸ばされてゆく。
夕闇が迫る中、２つの手のひらは近づき、やがて。
太陽が完全に沈んだその瞬間、綺羅の右手をフェイトの左手が包み

込んだ。
「フェイト・・・？」
綺羅が振り向くが、フェイトは沈んでしまった太陽を惜しむかのように、ただ海と同化してしまった地平線を見つめていた。

翌日
「こっち、だよな？」
『私のセンサーは絶対ですよ？何せマスターの魔力を頂いておりますので！』
「安心していいのかそれ」
『もちろん！』
そうかい、と言い、綺羅は前を見据えた。綺羅とフェイトは約束どおり共にジュエルシードを探索していたが、あさっての方向にダイダロスのセンサーが反応したため、長距離の移動を余儀なくされたのだ。
「フェイト、疲れない？」
フェイトを気遣う綺羅に、フェイトはうん、とうなずく。
「大丈夫だよ。ありがと。」
「そっか。早く終わらせて休もうな。」
「そうだね。」
綺羅はそれ以上言及しないで、ダイダロスのセンサーが反応している地点へ向かう。
１つ気になることと言えば。
「この近く、誰かの家が・・・」
記憶にもやがかかったまま、綺羅とフェイトは歩んでいく。暫く後。
『マスター、反応出ました。距離１８０、民家の敷地内です！』
待望の報告に、綺羅の頬がゆるむ。
「よし、行こう。システム・オンライン！」
『バリアジャケット、セットアップ』
「行くよ、バルデッィシュ」

『ＹＥＳ，ＳＩＲ』
２人の姿がバリアジャケットに包まれ、２つの影が宙に舞った。
「この方角・・・やはりすずかの家・・・」
綺羅が思わず呟く。想像通り、ジュエルシードの反応は月村すずかの家の敷地内だ。発動させた奴の願いが厄介でなければいいが、と思う中。
「ねえキラ、あれ、何？」
視界の入ったのは。
「・・・・・・何って・・・、猫、じゃないか？」
あまりにも巨大化した猫だった。アルフなんてレベルじゃない。もはやアフリカゾウとかそういうレベルだ。
「えっと、じゃあジュエルシードを発動させたのは・・・」
「ああ・・・。『大きくなりたい』って願ったんだろうな・・・」
「にしても、あれはないねえ。」
と、ひょっこりアルフが顔を出した。神出鬼没なのは気にしない。
「全くだ。あれじゃすずかもいい迷惑だよ。封印してもとにもどしてやろうぜ。」
そういうと、興が殺がれた綺羅は急降下を始める。あの距離で、敵意がないならそのまま封印可能だ。
「シーリングモード」
『ＡＬＬ　ＲＩＧＨＴ』
ディスクからプレートを抜くと、猫に向かって構える・・・
「・・・？あれは・・・」
彼が見たのは、白いドレスのような装束に身を包み、杖のようなものを猫に向けている人影・・・
「！収集者！？」
綺羅は反射的にディスクを戻し、ライフルを引き抜く。非殺傷設定で、牽制の銃火を放つ。
対し、収集者はすばやく反応し、こちらを振り向く。その人物は――

「なのは・・・か？」
「綺羅君・・・？どうして・・・？」
ふりむいたその人は、綺羅の級友で、記憶の無くなった綺羅に世話を焼いてくれた。
高町なのはであった。

#6　もう1人（後書き）

漆　というわけで、第6話でした。
綺　俺とフェイトの2ショットとか、なのはとの対面とか、いそがしい話だったな。
漆　一気に書いたらこうなった。明日バイトだから更新できんし。
綺　お前の都合かよ。そういや他のみんなは？
漆　寝たんじゃね？
綺　寝たの！？
漆　そういう設定（蹴
綺　うん、もう突っ込まんわ。で、解説行くか。
漆　物分りのいい奴は好きですよっと。しかし、早くもフラグぶんぶんだな。
綺　一応無印で決着がつくんだろ？
漆　まあな。収拾つけないとA，sまで持ち越しなわけだし。んなことはしないけど。
綺　文才に期待だ。で、最初のアレは？～預言～関連か？
漆　ご名答だ。～預言～が解決するのは最終盤だから、読者の皆様にはもやもやした感が抜けないがご了承してもらうしかないな。
綺　絶望だの幸福だの中2病だなお前・・・
漆　永遠の病さね。さて、眠くなったところで次回予告やって〆にしようか。
綺　何だと思ってるのお前？読者あってこそのこの作品だろ！？
漆　ほんとに眠いんです。誤字脱字は後から修正します。
綺　わかったよ
漆　ついに向かい合った綺羅となのは！
綺　俺はフェイトとなのはの間で揺れ動く！
漆　果たして綺羅の決断は！
2人　お楽しみに！

#7　友達

「なのは・・・か？」
「綺羅・・・君？」
すずか邸の庭。友だったはずの２人の魔法使いが向かい合っていた。
だが、それは友同士が見せる表情ではなく、敵同士が見せる表情でもなかった。
綺羅は目を細めた。状況から察するに、暫く前の大規模な魔力反応はなのはのものらしい。そこまでは別にいい。細かく言えば良くないが、いい。だが、まさか彼女もジュエルシードを封印して回っていたのなら――
否定できる材料は見つからない。それに、もしそう仮定すれば、全ての辻褄が合う。以前からジュエルシードが見つかりにくくなっていること、少し前に発動したジュエルシードが途中で静まってしまったことにも。
（けど、認められるわけにはいかないよなあ。感傷に浸るわけじゃないが・・・）
滞空しているフェイトも、状況についていけないようだ。アルフにしても同じである。当事者である綺羅にもついていけないのだから当たり前か。
「お前も、か？」
時間自体が停まったような空気のなか、先に言葉を発したのは綺羅だった。ライフルを握る手に僅かに力を込め、続ける。
「ジュエルシードの封印をしているのは、俺たちだけじゃかったのか？」
なのはが僅かに息を呑んだのが分かった。図星か。
いつも通りに手に握るライフルが、鋼鉄の塊のように重かった。
「綺羅君も、ジュエルシードを・・・」
なのはが言葉を発し、場の空気が僅かに軽くなった。綺羅は僅かに

唇を歪め、言う。
「そうさ。そうじゃなかったら、こんなことにはならないさ。」
「ジュエルシードは危険なものなんだよ？だから・・・」
綺羅は遮った。
「それでも、こちらには必要なものなんだ。だから、渡すわけにはいかない。」
「だけど！」
「キラ・・・？」
フェイトが気がかりそうな声を上げた。気になるのも当たり前だろう。だが、綺羅にはフォローすることもできない。彼の胸中は、大波のように揺れ動いていたのだ。
なのはは友達だった。学校でも、恐らく1番仲のいい親友だった。たくさんの時間を共有し、心を通わせた人。
ではフェイトは？友達？知り合い？いや・・・
綺羅は目を閉じていた。自分がどうすればいいのか。なのはにもジュエルシードを集めるだけの理由があるのだろう。恐らく、フェイトのそれと同等、いやそれ以上の。
どちらにせよ、綺羅が選べるのは片方だった。どちらかを取り、もう片方を切り捨てるしかない。どちらもを取るには、綺羅にはあまりにも非力で、幼かった。
なのはの純粋な笑顔や、困ったように笑って自分を気にかけてくれた姿が脳裏に浮かんだ。だが、フェイトにしても同様だった。自分が封印を手伝うと言ったときの嬉しそうな表情。すがるように綺羅の手を握ったときの、守ってあげたくなる仕草。そして、あの言葉。
『俺は正義の味方にはなれない。けど、フェイトの味方になら、なってやる！』
そう。確かにそう言った。フェイトの味方でいると。約束したのだ。
だから――――
長考の末の、綺羅の決断は。
ゆっくりと目を開き、告げる。

「ジュエルシードの封印を、邪魔させるわけには行かない。ぶつかるというなら、俺はなのはと戦う。」
「・・・っ」
綺羅は空へ上がり、フェイトの隣に身を寄せた。
「キラ！」
フェイトの声に綺羅は振り返り、微笑んで見せた。
「大丈夫、俺はフェイトの味方だから。お前に降りかかる火の粉は、俺が払うから。」
「キラ・・・！」
微笑んだその表情に、迷いはなかった。
それから綺羅はなのはに振り返り、言った。
「そういうことだ。悪いな、なのは。」
「綺羅君・・・どうして・・・」
綺羅は実体剣を抜いた。しゃらり、と音がなり流麗な刃が姿を現す。
「引かないなら、戦うしかないな！」
急降下し、左手に持ち替えたライフルを連射する。なのはは反応できず、直撃かと思われたが――
「なのは！」
この場にいる誰のものでもない声が響き、なのはの頭上に複雑な魔方陣が出現する。綺羅が使っているショックアブソーバーと同じシステムなのか、それは綺羅の放った熱線を全て弾き、霧散させた。
僅かに目を細めた綺羅。出力は相当なものだ。たやすい砲撃では突破できない。だが。
「だったら・・・直接攻撃だ！」
実体剣【エシュリデータ】と呼称するらしい――を構え、一直線に突っ込む。砲撃が来るかと思ったがそんなことはなく、直線軌道のまま到達する。
「頂く！」
鎮圧（クエル）モードに設定された刃がなのはに到達する直前、彼女は手にしていた杖を突き出し、エシュリデータを受け止めた。両者は互いに

引かず、鍔迫り合いの格好となる。
やがて、じり、じりと綺羅が押され始めた。飛び込んだ勢いを乗せたエネルギーが、なのはの魔力出力に負けているのだ。
「このままじゃ・・・！」
このまま押し切られれば、綺羅と言えどノーダメージでは済まない。しかし、綺羅は僅かに唇を持ち上げた。そして。
「フォトンランサー」
綺羅の後ろ側に隠れていたフェイトが姿を見せ、金色の槍を放った。突発的な事象になのはは対応できず、直撃を受け、墜落する刹那、減速しゅっくりと地面に降ろされた。気絶はしているようだが、非殺傷に設定されているのでじきに目を覚ますだろう。
そのまま彼らは猫からジュエルシードを切り離し、封印処理を施した。その後まずアルフが撤収し、フェイトもそれに倣った。綺羅も、墜落したなのはの周囲をうろつく小動物を確認した後、フェイトの背を追った。
フェイトがフォトンランサーを放つ際に言った、「ごめんね」という言葉を胸にしまいこんで。

約1時間後　綺羅宅
「それで、あの子はキラの友達なの？」
帰宅した綺羅は案の定フェイトから質問（尋問？）を受けていた。
フェイトの問いに、別に隠すことでもないため、素直にうなずく。
「ああ。同じクラスの、友達だ。」
『友達』という部分をやや強調する。なんら意図があったわけではないが、無意識にそうなったのだ。
「そう・・・なんだ」
フェイトがどこか安堵したような、寂しがるような表情を見せた。
綺羅は相貌を崩すと、言った。
「どうかしたのか？」
フェイトははっとしたように顔を上げ、首を振った。

「ううん、なんでもないよ。キラには友達がいるんだな、って思ったの。」
綺羅は一瞬きょとんとする。しかしすぐに、フェイトに笑いかけて見せた。
「何言ってんだよ。俺たちだって友達だろ？」
「え・・・？」
「いや、そんな素で疑問符出されても困るんだが」
しかしその言葉はフェイトに届いていないようで、
「ホント・・・？」
とだけ帰ってきた。
その言葉で、綺羅は理解する。フェイトの寂しい表情の理由も。さっきから元気がない理由も。
フェイトは、不安なのだ。綺羅に、フェイト以外になのはという『特別な存在』がいるから。なのはの方へ行ってしまわないかが不安なのだろう。
だから、彼は言った。
「助けるよ」
「え・・・？」
「フェイトが困っていたら、俺は必ずフェイトを助ける。絶対に、見放したりしない。約束する、いいや、誓うよ。俺は、俺だけはどんなときでもフェイトの味方でいる。」
フェイトははじめぽかんとしていたが、言葉が脳に届くにしたがって、いつもの急速赤面癖を披露した。
だが、それもすぐに収まり、綺羅はフェイトの頬を伝う一筋の光を見つけた。
「フェイト・・・・？泣いてるの？」
綺羅の言葉に、フェイトは泣きながら笑顔を作った。
「うん・・・。おかしいの・・・嬉しいのに。嬉しいのに、涙が出るの・・・」
その笑顔は一片の無理の欠片もない、綺羅を魅了するフェイトの、

純粋な笑顔だった。
「それでいいんだよ。人ってのは、そういう風に出来てるんだ・・・」
フェイトはそれ以上何も言わず、ただ綺羅の胸に顔を埋めた。綺羅はやさしく微笑み、やはり何も言わず、フェイトの美しい金髪をなでた。
この人だけは、自分の手で守る。その誓いを抱いて。
2階から降りてきたアルフが、優しく気遣うかのように、入りかけたリビングから退出した。

#8　擦れ違う視線（前書き）

タイトルパクってるけど気にしない気にしないｗｗ

#8　擦れ違う視線

高町なのは。
どこにでもいる小学3年生。
しかし、ひょんなことから人語を解するフェレットを保護し、デバイス【レイジングハート】の所有者となる。
同じような経緯で【ダイダロス】のマスターとなった神近綺羅と違い、積極的な理由によりジュエルシードの収集、封印を行っている少女である。

月村すずか邸の庭で、フェイトが放ったフォトンランサーによって墜落した少女でもある。

墜落しかけたところを危うく助けられたなのはは、逃げ出したユーノを追って、庭で転び頭を打ったとして保護された。
アリサとすずかには物凄く心配されたが、本当は頭を打ったわけでもないので、負傷などもない。
しかし、肉体的な側面ではなく、精神的な面で、彼女は大きなショックを受けていた。
神近綺羅。
彼は、なのはに決別とも取れる言葉を発した。彼の扱う剣が発する紅い輝きを思い出し、なのはの背筋が凍る。
「なのは？どうかしたの？」
アリサに顔を覗き込まれ、あわてて首を振る。
「ううん、なんでもないよ。」
「そう？ならいいけど。」
アリサやすずかに『綺羅に襲われた』などとは言うわけにはいかない。
なのはは、両親が迎えに来るまで、アリサ、すずかと談笑して過ご

した。
心の裡に、ちくりとした『何か』を抱えながら。

同時刻。
「キラ？何してるの？」
自室でペンを走らせていた綺羅は、ドアを開けて入ってきたフェイトに振り向いた。
「ん、ああ。宿題だよ。」
そう。彼は今、ダイダロスを起動してから溜めに溜めてしまっていた課題に取り組んでいたのだ。
教師曰く、「提出しないと評定を落とす」だとか。
さすがに、これ以上評価を落とされたくはないので、彼はこうしてペンを動かすに至っている。
「へえ・・・。ちょっと見せて。手伝うよ。」
フェイトは綺羅の隣に腰をおろし、綺羅が取り組んでいる問題に目を落とした。
綺羅があわてて言う。
「いいんだって。フェイトは寝とけ。明日もまた、早くに探しに出るんだろ？」
フェイトは綺羅と同時刻に家を出て、綺羅は学校から出てすぐに合流するという手はずになっていた。
フェイトは首を振った。
「気にしないで。私が手伝いたいだけだから。・・・ええと、これはこの定理が使えるから、この値が４になるから・・・」
「フェイト、頭いいんだな・・・」
フェイトに手伝ってもらうと、問題が次々と処理できていく。部屋には、心地いい緊張感と、ペンが紙の上を走る音のみが響いた。

数刻後。
「終わっ、た・・・」

「ね？２人でやれば早いでしょ？」
綺羅はうなずいた。
「ああ、サンキューな。」
「いいんだよ。いつもご飯とか、いろいろ迷惑かけてるのに・・・」
綺羅は１つため息をつく。
「迷惑なんかじゃないっての。・・・もう遅いし、寝ようぜ。」
携帯の時刻表示は、すでに２６：００を回っていた。
フェイトが欠伸をして、うん、と言った。
「そうだね。」

翌日。
なのはは、通学用のバスに揺られていた。いつもの席には、アリサ、すずかが座っている。
綺羅の姿は、ない。
（綺羅君は、やっぱり・・・）
あのときの綺羅は、怖かった。剣を構えた彼に表情はなく、ただ冷酷な敵意だけがあった。
そして、彼と共にいた金髪の少女。綺羅の言葉から推測するに、２人は行動を共にしているだろう。
ならば、自分と言う邪魔者がいると知ったなら、綺羅は学校など無視するのではないか？
なのはの思考がマイナスへ傾いたとき、彼女の端末がメールの着信を知らせ振動した。
ｆｒｏｍは、『神近綺羅』。
なのはは反射的に端末を開く。
題名：無題。
本文：学校に着いたら、屋上に来てくれ。話がある。
「なのはちゃん、何のメール？」
じっと考え込んでいたなのはに、すずかが声をかけた。すずかにメールを見られてはいけない。

「ううん、なんでもない。業者か何かだよ。」
アリサが怪訝な顔をした。
「なんかさ、なのは最近おかしくない？昨日は何にもない所で転んでるし、今だってなんか・・・」
なのはは否定し、もう1度首を横に振った。
「本当になんでもないよ。ちょっと疲れてるかも。」
アリサは「そう。」とだけ言うと、前を向いた。広大な学校の敷地に、バスが滑り込んでいく。
対面の時は、すぐそこであった。

屋上
綺羅は、屋上のフェンスにもたれ、待機状態のダイダロスを弄っていた。
『マスター、落ち着きないですね。』
ため息をつく。
「当たり前だ。何せ、昨日斬りかかった奴と話すんだからな。」
『ですが、後悔はしていないのでしょう？』
綺羅は憔悴したような笑みを貼り付けた。
「全くない、と言えば嘘になるさ。けど俺に、フェイトを見捨てるなんて出来るわけがない。」
『では、なのはさんは？』
綺羅は僅かに表情を歪めた。
「言いにくいことをはっきり言うんだな、お前は。」
『それもキャラと割り切って下さい。』
綺羅は表情を戻す。
「もう慣れたよ。・・・分かってるさ。俺はフェイトの味方でいるって約束した。だから、なのはとぶつかるしかない。あいつが、手を引く以外は。」
ダイダロスが静かになった。同時に、階段を上る音が綺羅の聴覚をくすぐった。

「・・・来たか」
ドアが、重い音と共に開いた。
なのはが屋上の扉を開くと、綺羅は僅かな笑みを浮かべ、フェンスにもたれていた。
「メール、見たよ」
綺羅は笑う。彼がいつも浮かべている、人を食ったような微笑み。
「じゃなきゃ、こんなところには来ないよな？」
返答のないことを是としたか、綺羅が続ける。
「話ってのは簡単だ。ジュエルシードから手を引いてもらいたい。残りの封印は俺たちがやる。」
なのはは僅かに顎を引いた。やはり、手を引けと言ってきたか。
「けど、あれはちゃんとした場所に返さなきゃいけないんだよ？だから・・・」
なのはの言葉は、綺羅に遮られた。
「手を引け、と言った。それに、あれは俺たちに必要なものだ。返せと言われて返すわけには行かない。」
「どうして、必要なの？」
なのはは尋ねた。それほど、綺羅の目は真剣だった。彼女が、1度も見たことはないほど。
「・・・言えないな。言う必要もない。」
「でも！私にはどうしようもないかもしれないけど、それでも、話してくれなきゃ分からないよ！」
なのはは食い下がった。しかし。
「話してどうなる？」
回答は、綺羅がなのはに突きつけた実体剣だった。そのままの勢いで、言う。
「俺が理由を話せば、お前は納得して引き下がるのか？そういうわけには行かないことくらい、俺でもわかる。なのはにも、ジュエルシードを封印しなければならない理由もあるはずだ。譲れぬものが。

だが、優しいなのはのことだ。こちら側の理由を話せば、お前はこちらとそちらの間で彷徨うことになる。同じ理由で、俺はお前の事情を聞かない。割り切る自信などないから。そしてお前に、こちらの事情を割り切り、封印を続けられるとは思わない。俺たちは封印を続ける。そして再びお前と会ったそのときは」
綺羅は実体剣をしゃらりと鳴らした。
「俺は、なのはを倒すことになる」
「綺羅・・・君・・・」
息を呑むなのはを尻目に、綺羅はドアに向かって歩き出した。もう用はない。そう言わんばかりに。
「綺羅君、待って！」
呼び止めたなのはに、綺羅は向き直った。
そして、言った。
「割り切れよ、なのは。・・・でないと、死ぬぞ。」
綺羅はもう振り返らなかった。２人の心を断ち切るように、金属製のドアが重い音を立てて閉まる。
「綺羅君・・・」
かつては、誰よりも仲のいい親友だったはずなのに。
誰よりも近かった距離が、なのはには遥かな空の星々より遠く感じた――――

＃8　擦れ違う視線（後書き）

漆　・・・・どうすんのこれ
綺　どうするも何も、お前が書いたことだが？
フェ　なのはと綺羅の関係、泥沼もいいとこだよ・・・
綺　お前、まだなのはと知り合ってないだろ？
漆　あとがきクオリティ。
フェ　かっこよくないから注意してね。
漆　あまりにもひどいなおい！
綺　はいはいそこまでな。解説行くぞー。
フェ　解説すべきとこある？
漆　綺羅がゾッコンなところ？
綺　設定したのお前じゃん！
漆　それ言い出すと話が終わるっつの。
フェ　またグダグダじゃん！！
漆　ナイスツッコミでした～。ぱちぱち。
綺　もう好きにしろよ・・・。そう言えば、今回は不吉な書き出しじゃなかったな。
漆　ああ、この小説１回もなのはメインで出してないからさ。一応な。
フェ　気遣い？
漆　いや、別に。原作知らない人もいるんじゃね？って話。
綺　原作知らない奴には分からないんだろうな・・・あの書き方じゃ。
漆　るせー！バイト先の休憩室にあるＰＣで急いで書いてんだからしょうがないんだよ！
フェ　漆黒が給料泥棒を自供したよ！おまわりさーん！
漆　いや、禁則事項には（ｒｙ
綺　・・・もういいわ。次回予告よろしく。

漆　危なかった・・・。次回予告！
フェ　なのはとの対立を決意した綺羅！
綺　しかし、なのはの心は未だ揺れ動く・・・・
漆　そんな中、再び逢い見える２人！
フェ　果たしてなのはの意思は！
漆　次回は温泉の話！サービスシーン満載（？）！
３人　お楽しみにーーーー！

#9　ひと時の休息

某日

高町なのは一行は、海鳴温泉に向かう車中にいた。アリサ、すずか、なのはの家族もいる。
ついでといっては何だが、フェレット状態のユーノもいる。
たまの慰安旅行であった。
言葉が交わされ、笑い声がこぼれる。が、なのはの意識は別の場所にあった。
念話でユーノと会話をしていたのだ。
『なのは、今回くらいはちゃんと休まないと駄目だからね？』
なのはが苦笑した。
『わかってるよ。今回は魔法少女はお休み。』
『ならいいんだけど。』
4ドアのワゴンは進んでいく。
少女たちの思いを乗せて。

数刻後
温泉の、女湯の、脱衣場。
一見のんきそうなこの場所で、緊迫した状態に追い込まれている者がいた。
ユーノ・スクライアである。
彼は、もちろん男であるし、フェレット状態でも雄だ。
人の意識を持っているし、人語も操れる。一般人の前ではそうもいかないが。
で、何が問題かというと。
彼をペット扱いするアリサとすずかに、無理やり女湯に連れ込まれそうになっているのだ。

「なんで逃げるの～？」
（考え直せ僕！コレは逆にラッキー・・・いやいや駄目でしょ！）
必死に逃げ惑うが、結局なのはに首根っこを攫まれて湯船に連行されてしまった。
（見るな！何も見るな僕！見ようともするな！）
ユーノの悲壮な決意も、無駄になってしまったことは想像に難くない。

風呂上り　廊下
「いいお湯だったね～」
風呂上りの少女たちが談笑する中、見たくもないものを大量に見せられてしまったユーノはぐったりとなのはの襟元につかまっていた。
（ひ、ひどい目にあった・・・）
ユーノが人知れず己の薄幸を嘆いていたとき。
ドン、となのはが誰かにぶつかった。
「あ、ごめんなさい・・・」
慌てて誤るなのは。ぶつかった人物も、「おっとごめんよ」と誤る。
が、その後、なのはに顔をぐいっと近づける。
「ふうん、あんたかい？・・・・正直、強そうには見えないけどねぇ・・・」
その人物は、なのはたちよりずっと年上で、２０は超えているように見えた。これから風呂に浸かりに行きますといわんばかりの浴衣にタオルといった姿。浴衣の胸部は年齢に負けず劣らず膨らんでいる。
『あなたは・・・ジュエルシードを・・・』
なのはの返事は、念話で行われた。彼女は直感で、目の前の人物が綺羅と関係していると見抜いたのだ。
そして、ジュエルシード、の単語に反応した女は、念話の調子を強めて言う。
『手を引きな。警告は１回だ。でないと・・・ガブリだよ？』

『っ・・・』
「なのはちゃん・・・？」
すずかの呼び声で我に返った2人は、ばっと体を離した。
「ごめんよ、人違いみたいだ。じゃあね～」
手をひらひらとふりながら、女は、アルフは行ってしまった。
残された少女たちの困惑の声が響く。
「誰、今の・・・？」
アリサが苛ついたように吐き捨てる。
「酔っ払いでしょ。昼間から酒とか、有り得ない！」

女湯
「ふう・・・いい湯だねえ・・・」
湯船に浸かったアルフが吐息を漏らす。他に客はおらず、アルフの貸しきり状態だった。
グラマグスな体はお湯で上気し、男が見れば欲情せずにはいられない容貌となっているが、他に人がいないため色気は無駄遣いされている。
アルフは男湯とを隔てている壁に振り返り、言葉をつむいだ。
「で、そっちはどうだい？」
『ああ、いい湯だ。いい感じに癒されるな・・・』
響いた声は、綺羅のものだ。綺羅一行は、この温泉地にジュエルシードの反応をみつけ、やってきたのだった。
綺羅の声は続ける。
『で、そっちにフェイトはいるのか？』
アルフは宙に視線を泳がせ、言った。
「裸が見たいのかい？」
男湯から人がひっくり返る音。
『ふ、ざっけんな！ただいるかいないか聞いただけだ！』
爆笑するアルフ。しかし、笑いはすぐ寂しげな表情に変わる。
「いないよ。フェイトったら、着いてからすぐジュエルシード探し

に行くって行っちゃったよ。」
綺羅がため息をついたようだ。
『真面目なことで。ちょっとは休めばいいのにな。』
「あれでもマシになったほうさ。あんたに会うまでは、本当に狂ってるみたいで、見ちゃいられなかったよ。」
『あれで、休んでるほうって・・・。休ませたほうがいいのか？』
アルフは唇を持ち上げた。
「そこまでやれ、とは言わないよ。あんたには感謝してる。フェイト、最近はすごく笑うようになった。あんたに出会ってから、なんか、女の子らしくなったって言うか・・・」
『ちゃんと見てるんだな。適当そうに見えて。』
「ご主人様、だからね。」
綺羅が笑った。
「ま、そりゃそうだ。」

男湯
「ああ～・・・気持ちいい・・・」
アルフとの会話を打ち切って暫く。綺羅は未だに湯船に浮かんでいた。真昼間とあってか、彼の貸切だった。
綺羅にとって意外だったのは、自分で思っていた以上に身体に疲れが溜まっていたことか。
（正直疲れてるに決まってるよな・・・毎日のように空を飛んでれば、精神的にもおかしくなる。）
内心苦笑する。そして彼は、弱音を吐かないフェイトを尊敬した。
だが、彼女が疲れていることに変わりはないだろう。このままでは倒れてしまうかもしれない。
「今度、休ませてやるか・・・」
のぼせてきたので少し冷まそうとして、湯船から立ち上がった、そのとき。
ガチャッ。

浴室の扉が開く音だ。自分以外にも、昼間から風呂に入れる恵まれた人間がいるらしい。
どんな奴だと焦点を合わせる。
透き通るように白くほっそりした手足。
信じられないものを見たように見開かれた、紅く綺麗な大きい瞳。
そしていつもと違い解かれている、長く美しい金色の髪――――
時間が、止まった・・・ような気がした。
その一瞬後。
「フェイト！？」
「キラ！？」
綺羅とフェイトが同時に顔を真っ赤にし、飛びのいた。だが。
綺羅が立っていたのは、扉の目の前だった。
フェイトは飛びのこうとしたが足がもつれ、何の因果か綺羅の胸に向かってダイブする結果となった。
結論。
フェイトに押し倒される格好となった綺羅は浴室のタイルに頭を打ち、暫く意識を失った。

「い、痛い・・・」
激痛で意識を失う時間を強制的に短くされた綺羅が最初に見たものは。
（あれ、だれか俺に覆いかぶさってないか・・・？はは、随分とおかしなことが起きているな。ここは男湯だぞ？フェイトがこんなところにいるわけが・・・）
でも、彼の目の前にあるものがフェイトの胸部であるという最重要事実は変わらなかった。不幸中の幸いは、不自然なまでの湯気が、際どいところを見えそうで見えなくしていることか。
「よかったけどどこか残念だよ畜生！」
綺羅の叫びで我に返り、２人の体勢がとんでもないことになっていると気付いたフェイトは――

「あ、ああ、あの、そそその、ごご、ごめんなさいっ！！！！！」
いつもの１０倍の急速赤面術を披露し、噛みまくりながら飛び上がった。
綺羅が頭をさすりながら言う。
「何でお前がこっちに来るんだよ・・・？」
こちらに背を向けたままのフェイトが一言。
「あれ、ここって女湯じゃないの・・・？」
「やっぱりか。」
（もう慣れたわ。）

#9　ひと時の休息（後書き）

期末考査近いんで終わるまで更新速度落ちると思います。
申し訳ありませんm（＿＿）m

＃１０　拒絶の円舞曲（前書き）

期末考査も終わり平和に更新再会＾＾。またちまちま地味に更新するので見ていってやってくださいな。

#１０　拒絶の円舞曲

温泉。
湯煙と熱い湯船に代表される、日本独特の文化。
誰しもその開放感に浸り、ひと時の休息に心を癒す
そんなキャッチコピーが聞こえてきそうなほど典型的な温泉「海鳴温泉」。
その大浴場、男湯に２つの影が数十分ほど前から湯船に浸かっていた。
片方は端正な顔立ちをした１０歳弱の少年。もう片方は年齢こそ少年とな時くらいだったが、その姿は男湯に似つかわしくないものであった。
そのシルエットは、美しい金髪を背中に垂らした少女のものだったのだから。

片方の人影、神近綺羅は隣で湯船に浸かるフェイトを仰いでため息をつく。
「どうしてここに居座るんだよ・・・」
勿論、彼女に聞こえないように。
フェイトが男湯に突撃してきたのは２０分ほど前。ショックで足を滑らせたフェイトが転び、綺羅を押し倒し、その展開になっている。
（無理だ。論理的な説明がつかん・・・）
押し倒されたまでは偶然と不幸で説明がつく。しかしその後の「こっちにいてもいい？」はおかしい気がする。
「はふぅ・・・・・・」
そんな複雑な心中を知ってか知らずか（多分知らない）フェイトが目を細め吐息をついた。その艶かしさに思わずドキッとしてしまう。
（駄目だ駄目だ。最近ダイダロスやらアルフやらに変態扱いされてるから、自分で自分が変態に思えてきたじゃないか・・・）

恥じらいを隠すために天井を仰ぐが、やはり気になってフェイトの方を見てしまう。
と。
（やっぱり疲れてるのかな・・・）
フェイトは先ほどから欠伸を繰り返し、表情にも疲労が浮かんでいる。やはりアルフが言っていた通りなのかもしれない。
「やっぱり疲れてる？」
綺羅の問いにフェイトは数瞬たってから気付き、慌てて首を振った。
「ううん、大丈夫。疲れてなんかないよ。」
だが、綺羅にはその笑みが無理やり作ったものだと分かってしまう。
「大丈夫なわけあるか。毎日ジュエルシード探して、戦闘までして、疲れないわけあるか。」
と、フェイトは僅かに俯き、呟いた。
「私は、頑張らないといけないから・・・」
綺羅はそれを全力で否定した。
「違う。フェイトが頑張らなきゃいけないんじゃない。フェイトが自分の意思で頑張るんだ。頑張らなきゃいけないって、誰かから強制される義務なんてない。」
フェイトは驚いたように聞き入っていた。綺羅が続ける。
「それに、俺だっている。もっと俺を頼ってくれたっていい。1人ではうまくいかないことも、2人だったらきっとうまくいくから。」
フェイトの表情がだんだん明るくなり、最後には、あの笑顔で言った。
「うん、ありがとう、キラ・・・」
綺羅にとって、それだけで十分だった。彼が欲しいものは、全て彼女が持っていた。
だから。
（フェイトは、誰にも傷つけさせやしない。例え、なのはと再び戦うことになっても・・・）

数時間後　温泉本館付近森林地帯
満月を背に、バリアジャケット姿の綺羅とフェイトが降り立った。
ちなみに今回アルフは不参加である。熟睡してたから。
『マスター、センサーに反応。捜索対象を十時の方向に確認。』
綺羅がその方向を確認すると、確かに青い宝石が川岸に引っかかっていた。
「さっさと終わらせる。シーリングモード」
『シーリングモードスタンバイ』
綺羅が円盤からプレートを抜き、放とうとしたとき。
『センサーに反応、六時の方向に熱源！攻撃がきます！』
「やっぱ、簡単にやらせちゃくれないか・・・」
綺羅は直前で大きくジャンプし、桃色の魔力弾を回避、空中のフェイトの横に身体をつけた。
「キラ、大丈夫？」
フェイトの問いにうなずき、綺羅は地上を睨む。
果たして木陰から、白のバリアジャケットを纏い、肩に小動物を乗せた少女が姿を現す。
「なのはが来るか」
綺羅の表情が、もう一段険しくなった。

なのはが浮かび上がり、フェイトを庇うように滞空する綺羅の目の前へ。
ライフルを抜いた綺羅が言う。
「警告はしたはずだけど？」
フェイトも綺羅の後ろから姿を現し、バルディッシュを構えた。
なのははその手に握った杖を構えようとはせず、言った。
「綺羅君に譲れないことがあるように、私にも譲れないものはあるよ。それに、理由を聞かなきゃ納得できないよ。」
綺羅はライフルを向ける。拒絶の意思を表すように。
「納得してどうする？割り切れといったはずだ。結局、ぶつかり合

うしかないんだ。」
「それでも、話さなきゃ分かり合えないことだってあるよ！」
なのはに気圧されたのか、フェイトが綺羅の袖を握った。
綺羅は微笑んで見せると、実体剣を抜き、一気に加速する。
「その気はないね！」
「なのは！」
切っ先がバリアジャケットに到達する刹那、なのはのものではない魔方陣がなのはの前に展開され、剣を受け止めた。普通、魔力系のシールドは実体物に弱いはずだが、目の前のシールドは常識が通用しないとばかりの強度で刃を押し返している。
「ユーノ君！」
なのはの視線の先には、いつの間にかなのはから離れていたフェレットが魔方陣を展開していた。
フェイトがサイズフォームのバルディッシュを構え、告げた。
「この子は私がやるから、キラはあの使い魔をお願い。」
「わかった。」
シールドの内側から砲撃を放とうとしたなのはをブーメランで牽制、置き土産にライフルの連弾をお見舞いすると、背後のフェイトと交代する。ちょうどチェスの特殊手【キャスリングターン】のように。
そのまま追撃を振り切った綺羅は、地上のユーノと呼ばれた動物に実体剣を構え突っ込む。対してユーノは再び防御陣を展開、再び拮抗した。
エネルギーの飛沫が飛び散る中、綺羅が左手のライフルを構えた。
「バーストモード！」
『フォトンライフル・バーストモードスタンバイ』
ライフルの砲身が上下に分かれ、ケーブルが延びて全長が伸びた。
砲口も拡大され、大出力に耐えうるバーストモードとなった。
「いくら強固な盾と言えど、零距離で撃てば！」
何の躊躇いもなくトリガーが絞られ、シールドと激突、地上で爆発が起こった。

綺羅の視界に、ダメージ情報が入る。
【Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ　Ｄａｍａｇｅ　Ｌｉｍｉｔ】（緊急　損傷甚大）
バーストモードの反動と爆発をもろに食らったのだ。ダメージは深刻。これ以上の戦闘は難しいだろう。だが、それはあちらも同じらしい。シールドが砕け、身体が宙を舞うのを綺羅は確認している。果たして大木の根元に、魔力流でＫＯされたらしいユーノが肩で息をしていた。
実体剣とライフルを向ける。これでどう動こうとも仕留めることが出来る。
だが、綺羅はユーノに敵意がないことを殺気の減衰から知ると、武装を収納しモードリリースした。
「君は・・・どうしてジュエルシードを収集する？」
綺羅はユーノの隣に腰を下ろした。上空ではフェイトとなのはが熾烈な空中戦を繰り広げている。
時折響く重低の激突音、砲撃により夜空に描かれる流星を眺めて言う。
「フェイトが必要としているから、それだけさ。」
ユーノが綺羅を睨む。
「なのはと君は友達じゃないのか？」
綺羅は遠い目をした。
「多分、な。だけど、それとこれとは話が別だ。」
「呵責はないのか？なのはは随分と悩んだのに。」
綺羅は目を閉じた。
「ないわけがない。だから遮断した。俺は悪者なんだと、ヒールなんだと勝手に思い込むことで。ちゃんと話を聞いて、その上で自分の身の上を決めるなんてヒーローじみたことが俺に出来るはずがない。」
「だから、あの時・・・」
綺羅は何も言わなかった。沈黙を是と受け取ったのか、ユーノも空

を見上げる。
フェイトがフォトンランサーを放つ。回避したなのはが応射。フェイトの得意なショートレンジに入らせぬように、ミドルレンジでの砲撃に徹していた。狙いもいいし、動きに無駄もない。すずか邸でやりあったときとは別人のように動いている。恐らく場数を踏むことによって成長したのだろう。綺羅自身と同じように。
「なのは、強い・・・」
ユーノがうめく。だが。
「けど、甘い。」
綺羅はなのはの戦闘の【甘さ】を見抜いていた。ショートレンジを恐れるあまり、詰みにいけない。接近を過剰に恐れ、砲撃のみでの撃破を狙っているのか。
だが、それは隙を生む。砲撃と砲撃の間には常に一定のタイムラグが生じる。つまり、その分フェイトはなのはに接近することが出来るし、採れる行動パターンも豊富になる。
そして。
フェイトの隙を突き、なのはの魔力砲が火を噴く。が、それはブラフ。行動を先読みしたフェイトが急加速と制動を同時に行い、なのはの背後へ。そのまま金色の刃を突きつけた。
「勝負あったな。」
綺羅が呟いた。
と、なのはの杖のコア部から格納されたジュエルシードが1つ放出され、フェイトの手に渡った。
「レイジングハート、何を・・・」
ユーノが呟く。綺羅は勝者の微笑みで告げた。
「きっと、ご主人様想いのいい子なんだろ。どっかの誰かと違って。」
『それは私のことですか、マスター。』
ダイダロスからの念話は無視。いい気味だ。
ユーノに向き直り、ダイダロスを再度セットアップ。こう言った。

「なのはに、もう俺たちの前に立ちはだかるな、と伝えておいてくれ。これ以上は、止められないかもしれないから。」
返事は待たず、上空へ飛ぶ。と、なのはがフェイトに何かを言うのが見えた。フェイトは綺羅の方へ移動しながら、ただ名乗った。
「フェイト――フェイト・テスタロッサ。」

#11　重なる影

彼に、肉体はなかった。
いや、かつてはあった。
現在は、精神だけをこの世に残し、膨大なデータの海をさまよっている。
データの海――【ヴァルハラ】。
製作者が消え、侵入した盗掘者が去った今でも、膨大なデータを収集、分類、処理している。
そのデータには、もちろん～預言～も含まれている。

――あと、10年と188日。
それは～預言～が消える日。神の夢が覚める日。
世界が、なくなる日。
彼はそのデータを目にしていた。世界が消えるのを知っていた。
だから、戦っていた。戦っている。
いままでも。これからも。
彼はふとある映像に目を取られた。
かつての自分が所有していた肉体とよく似た顔立ちをした少年が、
彼が生前（？）に建造したデバイスを起動する映像。
神近綺羅の、ビジョン。
彼は僅かに唇を持ち上げた。いや、そんな気がした。彼に持ち上げる唇はないのだから。
そしてかつての敵の姿を思い出し、呟く。
――俺の、勝ちだ。
そうして、彼は意識をシャットダウンする。
そして彼は、神近翼は――

地球　某土曜日

『♪～～～～～～～～～♪』
神近綺羅は、目覚まし代わりのアラームで意識を半ば覚醒させた。ディスプレイを操作し、【ｌｏｓｔ　ｉｎ　ｂｌｕｅ】を停止させる。
今日は土曜日。温泉の一件から、もう１週間が経過しようとしていた。綺羅は大きく伸びをし、窓の外に視線を投げた。
時刻は８：３０。朝日はなんの憂鬱もないように街を暖かい色に染め上げ、そのまぶしさに綺羅は一瞬だけ目を瞑った。
（ったく、お日様はのんきだな。苛つくくらいだ。・・・まあ、天体に意思もクソもないとは思うけどね。）
彼には色々な問題が山積していた。フェイトのこと。ジュエルシードのこと。
そして。
（・・・考えたくもねェ）
なのはのこと。
それなのに、朝日は嘲笑うかのように綺羅の視界を照らしている。
綺羅が皮肉的な何かを感じるのも無理はなかった。
（・・・これも、罰か）
自分は卑怯だ。なにも聞かず、なにも見ず、なにも感じようとせずに、ただ彼女に刃を向けているだけだ。そこに何があるのかも知らず。どこへ向かうのかも知らず。
だが。
それすらも覚悟というなら。
（俺は・・・）
綺羅は心に刺さる棘を無理やり封じて、リビングへと降りる階段を駆けた。
リビングではアルフがお茶を片手に休日のワイドショーを眺めていた。ソファに寝そべってスナック菓子をつまむ様子はとてもフェイトの使い魔とは思えないのだが、世の中はそんなものだと割り切ることにしている。

（こいつはこいつで自由だよなあ・・・）
アルフをわき目にコーヒーを淹れて、ついでにパンも焼いておく。
あまり食欲はないが、食べておかないと身体にも悪いだろう。
「今日は学校は休みかい？」
アルフが水を向けてくる。随分と暇らしい。
「わかってるくせに。今日は土曜日だし、それに・・・。ってなんだ、そのニヤニヤは。」
「いやいやーなんでもないよ？」
ぱたぱたと手を振りながらアルフ。
「綺麗なまでに不自然な返しをありがとう。」
最近スルースキルが身についてきた彼はさっさとキッチンに引っ込む。アルフに付き合っていたら身体が持たない。
だが。
「今日は赤飯でも炊いて待ってるから、どうぞごゆっくり～」
ひっくり返る綺羅。
「なんでその文化を知っているんだお前は！」
まだまだスキル上達は遠いらしい。

さて、この状況を説明するには、時計の針を9時間半ほど巻き戻さねばなるまい。

金曜日　２３：００
「キラ、お風呂もらったよー・・・」
髪をタオルで拭きながら、フェイトがバスルームから姿をあらわす。
「ん、ちゃんと休めたか？」
綺羅が問うが、フェイトはどうせ「大丈夫」と言うのだろう。だが、綺羅はフェイトの表情に浮かぶ疲労が全く薄れず、むしろ濃くなっているのを感じていた。
無理もない。温泉の一件から全く休まず、毎日遅くまで探索を行っていれば心身に負担がかかる。

「うん、大丈夫。」
果たして、フェイトが手を振って笑うが、綺羅は薄くため息をついた。
「あのなー、大丈夫そうに見えないから言ってんだっての。疲れてないはずないだろ？最近なんて俺より早く起きてるし、俺より遅く寝てる。もう限界だよ。」
「そんなことないよ。私は・・・」
綺羅はそこで言葉を遮った。
「無理すんな、って何回言わせる気だよ。そんなことしてたら倒れちまう。いいから、明日くらいは休め。明日はお休み。いいな？」
かつてなく強く言われ、フェイトが俯く。
（やば、言い過ぎたかな？けど・・・）
アルフが言っていたように、フェイトは誰かに言われても休もうとはしない。恐らく自分でも駄目だ。休めといったところで、フェイトはこっそりとでも出かけるだろう。
（ほっとくわけにもいかない。どうすれば・・・。・・・ん？これはどうだ？意外と名案じゃないか？）
「分かった、じっとしてろとは言わない。その代わり、俺と遊び行こう、な？」
彼が1秒足らずで叩き出した妙案を提示。これならフェイトは綺羅の目に入る場所に置ける。暴走する心配もない。
まあ、綺羅がたまにはこういうのもいいのではと考えた結果でもある。
「え、キラと・・・でも、私・・・」
迷うそぶりを見せるフェイト。こういうところが実に奥ゆかしい。そういうところも好きな綺羅ではあるが。
「いや、俺がフェイトと遊びに行きたいだけだよ。ちょうどリフレッシュにもなるし。なんなら、いつもの礼を無理やりさせられてると考えればいいさ。」
そこまで言うと、フェイトも吹っ切れたのか。

「うん、分かった。ありがとね、キラ。」
にこりと笑った。
そのせいで綺羅が眠れずダイダロスにからかわれ続け悶々とした夜を過ごしたのは別の話。

現在
「なんでアルフに聞かれてんだよ・・・」
「当たり前さ。あたしにはフェイトを害虫から守る特別な情報網があるからね。」
えへんと胸を張るアルフに冷たく一言。
「ゴキブリ退治の求人があったぞ。行って来たらどうだ?」
「あたし、カサカサ言うのは嫌いなんだよ。」
「そうですか。」
無駄なやり取りをかわすこと数分。
「キラ、お待たせ・・・」
綺羅が起きる数十分前から用意をしていたらしいフェイトが、リビングに降りてくる。
(や、やばいやばい・・・ちょっと落ち着け、落ち着け俺・・・)
綺羅が必死に感情をコントロールする。それほど今日の彼女は可愛かった。
全体的に黒系のコーデになっているが、スカートやアウターの端にあしらわれた赤や、首もとの白いストールが全体に華やかなイメージを与え、上品に仕上がっている。
いつもはしないメイクにも手を出したらしいが、目立たなく仕上がっており、ここでも上品な、浮世離れしたイメージを与える。
「変、かな・・・」
綺羅は慌てて首を振る。
「いや、そんなことないよ!凄く似合ってる!」
と、彼女はいつもの急速赤面癖を披露。一瞬で耳の先まで赤く染める。

「あ、その、ありがと・・・」
綺羅はこほん、と堰をひとつしてから、
「じゃ、行こうか。」
という。
「うん、そうだね。」
フェイトもうなずき、２人は土曜日の町に繰り出した。

ゲームセンター前
「ねえキラ、あれ何？」
フェイトが指差しているのは、クレーンキャッチャー。
「ああ、お金を入れるとあのアームが動いて、下にある品物を引っ掛けてあの穴に落とすゲームだよ。」
「へえ・・・」
綺羅はそのまま立ち去ろうとしたのだが。
「フェイト・・・？」
フェイトがクレーンキャッチャーの機械に張り付いて離れない。何事かと近寄ってみると。
「可愛い・・・」
フェイトがじっと見つめているのは、熊のぬいぐるみ。ストラップ式になっていて、携帯とかｉ　ｐｏｄにもつけられるやつだ。
「可愛い・・・じゅる」
「そんなに欲しいのか？」
「ふぇっ！？あ、いや、ええと・・・」
フェイトはしばらく表情を右往左往させた後、うなずく。
「じゃ、取ってあげる。」
綺羅は適当に財布から硬貨を投げ入れる。じっと見つめるフェイトを尻目に品定め。
（あの上を向いてるやつが狙い目だな。）
クレーンを操作し、うまくストラップのひもにひっかける。この手のゲームは腕に覚えがある。

「すごい・・・」
はたして、熊のぬいぐるみはひもで吊り上げられ、そのまま・・・
「あれ、2個ひっかかってる」
よく見ると、ひもを引っ掛けたクレーンに、別の熊の足がひっかかっている。このままなら2個同時に落ちるかもしれない。
「わあ、すごい・・・」
で。
ぽとん、という擬音が聞こえてきそうなほど、2匹の熊は穴の中へ。
綺羅は商品取り出し口からぬいぐるみを取り出すと、フェイトに手渡した。
「はいよ。」
「えへへ、ありがと。あ、キラにも1個あげる！」
ぬいぐるみの片方を差し出してくるフェイト。正直欲しくはなかったが、素直に受け取ってダイダロスにくっつけておく。
『嫌がらせですかマスター』
ダイダロスの不満は無視。
それより、彼にとって重要なのは、フェイトが自然な笑顔を見せてくれていること。
どうやら、この提案は成功したらしい。
綺羅は笑顔になると、フェイトの後を追った。

ゲーセンでプリクラを撮った後、フェイトは服をご所望らしいので、彼女を連れて綺羅は大通りに面したショップに来ていた。
『いらっしゃいませー』
自動ドアが開き、中から元気のいい声が聞こえてくる。土曜の昼下がりということもあるのだろうか、なかなか店内はにぎわっていた。
「いらっしゃい、なかなか若いカップルやねえ。」
開口一番そんな爆弾を投げて綺羅をひっくり返しそうになったのは、若い関西人らしき女性店員である。綺羅は「カップルじゃないです

よ」と返すと、
「またまたぁ、謙遜してたら嫌われてまうわ。で、何をお探し？」
綺羅は「謙遜じゃないです」と念を押すと、
「こいつに似合う可愛い服を1セット見繕ってくれませんかね？」
フェイトを指差し言った。
「任せてな。良かったなあ、お譲ちゃん。カレが何でも買ってくれるって。」
（だーかーらーっ！）
綺羅の心の叫びも虚しく、店員は試着室にフェイトを連れて行ってしまった。
『やっぱり意識しちゃってますね。可愛いですよマスター。』
『やはりお前とは1度決着をつける必要がありそうだな。』
『やめてください！可愛い乙女になにをする気ですか！』
『自分を可愛いというやつに乙女を名乗る資格はないんじゃないか？』
ダイダロスと綺羅の壮絶な舌戦を尻目に、試着室から会話。
「綺麗な身体してるねえ。可愛がってもらってる？」
「その・・・・・なので、・・・・・じゃ・・・・・」
（俺の精神にはよくなさそうだ。シャットアウトシャットアウト。）
綺羅は意識を集中させるのをやめ、宙に視線を泳がせた。
（いいのか、俺はこれで・・・）
そのとたんに浮かぶのは、やはりなのはのこと。
決別に似た台詞を吐き、彼女に背を向けた綺羅。それで、良かったのか。
別の道は――？
（いや、あれでよかった。そうでなければいけなかったんだ。）
綺羅は迷いを心の拳で握りつぶした。自分はフェイトの味方でいると約束した。それなのに、自分が迷ってどうする？自分はフェイトを導かなければいけないのに。
（迷わないさ、もう・・・）

彼がもう一度宙を見上げたとき、ちょうど試着室のアコーディオンカーテンが開いた。
「どう？彼女、めっちゃ可愛くなったやろ？」
（・・・・・・ッ）
綺羅は思わず息をするのも忘れた。
いつもはツインテールにしている髪はよく梳かされて、背中に流れている。上品な白のワンピースは純粋な彼女によく似合っていて。
いつもとは違う優雅なフェイトに、綺羅はただ見とれていた。
「ほら、なんか言うことあるんと違う？」
「あ、ああ、すごく、可愛いよ・・・」
と、いつもの急速赤面癖で真っ赤になったフェイトが俯く。
店員がにやにやしながら、綺羅に尋ねた。
「いかがなさいましょ？」
「あ、じゃあ、頂きます。」
店員は顔を輝かせ、
「お買い上げありがとうございまーす！じゃ、これ領収書ね。」
領収書を一目見た綺羅はその数字の０の多さにぎくりとしながらも、きちんと定められた数の福沢諭吉をレジに置いた。
「おおきにー」
店員のお姉さんの声を背に、２人は店を出たのであった。

夕刻
綺羅とフェイトは、夕焼けに染まる海浜公園を歩いていた。
日は既に地平線に近づき、血のような朱が空を埋め尽くしている。
２人の周りには、同じように２人で連れ添って歩くカップルがたくさんいた。
「キラ、今日はありがとう。楽しかったよ。」
フェイトにそんなことを言われ、綺羅の表情も思わずほころぶ。
「それはよかった。リフレッシュになった？」
フェイトがうなずく。

「うん。もう大丈夫。」
綺羅が微笑む。防風林の木立を抜け、２人の前に太陽の光を受けて紅く染まる砂浜と、光を受け静かにその波を刻む広大な海が現れた。
「すごい・・・」
「綺麗だな。これが見れてよかった。１回見せたかったんだよ、この景色。昔、兄さんとよく来たような気もするけどな。」
「そう、なんだ・・・」
フェイトの瞳は、沈み行く夕日をただ映していた。その奥に何を秘めているかを綺羅が理解することはない。ただ、この景色を見て、彼女が少しでも安らいでくれれば、と願うだけだった。
「そろそろ、帰ろうか・・・」
「そうだね・・・」

挿入歌【愛しい人よ～Ｉ　ｗａｎｔ　ｓｉｎｇ　ｆｏｒ　ｙｏｕ～】

２人の間の空間を広げたり、近づけたりしながら彼らはもと来た道を戻ってゆく。周りのカップルはみな手を繋ぎ、腕を組んで歩いていた。
（そういや、俺たちも、周りから見ればデートしてるカップルなんだよな・・・）
隣を歩くフェイトは何も言わない。どこか寂しげに、綺羅の隣を歩いていた。
（意気地ねえな、俺・・・・）
綺羅の手は宙をさまよっていた。フェイトの左手を握ってやりたかった。なのに、僅か５０センチが天の星たちよりも遠く感じた。
けど。
フェイトがもしそれを望んでいるなら。
いや。
（そんなことはもう、どうでもいい）
綺羅は少しだけ苦笑した。もうやめよう。言い訳するのは。ただ、

自分に素直になろう。
フェイトがそうであるように。恥ずかしがる必要なんてないんだ。
だから。
（ああ、分かってる。俺は、お前が――――）
綺羅の右手と、フェイトの左手の距離が近くなり、近くなり、僅かに触れ合い。
２人の心が触れ合うように、綺羅の右手がフェイトの左手を、しっかりと握った。
フェイトは初め驚いた顔をして、だがやがて、心から安心した微笑を見せ、綺羅の右手に自らの左手を預けた。
２人は、確かに通じ合っていた。互いの心を預け、安らぎ。
空に既に陽光はなく、月が漆黒の空を彩っていた。
幽玄の月が照らす中、寄り添った影がゆっくり、だがしっかりと歩いていった・・・・・・・・

#12　乱反射（前書き）

この回からＯＰ、ＥＤ変わります。

ＯＰ　ＶｉＶｉＤ『睡蓮人』
ＥＤ　シド『紫陽花』

#12　乱反射

綺羅は前方の暴走体を睨みつけた。９歳としては大きめの彼の数倍はあろうと思われる、植物製の人型。両手は蔦、胴体は太い幹で構成されている。

（こんなのもいるのかよ・・・グロテスク・・・）

ヴォン、と唸った蔦が綺羅を襲った。しかし、曲線的な軌道を描くそれは既に見切られている。

「遅いッ！」

軌道にあわせて大きくジャンプし、暴走体の肩部に飛び乗る。蔦が空中で鋭角的に曲がり、尖った切っ先で彼を貫こうとした。逆側の蔦も伸ばされて、挟撃される格好になる。

（いい狙いだ・・・しかし！）

綺羅は肩のアタッチメントを外し、魔力刃ブーメランを２つ、宙空に解き放った。ブーメランで削られた蔦を、綺羅の実体剣が３閃し、粉砕する。

開けた方から空中に脱出する。

「ダイダロス！」

『フォトンライフル・バーストモードスタンバイ』

砲身が拡張し、銃身が展開したライフルから、高火力の一射を叩き込む。暴走体が仰け反り、封印の機会が訪れた。

「シーリングモード」

『シーリングモード・セットアップ』

ディスクからまた一枚のプレートを引き抜き、構える。

「ジュエルシード・シリアル１０、封印！」

プレートが突き刺さり、暴走体が声にならぬ悲鳴を上げる。あたりが光で染められ、収束し。

暴走体が消え去り、ジュエルシードが刻み込まれたプレートが飛来し、綺羅の右手が受け取った。

「終わった、な。」
綺羅が辺りを眺め、細く息をついた。時刻は２０：４２。ジュエルシードを探索して４５分か。なかなかの好タイムだったと思われる。
『今日は帰るんですか？』
「ああ。フェイトが待ってる。」
今日はフェイトは留守番である。本人は大丈夫と言っているが、綺羅はやはり心配なのだ。だから、「せめて今日だけは」と言いくるめ、一人で封印に出かけたのであった。
『ほんと、過保護ですねえ・・・』
「かもな。けど、それがあいつのためになるんだったら、俺は」
『聞き飽きましたよ、マスター』
「それだけ大事なんだよ、だから。」
『それが逆効果にならなければいいんですがね。』
「そうするさ。」
綺羅は念話を打ち切り、帰路に着く。と。
（誰だ・・・？）
綺羅は人影を見つけた。普通の人であれば、路地裏にいるというだけで彼は注目しないのだが。
その人影は、異常だった。
もう夏に近づきつつあるというのに、ロングコートの襟を立てて、フードを被っている。表情はフードとサングラスに覆われて、窺い知ることはできない。
年齢は１６～１８といったところか。
綺羅は無視し、通過しようとした。関わらないに越したことはないし、最悪絡まれても自分のほうが強い。
綺羅が男の目の前を通り過ぎようとした刹那。
「神近、綺羅」
フードの奥の闇から、声が投げられた。ややキーが高く、普通に聞けば美声なのだろうが、何かに対する憎悪と、悪意を醸成したような雰囲気が相まって、地獄の底へ誘うような気さえした。

「なんだよ、あんた」
綺羅はまっすぐに男と向かい合った。男は闇色のサングラスのレンズから、じっと見つめ返している。
「神近、翼の、弟。機体(デバイス)は、ダイダロス。」
「システム・オンライン！」
綺羅は飛びのき、ダイダロスを起動し、ライフルを向けた。対して男はくつくつと身体を揺らすと、
「戦う、気は、ない。まだ、時では、ない。まだ・・・・・・」
そしてそのまま、すぅっと路地の闇に溶けるように消えていった。その後には何も残らず、表通りの喧騒のみが伝わってくる。
（なんだったんだ、あいつ・・・）
闇そのもののような空気を纏い、本当に地獄からやってきた死神のような気さえした。そのことを思い出した綺羅は、じわりと汗がにじむのを感じた。
「早く帰ろう・・・」
嫌な想像を振り払い、綺羅は家路を急いだ。

翌日　教室
「あたしたちと喋るのが嫌なら、好きなだけぼーっとしてればいいじゃない！」
朝の教室で、アリサのなのはに対する最後通牒のような一喝が響いた。最近なのはが何に対しても上の空なのにアリサは腹を立てたらしかった。
綺羅はそれを、自らの席で聞いていた。たまに学校に来てみればこれだ。
しかし当たり前だ。自分がなのはの立場でも、絶対にそうなる。そして、そうさせているのは。
（迷わない。迷わないさ、俺は・・・）
綺羅は首を強く振ると、教室から退去した。

放課後　教室
「ほんとに何も知らないわけ？」
綺羅は放課後の教室で、アリサとすずかに捕まり尋問を受けていた。なのはは恐らくすでに捜索に行き、こちらも遅れを取る前に、と考えているのだが。
「知らないな。最近、俺もろくに喋ってないし。」
綺羅はもう一度否定し、「それじゃあ」と言って席を立った。と。
「じゃあ、最後に。綺羅、最近よく休むけど、それとも関係ないのよね？」
関係はある。勘のいい女だ、と内心苦笑するが、それを表情に出すことはしない。
「当たり前。実際、疲れてるんだろ？俺もあいつも。」
２人はなにも言わなくなり、綺羅はそのまま教室を出る。
「ヤバイな、だいぶ遅れた。・・・・・・フェイト、聞こえるか？」
ダイダロスのディスプレイにフェイトの番号を――予め持たせておいた携帯だ――打ち込み、コールボタンを押すと、１コール目で出た。
『うん、聞こえてる。こっちはもうジュエルシードを確認してるよ。』
「わかった。すぐ向かう。」
綺羅は通話を切り、屋上の扉を蹴り開ける。
「システム・オンライン！」
『システム起動。パワーブロー正常、各部出力異常なし。システム・オールグリーン。いつでもいけます！』
「行・・・っけ！」
綺羅は屋上を蹴り、フェイトのもとへ翔んだ。
数分後
綺羅とフェイトにアルフは、とあるビルの屋上に降り立った。ジュエルシードを確認し、綺羅が降り立つと笑顔を見せたフェイトに紅

く染まった顔を見られないように、綺羅は言った。
「とりあえず、あいつに魔力流を撃って強制発動させる。暴走体も出ないだろうし、余裕だろ。」
「うん、そうだね。じゃあ・・・」
バルディッシュを構えたフェイトを、綺羅は制止した。
「ああ、俺がやるよ。」
「え、でも、あれ、結構疲れるよ？大丈夫？」
自分のことを棚にあげて心配してくる彼女に苦笑して、言った。
「少なくともお前よりは休んでるから大丈夫だ。」
フェイトは困ったような顔をするが、事実だし仕方がない。
「キラの意地悪・・・。でも、嬉しい。お願い。」
「任せとけって。いけるな？」
『たとえ無理でもマスターの恋を成就させるためなら頑張ります！』
ダイダロスの発言に青筋を浮かべながら、綺羅は実体剣を一閃した。
―――ッ！！
魔力の豪流が迸り、喧騒に埋もれていたジュエルシードを発動させる。事前に人払いの結界は張ってある。人的被害が出る心配もないだろう。
「キラ、ありがとう。封印、やっちゃうね。」
フェイトがバルディッシュを向ける。その刹那。
『センサーに反応、六時の方向より熱源！砲撃、来ます！』
ダイダロスのエマージェンシーに綺羅はその方向を見た。瞬間、光の点が広がり、円柱となって迫ってくる。
「フェイト、回避だ！」
「ふえ・・・わっ！」
「つかまれ！」
フェイトの手をとり、限界加速で射線から逃れる。振り返ったその先には、やはり。
「なのは、また・・・」
ビルの間を飛行し、白のバリアジャケットの少女が綺羅の前に立ち

はだかった。
「綺羅君、フェイトちゃん・・・」
綺羅はため息をつく仕草をしてみせる。これは予想の範囲内。あの程度で引き下がるほどやわな人物ではないのだ。
「警告は一度きりだ。割り切らなきゃ死ぬ、と言う警告もな。」
なのはは杖を向けた。
「割り切ってるよ。だから、フェイトちゃんからお話を聞きたいんだよ！」
綺羅はライフルを向けた。罪悪感と、彼女を友人としてみるいつもの自分による呵責には、もう慣れていた。
「無駄なことだ。・・・下がれ。武器を引け。」
すると、フェイトが綺羅を止めた。
「私がやるよ。」
「フェイト・・・？」
見返した綺羅に、フェイトは頷く。そして、なのはの前に。
「私は、理由を話す気はない。譲れないのなら、ぶつかるしかないんだ。」
なのはが泣きそうな顔をして、叫んだ。
「どうして・・・どうしてそんな悲しそうな顔で、そんな悲しいことを言うの！？きっと分かり合えるよ！だから――」
「もう、話すことはない」
断ち切るようにバルディッシュが振られた。なのはが対応し、光条が迸った。
そして、激突。
互いの放った放火は譲らず、両者の心を表すかのように激しくせめぎあった。
次の瞬間。
押し合っていた光が突然拡散し、全方位へ弾けた。

#13　道標

「あとどれくらいだ？『醒める』まで」
彼の問いかけに、彼女は答える
「あと―10年と174日ね。」
「『幸福』の完成は間に合うかな？」
彼女は微笑む。
「間に合わなければ、この世界が消えるだけ。私たちには何も関係がない。ただ、ヒトが消えるだけ」
彼はやれやれといった仕草を見せた。
「確かに。僕たちは聖地（エデン）に、もとの住処に帰るだけだ。ただ、僕はこの世界が、ヒトという生き物が気に入っていてね。」
彼女にはわからなかった。なぜこんな種が気に入ったのだろうか。
「物好きなのね。こんな強欲な種が気に入るなんて」
「僕からすれば君のように欲に優劣をつける考えが分からないね。僕が君を守りたいのも欲なら、ヒトが他人のものを奪おうとするのも欲だ。両者にはなんの相違もないというのに。強欲であるのは悪いことかな？」
彼女は首を振った。彼の理論は聞き飽きた。
「別に。ただ、見ていて気分がよくないだけ。」
「それは君が醜い欲しか見ていないからだろう。美しい強欲もいるさ。それに、欲というのは表裏一体だ。あるものから見れば醜くとも、別のものから見ると美しい。ヒトとは、そのパターンが歴史上最も進化した種だよ。そして、これからも進化していく。それを、夢を見るカミサマなんかに邪魔されたくないな。」
彼女は頷いた。最後の部分だけは、彼女と彼の意見が一致している。
「この世界は、私たちのモノ。創造主だろうが、私たちを遮ることなどできはしないわ。」
「全くだ。この世界はもう、レールの上を走るだけの愚物ではない

ことを、彼に教えてあげよう――」
そして彼女は言う。美しいその姿を翻して。
「この世界に、『幸福』を」

地球　海鳴市
２人の魔法使いが放った光は激突、全方位へと弾けた。それは巨大な波となり、辺りの空間全てを蹂躙し、激震させた。
そして、その中心にいた者たちは。
激震が去った後、なのはとフェイトの得物から、ビシッっと音が鳴った。
「レイジングハート！？」
「バルディッシュ・・・」
彼女らの武器は、まるで示し合わせたかのように同じタイミングでひび割れた。恐らく先ほどの衝撃波の影響を少なからず受けたのだろうが、そんなことは現状に何の影響も及ぼさない。
そして、それを遠巻きに見つめる綺羅は。
（どう動けばいい、俺は・・・）
戦況は硬直している。バルディッシュもなのはのデバイス――おそらくレイジングハートと呼称する――も傷を負い、下手に動くことの出来ない状況だ。
綺羅は戦闘に参加していないので、今から動くのは可能だ。しかし、向こうにもまだ使い魔が残っている。下手に出て行って返り討ち、というのもまずい。
そんな中、動いたのはバルディッシュを待機形態に戻したフェイトだ。彼女は持ち前のスピードで何とジュエルシードに接近、素手で攫んだ。
「フェイト！？」
綺羅が叫ぶが、フェイトは一身に何かを念じている。
「止まれ・・・止まれ・・・止まれ・・・！」
（あの馬鹿・・・まさか素手でジュエルシードを・・・！）

そして、無茶でないはずのない封印の仕方は、彼女に負荷をかけないはずがなかった。
「ッ・・・！」
彼女のグローブから光が溢れ出し、表情が苦悶した。
「フェイト！」
綺羅は、ただ見ていることしか出来ない。静まってくれ、と念じながら。
彼の念が通じたのか、フェイトの両手から溢れてくる光は少なくなり、やがて完全に静まった。封印は成功したのだ。
だが、それと同時にフェイトの身体から力が抜け、倒れていく。
「フェイト！大丈夫かい！？」
アルフがフェイトの身体を支える。さすがと言うべきか、敵の只中に飛び込んだと言う気負いは見受けられない。動けない綺羅とは違う。
金縛りのとけた綺羅がどうする、とアイコンタクトを送る。
アルフが綺羅に振り返る。
「どうもこうも、撤退するよ！」
言うか早いか、アルフが飛び上がりビルの屋上に着地した。それに従おうと綺羅が振り返ったとき。
『攻撃、来ます！』
「ッ！」
桃色の光条が綺羅を襲い、それに応じた綺羅が回避する。撃ったのは、なのは。
「悪い、先に行っててくれ。こいつ、俺に用があるみたいだ」
アルフは綺羅を見て、一言。
「綺羅、負けるんじゃないよ。」
「分かってる。・・・行ってくれ。」
アルフが振り返り、離脱する。綺羅はなのはに向き直った。
「どうして俺なんだ？フェイトじゃなくて」
なのははレイジングハートを下げずに言った。

「フェイトちゃんは駄目そうだから――綺羅君も知ってるんでしょ？理由を」
綺羅は目を細めた。知っているも何も、フェイトから理由を聞いたのは彼だ。だが。
「知っていたとして、どうする？」
僅かにライフルに触れる。
「お話をさせて、って何回言ったのかな・・・でも、無理だった。」
「・・・ああ。無理な話だ。」
なのはがレイジングハートを構えた。
「だから、私は戦うよ。ぶつかり合わなきゃ、分からないこともあるかもしれないから」
なのはの瞳から迷いが消えた。綺羅の視界も、すうっと冷たくなった。
「そういうことが言いたいんじゃなかった。けど、こっちのほうが簡単だな。」
こうなることは分かりきっていた。フェイトの笑顔を道標に進んできた彼が、最終的にここにたどり着いてしまうと。
だから、自然と覚悟も決まった。
「私は、あなたを、倒す！」
なのはがありったけの光弾を綺羅に向けて放った。威嚇などではない。
「やれるもんなら、やってみろよ！」
綺羅が同じだけの光弾をフルオートで放ち、全て空中で相殺させる。だが、移動し位置を変えたなのはが二次波を撃ち込んできた。そこにまた綺羅がフルオートで応射、ことごとくを弾き返す。だが、なのはは同じ轍を踏まなかった。弾き返された自らの弾丸にもう一度光弾を放ち、綺羅に向けて撃ちだした。
攻撃、応射、反撃、反射――１００発を超える魔力弾が発射され、その全てが空中で散華した。２人は空中を駆け巡り、互いに向けて攻撃を続けた。まるで、今までぶつかり合わなかった心を、初めて

正面から激突させるように。
綺羅にもなのはにも、自分が防御しているのか攻撃しているのかなど理解できていない。ただ自らに向かってくる光を弾き返す。
反射、反射、反射・・・・・・・・
名づけるなら、機動弾幕戦――
しかし、攻撃的なビリヤードはすぐに終わりを告げた。反射の連続に焦れたのか、なのはと綺羅の距離はじりじりと近づいていた。綺羅の戦法が、なのはの攻撃を反射するのではなく、叩き落して接近するものへと変わっていた。
ある程度まで距離が縮まり、綺羅が実体剣を抜く。なのはが近距離から砲撃を放つが、綺羅はそれを見切っている。身体の回転で回避と加速を同時に行い、それを殺さず叩き付けた。
なのはがレイジングハートを下から斬り上げるように振り、両者が停止する。それぞれの得物から苛烈なスパークと、僅かな金属片が散ってゆく。
「どうして、どうして私たちが・・・」
なのはから洩れた迷いを、綺羅が切り捨てた。
「割り切れと言った！」
綺羅が袖からフォトンサーベルを取り出すのと、鍔迫り合いを嫌がったなのはが彼をいなすのは同時だった。綺羅は咄嗟に実体剣を腰に収めると、追撃をかけようとしたなのはに肩のアタッチメントからブーメランを放った。なのはの体勢が崩れ、命中するはずだった魔力弾がずれる。そのまま空中を駆け上がった綺羅が、今度はフォトンサーベルを切り上げる。
なのはは先ほどの綺羅と同じようにレイジングハートを上から振り下ろす。再び、激突。
眩い光が弾けてゆく中、なのはが叫んだ。
「割り切れるはずないよ！私たち、友達だったのに！」
綺羅が応じる。
「今は敵だ！言ったはずだ、俺はお前を倒すと！」

「ちゃんと話せば、それだけでよかったかも知れないのに！」
「その気はないと・・・言っている！」
綺羅が出力を一気に上げ、フォトンサーベルでなのはを弾いた。レイジングハートが再び振り下ろされる軌道にあわせ、空いていた左手で逆手に実体剣を抜き、一閃。超高硬度に磨き上げられたエシュリデータは、なのはのレイジングハートを、コア付近の柄で両断した。
「レイジングハート！？」
なのはが落下してゆくコアに目を取られた、その瞬間。綺羅はフォトンサーベルを戻し、ライフルを抜いた。即座にシステムアシストにより、なのはを赤いレティクルが囲み、『ｌｏｏｋｅｄ』と表示された。綺羅はトリガーを絞った。数千分の１秒で脳の指令を指が実行し、トリガーの動きがシステムに伝えられ、銃口から光弾が迸った。
外すはずのない距離を弾丸は疾走し、なのはのバリアジャケットで弾けた。彼女が吹き飛び、衝撃で意識を失ったのか目が閉じられ、墜落してゆく。コンクリートに叩きつけられる寸前、あのショックアブソーバーがなのはを包み込んだ。
綺羅はそれを確認すると、背を向け飛び立った。
だが、彼は自分を責めていた。何故自分はなのはの無事を確認するまで動けなかったのか。何故トリガーを引く瞬間目を閉じてしまったのか。
（俺は・・・意気地なしだ・・・！）
二度と迷わない。そう決めたはずなのに――
綺羅は心に誓った。もう迷わないと。
それが、あの悲劇を産むと知らずに・・・・・・・・・・・・

#14　あの日の幻影（前書き）

ここからだんだん鬱になります。嫌いな方はそっとブラウザを閉じてお帰りください。また、クレームの類は一切お受けできませんのでご了承ください。

#14　あの日の幻影

高町なのはは、テーブルの上に置かれた大破したレイジングハートを見つめた。先ほどの戦闘で神近綺羅に両断されたものだ。
待機形態に戻しても、その表面には大きな亀裂が走ってしまっている。現在自動修復システムで修理中だが、完了には一両日程度かかるという。
「なのは・・・」
ユーノ・スクライアが心配げに彼女を見つめていた。
そして、痛いような沈黙が数分続いただろうか。
「・・・戦うよ」
「え？」
「私は、綺羅君を倒す。話すだけじゃ、分かり合えないこともあるんだ。それに・・・」
「それに？」
「きっとそれを、綺羅君は望んでると思うから・・・・」
「なのは・・・。無理しなくても」
いい、と言おうとしたユーノは、見た。
「もう、戻れないね――」そう言ったなのはの頬に、一筋の光が伝うのを。
再び顔を上げた彼女から、表情が消えているのを。
しかし、彼は見ていることしか出来なかった。
見ていることしか――

綺羅宅
「――――ッ！」
綺羅は拳を壁に叩きつけようとして、やめた。今、綺羅の家は彼だけが住んでいるのではないのだ。守ると誓った彼女がいるのだ。だが、今はそのことさえも、彼の心を締め付ける有刺鉄線にしかなり

得なかった。
「どうして・・・どうして俺は・・・ッ」
なのはに割り切れと言ったのは自分だ。先に剣を向けたのも自分だ。
戦えと言ったのも自分だ。なのに、なのはが自分から離れていきそうになった途端、そのことを悔いるなんて――
「俺は・・・俺は・・・ッ！」
事実、彼は疲弊していた。戦闘は多大な肉体負荷と精神的負荷を伴い、しかも敵は自分の友人なのだ。傷つけるわけにもいかず、かといって退くわけにもいかず。
アイツは敵だ――そう自分に押し付けるのも、もう何度目なのだろうか――。
彼がまた、精神的な澱を吐き出そうとしたとき。
「キラ？どうか、したの？」
スライド式のドアが開き、タオルを持ったフェイトが姿を現した。
風呂上りなのだろうか。
綺羅は咄嗟に笑みを作ると、首を振った。
「いや、なんでもないよ。大丈夫さ。」
この台詞は、前はフェイトのものだったのにな――綺羅は疲弊しきった内心で苦笑した。だが、フェイトは綺羅の言葉を無視し、自らのそれを紡いだ。
「キラ、つらいの？」
「――ッ・・・。いや、大丈夫だって。」
と、フェイトは少し安心したように、
「そうだよね。キラは、いつでも強いもんね・・・」
微笑み、お風呂空いてるよ、と言い退出する。
しばらくして。
『辛いと言ってしまえばよかったのでは？』
ダイダロスが念話で語りかけてくる。綺羅はわずかに逡巡したが、きっぱりとかぶりを振る。
『あいつに笑ってて欲しいと願ったのは俺だ。心配なんて、かけら

れるかよ』
『少し前のフェイトさんも、同じことを思っていたのではないですか？』
綺羅は苦笑した。疲れきった心で。
『だろうな。今なら分かる。あいつが無茶してた理由が――』
『マスター、貴方はどうするのですか？』
綺羅は迷わず言った。
『もう、迷わないさ。俺はなのはを倒す。フェイトの邪魔は、誰にもさせない。アイツは、俺が守る。降りかかる火の粉は、俺が焼き払う。それが例え何であっても。誰であっても。』
『きっと、フェイトさんは喜びますよ。』
『それでいいんだ・・・それで』
綺羅は言った。そして彼の瞳に映るものは、どう言っても退こうとしない、なのはに対する憎悪だった――

綺羅は目を覚ます。ここはどこだろうか？
起き上がり、辺りを見回す。覚醒しない脳でも、ここがパーティー等、明るい場所であることは理解できる。
（すずかの、家？）
大理石の床と、高い天井からそれを判断する。テーブルには七面鳥が置かれ、なのはとアリサがドリンク片手に談笑している。
（クリスマスパーティ？）
今年のクリスマスはまだまださきのはずなのだが。自分だけ、永い間眠っていたのだろうか――？
そして。
「キラ、起きた？急に倒れちゃうんだもん、心配したよ？」
「フェイト――？」
どうしてだろうか。この場所に、フェイトがいるなんてありえない。
なのはとは、どうなったんだろう？
アリサやなのはも自分に気付いたようだ。

「何やってんの。起きたんでしょ？今日は楽しまなきゃ。」
「また倒れない程度に、ね。」
ほら、とアリサにグラスを手渡され、コーラを喉に流し込む。が、彼の味覚が捉えたのは、果てしない――苦味だった。
「アリサァ！青汁混ぜたなお前ェ！」
「うっわ。ばれた！」
「だからやめなって・・・」
フェイトがため息をつく。みんなとフェイトは和解できたみたいだ。なら、それが一番いい。ここに、この輪に帰って来られるなら、綺羅にとっては一番いいことだった。恐らく、フェイトにも。
（取り戻したんだ、俺たちは。この場所を――）
そして、彼の世界を。
光が包んで。
そして――

綺羅はもう一度目を覚ました。自室のソファの上だった。
（夢――）
夢だった。平和な世界も。なのはも。アリサも。すずかも。
いや、それよりも。
（やめたがっているのか・・・・）
戦うことを。すべてやめて、あそこに戻りたいと、そう自分は願っているのか？
綺羅はそれを、見えざる拳で握りつぶした。
（そんなことをしても、もうどうにもならない・・・・）
もう遅いのだ。
遅いというのに・・・・・・・・・・

綺羅はフェイトの部屋のドアを開けた。起こすつもりはなかったが、フェイトの顔を見たかった。
フェイトは、そこにいた。

いつもと変わらない寝顔で、いつもと変わらないベッドで寝ている。
そうだ。
（フェイトだけは、夢じゃない。ここにいてくれる・・・）
たとえこの世界が泡沫だとしても、フェイトだけは、現実なんだ。
だから。
（俺は、戦う。その果てに何が待っていようとも・・・・）

#15　悲劇の序章（前書き）

８月は予定がたてこんでいるためこれが最後の更新となりそうです。
。。
時間が空き次第更新していきたいと思います

#15　悲劇の序章

ヴァルハラ　メインアクセスターミナル
「ここか？」
彼が問うた。周囲には数多くのウインドウが開閉を繰り返しており、建造から永劫の時を過ごしても尚実用に耐えうると雄弁に物語っている。
「そう。ここが『ヴァルハラ』。何千年か昔、全ての次元世界をその手中に収めようとしたニンゲンが作った情報収集処理システム。」
対し、彼が笑った。
「全ての次元世界をその手に、か。全く、どいつもこいつも勘違いばかりだな。見ていて滑稽なことこの上ないよ。」
彼を見上げ、少しだけ不満を漏らしてみる。
「私は不愉快なだけ。ニンゲンが次元世界の征服などできるはずもない野望を抱くなんて。身の程を知らない野蛮種など、それこそ預言通りに消えてしまえばいい。」
「おっと、それを言ってはいけないよ。確かにニンゲンは野蛮種だが、ある面では美しい。だから君も、僕と共にここにいるんだ。他の創造種（オリジン）の末裔どもと離反してまでね。」
「私は、時の流れと一緒に頭の中まで化石になったような老害と未来を共にしたくないだけ。あの老いぼれニンゲンを生かすといったら、私は預言を実行しようとしたわ。」
彼はにっと形のいい唇を持ち上げた。
「強がるのはやめておきなよ。君はニンゲンを捨てられない。僕と同じにね。次元世界に定められた運命を覆そうとしてまで、反抗期が続くはずはないさ。」
彼女は唇を噛んだ。彼との言い争いに勝てないのは既に知っている。それでも彼女がたまに食って掛かるのは、彼が常に人を食ったような態度をとる皮肉屋だからというのもあるが、彼女にとっての単な

る知的遊戯としての側面が強いからだ。
「なら、それでいいわ。どちらにせよ、あの老害どもは滅ばす。ここにいるのは、そのための駒。」
彼女がヴァルハラに『管理者権限』でアクセスし、あるプログラムを呼び出した。ポリゴンの結晶という形で呼び出されたそれは、超高密度のエネルギーで作られたオーブといったところか。
「ほう、駒？それが預言を止めるために必要なのかい？」
彼の言葉は沈黙で是と返し、結晶に語りかける。
「起きなさい、神近翼。新しい肉体（いれもの）を用意してあげたわ。」
そしてコンソールのキーを数回叩く。すると、オーブが眩い光を放ち、やがて、収まると。
「もう、俺が身体を動かす機会はないものと思っていたんだがな。また俺の出番か？創造種殿」
長く伸びた黒髪を背中で縛り、整った顔を漆黒のスーツで彩る青年がゆっくりと姿を現した。
「皮肉はいいわ。時間がない」
「あと１０年半か。せいぜい全力を尽くすとしよう」
こうして、新たな仲間（？）を加えた彼女ら一行は、ヴァルハラを退去していく。
「この世界に『幸福』を。」
身を翻すとき、いつもの台詞を残して。

地球　海鳴市
なのはは、綺羅を倒すと決めた。
もう戻らないと決めた。

綺羅も、フェイトを守ると、なのはを倒すと誓った。
もう振り返るものかと決めた。

だから――あの悲劇は、起こるべくして起きたのかもしれなかった。

お互いに歩み寄ることが出来なくなった、そんな2人の行き着く先は・・・・・・・・

ある日の朝
綺羅は目を覚まし、しばらくしてから隣のフェイトの寝室を訪ね、まだフェイトとアルフが眠っていることを確認した。
そして起こさぬまま、部屋を出た。
『起こさないのですか、マスター』
ダイダロスの通信に、迷うことなく答える。
『少しでも休んでて欲しいんだ。封印だけだったら、俺でも出来る。OSも書き換えたしな。』
綺羅はこの朝で、ダイダロスのOSを書き換え、システムをより自分向けに改造していた。書き換えも終わり、二度寝しようとしたところジュエルシードの反応をキャッチしたのだ。
『あれで、いいんですか？あんな、攻撃一辺倒で』
『ああ。あれでいい。防御して耐えるなんて性じゃないし。いざとなったらアブソーバーを使うさ。』
ダイダロスが口調を変え、言った。
『本当に、いいんですね？なのはさんを倒すという選択で。今ならまだ・・・』
綺羅は遮って言った。
『もう、後戻りはしない。俺はフェイトの味方でいる。俺だけは、あいつの傍にいる。例え、世界の全てに否定されようともだ。だから、フェイトの障害はすべて排除する。たとえそれが、誰であっても。どんな存在であっても。』
ダイダロスが静かに締めくくった。
『マスターがその選択をするのでしたら、私はそれに従います。それが例え、どんな選択であったとしても。』
だが、綺羅は忘れていた。
ジュエルシードの封印をすると言った。それが、何のためであった

のかを。誰を守りたかったのかを・・・
「行くぞ。システム・オンライン。」
『システム起動。パワーブロー良好、各部魔力供給レベル、規定値を確認。火器、駆動、動力各系統異常なし。ＯＳ更新適用クリア。オールウエポンズフリー。システム・オールグリーン。発進どうぞ。』
綺羅は暁に染まる天空を睨んだ。背中の魔力翼を展開する。
「発進する！」
朝もやの中を、翼を広げた綺羅が突っ切って行った。

海上
「本当に、いいの？なのは。あの人を倒すって・・・」
「うん。もう、決めたことだから――」
自らのジュエルシードの封印をわざと解いたなのはは、これから現れるだろう綺羅を洋上で待ち構えていた。
正直な話、遭遇戦でなのはに勝ち目はない。いかに探索に力を入れたとしても、綺羅のデバイスはセンサー感度で遥か上を行く。実力差を、さらに地の利で広げられてはどうしようもない。
だから、彼女はそれを逆手に取った。ジュエルシードをセンサーに引っ掛けてしまえば、あとは突っ込んでくる彼を待ち構えていればいいのだ。
網は張った。あとは飛び込んでくる得物を仕留めるのみだ。
（ここで、終わらせるんだ。全てを・・・）
『センサーに反応。来ます』
レイジングハートから通信が入り、なのはも洋上を疾走する漆黒の影を視認する。
（これでいいんだよね、これで・・・）
綺羅は、洋上になのはを確認した時点で、これが釣りであることを確信した。わざわざなのはが、ジュエルシードを発見したのであれ

ば自分を待っている必要性はないからだ。恐らく、自分が過去に封印したジュエルシードを使ったのだろう。その証拠に、自分を確認したらしいなのはがジュエルシードをデバイスに取り込んだ後、こちらに向けてレイジングハートを構えた。
（なら、こちらにとっても都合がいい）
この時点で撤退するのも選択肢的には「あり」だろう。だが、ここで決着を付けられれば、それに越したことはなかった。
彼はなのはの目の前で停止する。
「わざわざ待ち伏せまでしてくれて。俺を倒す気か？」
なのはが静かに、だが確かに頷いた。
「倒すよ。もう、そうするしかないみたいだから・・・」
綺羅はやれやれと首を振った。
「退いてくれれば一番よかったんだがな。まあ、無理か」
なのはは迷いのない瞳で綺羅を見据え、構えた。
「私にも、譲れないものがあるんだ。だから、貴方を倒す！」
綺羅も構えを取った。そして念話で指示する。
『アレをやる。起動しろ』
『了解です、マスター』
「それは俺も同じことだ。・・・お前を倒し、決着を付ける！」
カシャカシャカシャ――軽い音が連続する。綺羅の両膝、両肘にブーメランがセットされ、ブウン、という振動音とともに魔力の刃を纏った。
「全身武装（カメレオン）」
これが、綺羅が書き換えたシステムの正体。敵に付け込む隙を与えず破砕するための、より攻撃的なフォーム。
綺羅が実体剣、ライフルを抜き放った。
「ダイダロス、目標を破砕する！」

#16　友と敵と

あと、10年と169日。
世界が、なくなってしまうまで。
〜預言〜を見た神が、目を覚ましてしまうまで。
なにもかもが、消えてしまうまで。

そんな狂言が書かれているらしい空間を見上げて、神近翼は。
「反吐が出るな」
そう、呟いた。と、彼に同伴していた青年が、
「だけど、君がそう呟くことも預言には・・・」
書かれている、と言おうとして。だがそれは、翼に遮られた。
「ならばなおさらだな。俺達がこうして〜預言〜に立ち向かい、戦うことも全て、書かれているとなると。」
青年が笑った。
「だが、立ち向かわなかった場合、我々が諦めてしまった場合のことも全て、〜預言〜では分岐している。」
全て、ね――、と青年が締めくくった。翼がにやりと笑った。
「随分と諦め腰だな。この世界を最初に創り上げた創造種が。」
すると、青年の横で沈黙を貫いていた美少女が、言う。
「私たちだって、負けることはある。このことが、創造種長老の意に反していることならば尚のこと・・・ね。」
「なおさら、反吐が出そうだ」
そう呟いて、翼がモニター向かい直す。だが少女の――リリアの独白は続く。
「四千万年前、私たちは奴らとの戦争に負けた。講和という形ではあったけど、その条件は降伏となんら変わりないものだった・・・。けど、あの老害どもは唯々諾々と従った。オリジンとしての誇りより、自分たちの地位と命を優先した・・・。これが、腹が立たなく

ていられるものか。あの化石頭どもめ・・・・」
そこまで言ったところで、青年が嗜めた。
「やめなよ、リリア。そうしなければオリジンは絶滅していたんだ。僕たちは進化を疎かにしすぎたのさ。だから人間の文明に取り残された。僅かな自尊心、種尊心、とでも言うべきかな・・・を大事に抱えたまま、それがいつの間にか重石になっているとも気付かずにね。奴らに負け、人間にも負けて、今やオリジンは管理局の保護なしにはいつどの組織に捕らわれて解剖台の上に乗せられるか分からない、そんな儚い存在なんだよ。翼君、哀れと思わないかい？」
翼は振り返る。こうして振り返ることも〜預言〜に書かれていると考えると、相変わらず吐き気を催すが。
「自らを哀れと思う心は、敗者にしかない。つまりお前は今、自らを負け犬と認めたわけだ。」
「さすがに自分を勝ち組だと思うような心はないよ。それに、その感情は君が弟君に――綺羅君に抱いているものと同じだろう？」
翼はフ、と笑った。
「少し違う。俺が綺羅に抱いているものは・・・・・・憧れだ」
「それも、敗者にしかない感情だよね？」
「だから、少しと言ったんだ。」
言いながら翼は、思い出す。綺羅が6歳になってすぐのこと――翼が、綺羅に〜預言〜を見せたときのこと。
『兄さん、これ、何？』
『世界の未来だ。やがて滅んでいく世界の、な』
すると綺羅は寂しそうな顔をして、
『兄さんも、僕も、滅んじゃうの？』
翼は言った。
『ああ。道端で、虫けらのようにな。お前も俺も、遠くない未来に』
だが、綺羅はそれを否定したのだ。翼ですら絶望した〜預言〜を。
必死になって足掻いても、やがて絶望するしかなくなる最悪のモノを。

そして、綺羅はこう言ったのだ。
『大丈夫。兄さんは、僕が守るよ』と。
それを思い出して、やはり翼は笑った。
ひとつはやはりという嘲笑。守るといって、結局自分が実体を失うのを止められなかった綺羅に対しての嘲り。
そして、もう一つは。
過去を、未来を、現在(いま)すら失いそうになってもまっすぐに戦い続ける、綺羅への敬服の笑み・・・

地球
朝もやの晴れつつある洋上を、2つの影が幾度も交差しながら乱れ舞う。もちろん戦闘状態にある綺羅となのはのものだ。
全身武装(カメレオン)
綺羅が実装した、その戦闘力は桁外れだった。全身が武器といっても、その扱いが容易ではないことくらいなのはにも察することが出来た。
故、その『不慣れ』を突破口にしようと考えていたのだが――――なのはの『突破口』は、いきなり出口としての役割を果たさなくなった。
その理由の一つは、綺羅の両肘両膝に装備された刃の、稼動範囲の広さ。
内向き外向きといった刃の方向を自由自在に、それも挙動ごとに合わせて変更させることが出来るとは。
今もそうだ。
実体剣が喉もとを狙って突き出される。それは回避する。しかし、次の瞬間肘の外側を向いていたショートブレイドがなのはに迫る。
それも身体をそらせ回避。だが次の瞬間、戻される肘の動きに合わせて、今度は内側を向いた肘の刃が牙を剥く。
これは回避しきれず。ヂッという嫌な音と共にバリアジャケットから火花が散っていく。

なんという手数だろうか。一撃分の動きの中に、三つの斬撃が襲い掛かってくる。
そしてそれを、綺羅が完璧に操っているから更にたちが悪い。　不慣れ、という突破口を思い描いていた彼女は、早々にその楽観論を放棄せざるを得なくなった。
旋回し、砲撃で牽制し、刃をぶつけ合う。そのたびに、重低の激突音と凄まじいスパークが朝もやの中散っていく。
――どうして、こんなことに。
ほんの数週間前、彼らは友人だった。言葉を交わし、共に笑いあう、そんな関係だった。そしてそれは、いつまでも続いていくと思っていた。
なのに今は、こうして刃をぶつけ合っている・・・
「どうして！？」
身体ごとぶつけるように剣を交えた。
「どうして戦いあわなきゃいけないの！？」
無駄だとは分かっている。それでも、なのはは叫ばずにはいられなかった。彼女は知っているのだ。自分はどうあっても、綺羅に最後の一撃を加えることはできない、と。
心ゆえに――
「何を今更！」
綺羅が応じた。その間にも、膝の刃でなのはの首を刈ろうとハイキックを叩き込む。だが彼女は巧みにそれを回避、零距離から魔力弾を連射する。
「討てばいいだろう！お前も言ったはずだ！俺を倒すと！俺を討つと！」
綺羅は残像さえ残りそうな速度で実体剣を振り、その全てを迎撃した。だが次の瞬間、意識を僅かにそらしていたなのはが後退し、こちらを狙っているのが見えた。
砲口が臨界、眩い光の矢が綺羅をめがけ一直線に駆ける。
「ダメージアブソーバー！」

綺羅は左手を迫ってくる光に向けかざす。複雑な魔方陣が回転しながら現れ、実体を持たぬ盾となった。
直後、激突。
「・・・・・・・・・・・・ッ！」
砲撃特化型とあって、レイジングハートの射撃威力はかなりのものだ。アブソーバーを展開している綺羅の表情でさえ歪む。
しかし、アブソーバーは光の奔流に耐え切った。さすがに左手の袖は破れているが、それ以外にダメージ報告はなかった。
なのはが息を呑むのが見えた。きっとそのとき、綺羅は阿修羅のような表情をしていたに違いなかった。
――好機。
今なら、なのはは硬直している。この瞬間に突撃をかければ、硬直状態から復帰して防御姿勢をとるまで3秒はかかる。その時間なら、間に合う。
「堕ちろッ！」
実体剣を――エシュリデータを構え、最大速度でなのはめがけて突っ込む。飛行しながら腰と剣を引き、水平突きの構えを取る。
対してなのははようやく硬直から解放され、防御術式を組み立て始める。だがその動きを、綺羅は予め読んでいた。そして事実、術式を組み上げるより、エシュリデータの渾身の突きがなのはに到達する方が、明らかに早かった。
「う・・・あああああぁぁぁぁぁッ！！！」
そして、必殺の剣先が。
なのはの首筋に到達――――
しなかった。
必殺の突きは、何者かによって展開されたシールドに防がれ、なのはに到達していなかった。
「なのは！大丈夫！？」
「ユーノ君！？」
そしてシールドの先には、温泉の一件で戦った、なのはの使い魔。

――敵。
そして、綺羅の兵器として先鋭化された意識は、本人が自覚せずとも行動を開始してしまう。
残酷なまでに冷静に、冷酷に。
ライフルを撃ちかける。だが、それはフェイント。ユーノがシールドを展開して再び防衛するが、その時既に綺羅は側面に回りこんでいた。
「邪魔だ――――」
肩のアタッチメントを外す。そこには、初期起動時からそのままの魔力刃ブーメラン。それを、ユーノめがけ、投げ放った。
ユーノが、巨大な殺意に振り向く――――
一瞬前。
ブーメランは、あまりにも正確に、あまりにも冷淡に、ユーノに命中した。

激突。
衝撃。
轟音。
そして――――暗転。

#17　たった二人の戦争（前書き）

いろいろあって更新できませんでした・へ・

また更新して行くんでよろしくです

#17　たった二人の戦争

気がつくと、身体は動いている。
何も感じずとも、勝手に。
だから、彼女は自分が何をしようとしているのか分からなかった。
気付くと、得物を構えていた。
メノマエニイルノハ、ダレ？
オチテイクノハ、ダレ？

彼女の中で、何かが弾ける。視界が拡張され、思考がクリアに澄みわたる。

そして。
コロセ――――

彼女は、なのはは――

綺羅がユーノを撃墜している間に、なのはに距離を開けられてしまっていた。ここから砲撃を集中させられれば、そのまま押し切られてしまうかもしれない。
（・・・一度撤退して、体勢を立て直すか？）
それもありだろう。不利な状況となれば、撤退も仕方あるまい。なのはの砲撃は一撃でダイダロスを大破させるだけの威力を秘めており、遠距離戦では勝ち目がない。
（・・・・仕方ない。決着は次か。）
綺羅は決着を諦め、背を向けようとした、瞬間。
『マスター、砲撃来ます！数、１６！』
「１６！？」
直後、システムが一気にアラートを喚き立てた。光の点が円柱に早

変わりし、時間差で綺羅を追い詰める。
「ッ！」
フルオートで迎撃するが、全てを弾き落とすことは出来なかった。
数発が掠め、バリアジャケットから擦過音が聞こえた。
「ユーノ君を・・・・」
「なのは？」
なのはの調子がおかしい。身構えた綺羅に向かい、なのはが絶叫した。
「ユーノ君を、返せえええええええぇぇッ！！！！」
耳を切り裂いた絶叫、いや咆哮か。綺羅の身体が固まった。
このとき、なのはは、使ってはいけないものを使った。
綺羅相手には、絶対に使えない、といっていたものを。
即ち、殺傷（キル）モードを。
「あああああッ！」
レイジングハートの砲口が臨界する。回避しようとした綺羅は、自分の身体に光の鎖が巻き付いているのを見た。
（・・・・・死、ぬ？）
「食らえええええっ！！」
だが、綺羅に死を甘受する気は毛頭ない。
「フォトンサーベル！」
綺羅の袖からサーベルが飛び出し、光の鎖を断ち切った。そのまま急加速し、光の凶弾を回避する。
振り向いた綺羅は、もう一度レイジングハートの砲口が光り始めているのを確認した。
「嘘だろ、おい！」
回避した光柱は海に突き刺さり、大量の海水を蒸発させた。
『マスター、キルモードが起動されています。あれを被弾したら、肉体ダメージが！』
「なんだよ、それは！」
喚いている暇はなかった。殺意を結晶化した弾丸が、綺羅の肉体を

噛み砕こうと追いすがってくる。
「クソが！」
フォトンサーベル、エシュリデータの二刀流で迫り来る砲撃を叩き落す。だが、攻撃は終わらなかった。
「レイジングハート、―セイバー――・・・」
砲撃用のフォルムだったレイジングハートが変形する。砲後部は根元にスライドして鍔に。そこから魔力刃が出現し、物理的な攻撃力を持ってレイジングハートを彩った。
「オマエが・・・オマエがァッ！」
綺羅の迎撃など気にしないと言わんばかりに突進してくる。だが、そんなものに惑わされる彼ではない。
「ッ・・・馬鹿がッ！」
ライフルを抜き、連弾を放つ。なのはが回避行動をとらなければ全弾が命中、そのまま鎮圧する――
が。なのはにはまるで弾丸が粘性の高い液体の中を泳いでいるように見えた。殺意の塊となっている現在の彼女に、それを体感することはできないのだが。
鋭角的にすべての魔力弾を回避。隙を突く必要すら存在しない。彼女は既にそれを凌駕している。
綺羅の、いや知っている誰かの姿が目の前に迫る。一刀両断するべく、なのははレイジングハートを振り下ろした。
寸前、綺羅はエシュリデータを斜めに切り上げ、それを受け止めた。雨が振り続く空で、スパークだけが眩い光を放っていた。
「どうしたんだよ、畜生！」
「殺した・・・」
「！？」
なのはの押し殺した声に、綺羅は気圧された。
「オマエが、殺したッ！」
「ッ！」
一気にレイジングハートに力を込め、綺羅を突き飛ばす。瞬間でレ

イジングハートを砲撃モードに変更、８つの魔力弾を放つ。
綺羅は光弾の間を縫うように回避、自分が得意とするショートレンジに入る。今のなのはにロングレンジを取られたら、と思うとうなじが逆立った。
（だが、読みやすい）
同時に彼はそうも感じていた。なのはは戦闘力こそ圧倒的に上昇しているが、その分思考回路は攻撃一辺倒になっている。付け入る隙はあるはずだ。
そして、その読みは当たる。なのはが決着を急ぐように、剣と化したレイジングハートを振り上げて直情的に突進してきた。
地の利も彼にある。いつのまにか森に移動していたらしく、樹木がなのはの視界を遮っているだろう。だから――
なのはの一閃を回避、大木の陰に隠れる。一瞬後、なのはの全く予想していないであろう下方からエシュリデータを構え討ちかかっていく。今のなのはは危険だ。一刻も早く無力化する。
「いいから、落ち着けッ！」
攻撃後で硬直したなのはに、エシュリデータを突き出す――
『あたしたちと喋るのが嫌なら、好きなだけぼーっとしてればいいじゃない！』
その刹那に響いたのは、アリサの責め。彼が引き起こした。悲しすぎる決別。
（俺の、せいで――）
が、綺羅は一瞬だが失念していた。戦闘中であること。いまのなのはが、綺羅を殺そうとしていること・・・・・・
「ッ」
息を呑む暇すらなかった。レイジングハートの攻撃的な輝きが、彼に向かって疾走し――
フェイトは。起きた後すぐにアルフから綺羅がなのはと果し合いに向かったと聞き、戦闘空域に駆けつけていた。そこで見たのは、叫

び続けて綺羅を攻め立てるなのはと、それを顔を歪めて避け続ける綺羅の姿。
援護しようにも、その先頭は苛烈すぎて、入り込む隙など到底なかった。
（大丈夫。キラは、絶対負けない。そうだよね？）
フェイトの願いが通じたのか、状況は刻々と綺羅に傾いていく。そして、なのはの大振りな攻撃が避けられ、綺羅の必殺の水平突きがなのはに――
到達、しなかった。綺羅の行動は寸前で停止し、逆になのはの斬り下ろしが綺羅に迫る。
「キラ！」
フェイトの肉体は、彼女が思考を開始する前に動いていた。大切なヒトを守るために。
考えることも出来なかった。なのはのキルモードと化した刃に命中すれば、自分がどうなるかなど。
ただ、守りたかった。
大切な、大好きな綺羅を――

「キラ！」
「フェイト！？駄目だ、来るなッ！」
なのはが刃を振り下ろす直前、フェイトが綺羅に体当たりし、綺羅を弾き飛ばした。
綺羅が叫んだのはそれと同時か、それともその後か。
しかし、そんなことは結果に何の影響も及ぼさない。
綺羅の代わりに刃に身を晒したフェイトは。
鮮血を散らし、地上へと落下していく。
息をすることすら出来ない綺羅は、見た。フェイトの口元が僅かに動き・・・・・
―ありがとう。ごめんね―

「フェイト――――――――！！！」

綺羅の中で、何かがキレた。

怒りが支配しているはずなのに、妙に身体が冷たい。
全てがスローモーションのように見えて、視界が広がり、思考回路がクリアに澄み渡る。
そして、聞こえた。

コロセ――

結果は、綺羅が下した指示。

「ダイダロス、殺傷（キル）モード・・・・」
瞬間、綺羅は動いている。目の前の「敵」に叫びながら。
「なのはぁぁぁぁッ！」
綺羅は、何も考えていなかった。自分が口にした「なのは」が誰なのかも考えられなかった。メノマエニイルヤツガ、フェイトヲコロシタ。ダカラ、コロス。
「うおおおおおおおおおおッ！」
エシュリデータが振り下ろされる直前、なのはが魔力収束砲を放った。これは辺りに拡散した魔力を文字通り収束させて放つ砲撃で、あたりの魔力濃度が濃ければ濃いほど強力になる。特に今などは、二人が死力を尽くして戦っているのだ。威力は絶大。一撃で昏倒（スタン）、いや死んでもおかしくない。
だが、今の綺羅はそんなことを考えてすらいない。目の前にいる、フェイトを殺したヤツを殺す。それだけだった。
右腕で身体を庇う。耐えられるはずもなく、バリアジャケットは引

きちぎられ、腕から紅い液体が舞った。
だが、綺羅は痛みを感じてすらいない、手放したエシュリデータが爆発したのは、引き起こされた音と煙で知った。
右腕にホールドされていたサーベルは無事だった。それを引き抜き、振り下ろす。なのははそれをまともに受け、引き裂かれたバリアジャケットから火花と血が飛んだ。
なのはは理性が僅かに残っているかのように後退、綺羅の名を叫びながら再び突撃してきた。
「綺羅あぁぁぁぁッ！」
負けじと綺羅も叫ぶ。
「なのはぁぁぁぁぁッ！」
触れ合うほど接近した二人は、互いに剣を振り合う。綺羅のわき腹が引きちぎられ、なのはの肩口に裂傷が刻み込まれる。それでも二人は戦闘をやめない。血みどろの円舞曲を踊り続けるかのように。
綺羅が渾身の蹴りでなのはを弾き飛ばす。なのはが空中の見えない壁を蹴るかのように反転して刃を振るう。
左手の神経をやられたのか、左腕の感覚が一瞬消え、サーベルの１本を取り落とす。
だが、まだだ。なのはが追撃の突きを繰り出そうとしているのを見て、綺羅は出血でろくに動かない身体を意思でねじ伏せ回転させる。なのはの突きにこめかみの辺りが裂けるのを感じながら、遠心力に任せ身体をひねる。
――殺った！
どれだけなのはが速く身体を動かしても、絶対に回避することは出来ない。綺羅の口から、意味のある叫びが迸った。
「フェイトの、仇ィィィィィッ！！！！」
だが。彼の鼓動に合わせ、再び全身に走る傷から血液が漏れ出した。
限界を超える出血によって、綺羅の意識レベルが低下した。
そして、ダイダロスの安全機能（セーフティ）が起動する。
『意識レベル、限界まで低下。システムを強制シャットダウンしま

す。意識レベル、限界まで低下。システムを強制シャットダウンします。意識レベル・・・・・・・・・』
同時に、バリアジャケットが消失。綺羅の意識も落ちた。力を失った綺羅が、地面に向かって落下を始める。
なのはは止めを刺すべく、綺羅に向かいレイジングハートを構え――ることができなかった。彼女の意識も、すでに限界を超えて低下していたのだ。それが気の緩みから一気に表層化し、彼女もまた力を失い、墜落していく。

綺羅が落ちてくるのを、人間モードのアルフが見ていた。彼女は墜落してきたフェイトを救出、傷の浅いことを知り応急処置を終えたばかりだった。
綺羅の傷は、酷いものだった。全身に裂傷を負い、右腕は大火傷している。かなりの出血で、意識もなかった。
「なんてことだい・・・・すぐに帰って手当てしないと・・・・！」
意識の戻っていたフェイトも駆けつけ、大怪我を負った綺羅に叫ぶ。
「キラ、嫌だ！死なないで！」
大きな瞳から涙を流し、綺羅に叫び続ける彼女を制し、アルフは綺羅宅まで急ぐ。
フェイトが始めて心を寄せた少年を救うために。

綺羅は、意識を失っていたから、自分がどうなっているか分かっていない。
だから、考えることすら出来なかった。
なのはが森林公園を散歩していた人に発見され、病院に運ばれていたことを――
自分が犯した、償うことの出来ない罪の事を――

＃　１８　空白（前書き）

ちょっとバタバタしていて更新止まってました・へ・
また更新していきます

＃１８　空白

敵が、いる。

ならば、どうするか。

簡単だ。

倒せばいい。消してしまえばいい。

「フェイトの邪魔を―するなッ！」

手にした実体剣を一閃。そうだ、俺が守ると決めた。

しかし。

『綺羅・・・君・・・』

「なのは――！？」

敵だと思っていた影は、なのはに変わり。

堕ちてゆく。

伸ばした手には、粘度の高い、紅い液体が広がり。

やがて、彼の世界も紅く染まった。

そして、世界が回転し始める。ゆっくり、ゆっくりと。

そして、彼は。

綺羅は――――

「キラ・・・キラ！」
「――――ッ！」
誰かに呼ばれて、綺羅はゆっくりと目を開けた。
白の天井。ダークグレーの壁。
そして、いつも自分が寝ているベッド。

――俺は、あの時、死んだ――
最後に覚えているのは、ダイダロスのアナウンス。
あの後、自分はどうなったのだろうか？

「キラ、大丈夫？」
綺羅が目を開けたまま動かないのを心配して、フェイトは声をかけ続ける。
彼は痛む首を動かし、彼は涙をためた瞳でこちらを見るフェイトを捉えた。
「フェイト、お前、死んだ・・・」
ああ、そうか。
ここはきっと死後の夢なんだ。
だから、こんなに身体が重いのか。
と、フェイトが激しくかぶりを振った。
「大丈夫だよ！キラ、ちゃんと生きてるよ！」
「え・・・？」
あの時、自分の意識は確かに落ちた。なのに、生きてる？
「アルフが、助けてくれたんだよ。」
「アルフ、が――？」
フェイトが頷く。
「おまえは、大丈夫・・・ぐあっ」
ベッドから身体を起こした瞬間、激甚な痛みが体中を駆け巡った。
フェイトが慌ててベッドに綺羅を寝かせる。

「駄目だよ、怪我、ひどいんだから・・・」
言われて、自らの身体を見る。それはもう、ひどいものだった。
左腕はギブスに吊られ、動かすことが出来ない。いたるところに包帯が巻かれ、怪我の重さを思い知った。
「お前は、大丈夫、なのか・・・？」
荒い息をつきながら、何とか訊ねる。綺羅にとって、重要なのは自分の怪我などではなく、フェイトの具合であった。
「うん、怪我は軽かったみたい。もう大丈夫だよ。それより、キラの方が心配だよ。３日も起きなかったんだよ？」
ほら、と肩を回してみせる彼女に、綺羅は始めて安堵する。守れたのだ。今度こそ、大切な彼女を――

だが。

――なのは、は？

「ッ・・・・・・・・・！！！」
息が詰まる。

自分は、何をした？

殺した。
憎しみのままに。
獣のように。
絶叫して。
殺した――――！

「あああ・・・あああぁぁぁぁぁあああああぁぁぁッ！」
「キラ！？」
「ち、違う・・・あれは・・・俺じゃ・・・いや・・・あれは・・・

・」
どれだけ現実を見まいとしても、現実は彼の脳に事実を刷り込んでくる。
あのとき、なのはを傷つけたのは自分。
彼女の肉体に、刃を突き立てたのは自分。
彼女を、喚きながら傷つけたのは・・・・・・
「嫌だ・・・ああああぁぁぁッ・・・・違う・・・・あんなの・・・・」
精神が安定しない。ごうごうと耳鳴りがする。
意識が、肉体から離れていく―
「キラ！大丈夫だよ！私は―」
綺羅に駆け寄ろうとしたフェイトを、アルフが制した。
「今は、そっとしておいてやりな。そのほうが、綺羅のためだよ。」
アルフがフェイトを連れて部屋から出て行くのも、綺羅には遠い世界の出来事のように感じた・・・・

数刻後。

「落ち着いたかい？」
アルフが差し出したコップの水を一気に煽る。ひやりとした感覚が喉を撫でると、幾分か冷静さを取り戻していることに気付いた。
「俺は・・・殺したのか・・・」
アルフが、重々しく口を開く。
「けど、あんたはああしなきゃ殺されてた。それに、フェイトも・・・。あの子はもう、言って止まるような状態じゃなかった。だから、自分を責める必要なんて・・・」
綺羅は思わず、それを遮った。
「でも、そこまでなのはを追い込んだのも俺だ・・・撃たなければ終わらないと、誘導したのは・・・」

痛いほどの沈黙が、空間を支配した。綺羅の心に刻まれた傷の深さを考えれば、軽々しく何かを言えるような雰囲気ではなかったし、だからといって軽口を叩いて彼を励まそうとも、アルフには思えなかった。
静寂を破ったのは、綺羅であった。
「誰が言ったんだろうな。割り切れ、なんて。」
「綺羅・・・？」
アルフが振り向いた先の綺羅は、泣いていた。
「割り切れてなかったのは、俺のほうだ・・・はは っ・・・」
涙は止まらない。自嘲の言葉を吐き続けても、溢れてくるのは後悔ばかりだった。
けど、とアルフは言った。言葉を選びつつ、続ける。
「あんたは、フェイトを守ってくれた。あんたに守られた命だって、確かに存在するんだよ。綺羅は傷つけたばかりじゃない。それに・・・」
この先は、落ち込んでいる少年に言うべきことか、アルフは迷った。だが、敢えて口にする。
「両方を選ぶなんて、最初から無理な話だよ。あんたは、それを知ってるはず。フェイトを守ると決めてくれて、ありがとうね・・・」
夕食はフェイトが持ってくるよ、と残すと、アルフは退去した。
自らの強いた結果に、誰知らず心を痛めながら。

翌日、朝。
不思議なもので、綺羅の傷の治りは奇跡的に速く、たった3日寝込んだだけで、ほぼ元通りに傷は塞がってしまった。
アルフもフェイトも、目を丸くしていたものだった。
だが、元に戻らないものもあった。
大破したダイダロスは、自動修復昨日でリストア中だ。こちらも、あと一両日中には再起動可能な状態にもっていけるらしい。
だが、綺羅にとってそんなことはどうでもよかった。元に戻らない

もの、それは・・・
『先日、海浜公園で重体で発見された少女は、現在も海鳴総合病院で治療を――』
なのはは、自分のようにはいかない。ニュースが流れるたび、綺羅は拳を強く握る。そうしていなければ、自責の念が身体を破って溢れ出てしまいそうだった。
自分のしたことは、取り返しのつかないことだ。
だからといって、警察に出頭する気にもなれない。凶器は説明しても理解されないだろうし、何よりそうしてしまうことでフェイトと離れなければいけないことが、彼には何より辛かったのだ。
今日も、彼女はいつもと変わらない笑顔で接してくれた。
言葉を掛けてくれた。
自分に触れてくれた。
綺羅が自傷行為に走らなかったのは、フェイトの支えがあってこそであった。
――これから、どうすればいいんだろう？
綺羅は考える。
しかし、答えはいつまで経っても出そうになかった・・・・・・・・

数刻後。
綺羅は、海鳴総合病院のとある病室の前で、もう数分は立ち止まっていた。その病室に掲げられたプレートには、『高町なのは様』と刻まれている。
なのはは一命をとりとめ、入院中だと級友からのメールで知った彼はここまで来たものの、これからの行動について、どうするのが最善か計りかねていた。
勇気を出して、このドアを開けようか？
しかし、なのはから掛けられる言葉が、辛辣な自らへの叱責だったとしたら？

それを考えた瞬間、彼の足はモルタルの床に縫い付けられたように固まってしまったのだ。
引き返せば、良かったのかも知れない。
だが、そうすることで、なのはがさらに傷ついたとしたら？
結局、綺羅はどちらの方向にも進めず、メビウスの輪の上を歩いているような感覚に襲われていたのだ。
――覚悟、なんて、決められていなかったんだな・・・・・・・・・・・・
結局、綺羅はドアを開くことが出来なかった。
目を閉じ、振り返る。
そして、そのまま引き返す。
時計を見ると、もう2時間も病室前で立ち尽くしたことになっていた。
さぞかし不審者めいて見えたことだろう、という思いが鎌首をもたげ、綺羅はそれを何を今更、と蹴飛ばす。
綺羅は自宅を目指す。
帰れば、フェイトが優しい言葉を掛けてくれると信じて。
挿入歌『柔らかな忘却』
綺羅は帰路の途中、とあるゲームセンターの前で足を止めた。
ここはかなり前に、なのは、すずか、アリサの4人で来た場所だ。
たしか、あれは学校帰りにプリクラを撮ろうという話だったか。
『いいからあんたは真ん中なの！』
アリサに強引に真ん中に立たされたのを覚えている。それ見て他2人が笑っているうちにシャッターが降りてしまい、随分と間抜けな

構図になってしまったものだった。
あの頃が懐かしかった。
魔法も、異世界も、ジュエルシードも知らず。４人で笑いあえた、
あの頃が――

しばらくすると、見覚えのある店がまた見えた。
フェイトと出かけたとき、あの白いワンピースを買ってあげた場所。
あの陽気な店員は、今日も元気に働いているのだろうか？
あの時のフェイトは、とても可愛くて。
確かに自分は幸せだった。彼女が喜んでくれるのを見て、満たされていた。
それが、今は――
また綺羅の思考が負のスパイラルに陥りそうになったとき、綺羅の袖を誰かがつかんだ。
「キラ？」
「フェイト・・・」
「キラ、どうしてここに？」
綺羅は薄い笑みを作ってそれに答えた。
「いや、怪我も治ったし、ちょっと散歩にな。」
「そっか。でも、まだ無理しちゃ駄目だよ？」
綺羅は今度こそ笑ってしまった。今までとことん無理をしていたのは誰だ？
「お前に言われたくないな・・・」
「うぅ・・・意地悪・・・」
綺羅はまた笑った。どんよりと重い部分が、少しだけ抜けてくれた気がした。
彼にとってフェイトは結果だ。自らが戦い、守った結果。
彼女が笑顔でいる限り、彼の戦いには意味があったのだと思うことが出来た。
それは、たとえ今でも変わりはない。

「今日、お鍋にしようと思って、いっぱい買ってきたんだよ。帰って食べよう？」
フェイトは両手に重そうな袋を提げていた。きっと、自分の快復を祈って買ってきてくれたのだろう。それを思うと、不意に泣いてしまいそうになった。
「そうだな・・・。帰ろう・・・。」
綺羅は、フェイトが提げていた袋のひとつを手に取った。そして、空いた右手を、フェイトの左手と繋いだ。
「あ・・・」
フェイトは頬を染め、しかし確かに、微笑を浮かべた。
手を取り合った影は、他愛のない話に談笑しながら、家路についていった・・・・・・

＃　１９　失くしたもの

ぐつぐつと、鍋が煮える。
多少季節外れではあるが、鍋を囲む綺羅とフェイトの表情は明るかった。
「美味しいねー」
「そうだな・・・」
白滝を口に運んでいた綺羅は、フェイトの取り皿を見て言う。
「野菜も食べろよー。太るぞー。」
フェイトが多少顔を紅くして言い返す。
「ちゃ、ちゃんと食べてるもん。・・・意地悪」
「ッ」
不覚にもドキッとしたのは秘密だ。
（こんな幸せが、いつまでも続けばいいのに・・・・・）
綺羅は、思う。
自分の犯した、償うことが出来ぬ罪を――

彼は、逃亡者だ。
自らの過ちから目を背け、フェイトの笑顔の中に、彼女の言葉の中に逃げ込んでいる。
だが同時に理解している。
この行為が、その場しのぎに過ぎないことを。
そして同時に理解する。
自分にとって、これ以外の選択肢など残されていないということを。

鍋は煮えていく。
綺羅の心を侵していく闇を振り払おうとするように。

海鳴市警察署　レストルーム

「本っ当、訳が分からん事件だよな。早朝の公園で、小学生があそこまでぼろぼろにされるとは。しかも、当時の記憶がそのまますっ飛んでると来た。」
刑事の一人が、缶コーヒーを一気に煽る。砂糖の甘ったるい香りが喉をくすぐる。
「全くです、先輩。一課は通り魔で片付けたいらしいっすけど、不可解な点が多すぎです。」
後輩の同意を得て、刑事はさらに続けた。
「あんな早い時間に外を出歩いていた理由、現場付近の樹が折れていた理由、裂傷に加えて打撲、骨折まで負わせた凶器・・・分からんことばかりだ。」
空になった缶をダストシュートに叩き込む。彼は語り続ける。
「それに、ガイ者の女の子は自宅の鍵を持っていなかったのに、自宅の鍵は閉まって、且つ犯行時刻には誰も起きていなかった。所持品を漁られた形跡もない。」
後輩刑事も手帳を捲り、『不可解な点』を挙げていく。
「それに、同日の未明に観測された、謎の発光現象・・・」
刑事は首を振った。
「もう、何がどうなってんだ？狐にでも摘まれた気分だぜ。」
後輩が重い空気を振り払おうとしたのか、軽口を叩いた。
「魔法、とか？」
先輩刑事は鼻で笑った。それが真実だとも知らずに。
「馬鹿言うな。そんなもん、それこそ化け狐にしか使えんだろうよ」
「そうっすよね、ははは・・・」

海鳴小学校　教室

「なのは、通り魔に逢ったんだって？」
「何か、一命は取り留めたものの、ヤバイ怪我らしいよー」
「高町さん、大丈夫かな・・・お見舞い行こう・・・」
朝から、教室はこの話題で持ちきりだった。なのはの身を案ずるもの、犯人に憤りを募らせるもの。その反応は、級友が重傷を負わされたクラスメイトとして、ごく当たり前の反応だった。
もちろん、アリサとすずかにとても例外ではない。
「なんで、なんでこんなことになるのよ・・・よりによってなのはが・・・」
「アリサちゃん・・・」
喧嘩別れのようになってしまっているが、アリサはここ毎日なのはのことしか話していない。『言い過ぎた』と反省もしていた。それは傍にいたすずかがよく知っていた。
「お見舞い、行こうね。」
「分かってるわよ。今日学校終わったら、一番乗りで行ってやるんだから。」
ああ、やっぱり『友達』なんだな、とすずかはほっとするが、彼女は同時に異変を察知していた。
「あれ？綺羅君は？」
綺羅がいない。最近彼は欠席が多かったし、そこまで特別なことでもない。だが、状況のパズルは、アリサとすずかにひとつの答えを導かせた。
その疑問はやがて、別のクラスメイトにも伝わっていった。
「最近、本当に綺羅見ないよなー」
「でも私ね、見ちゃったの。神近君が、女の子と一緒に家を出てきたところ！」
「マジ？それ、どんな子だった？」
「それがね、もう金髪の滅茶苦茶可愛い子で、日本人じゃなかったみたい。横文字の名前呼んでたし。それでね、そのこが、神近君のこと、『綺羅』って呼んでたんだよ！呼び捨て！ファーストネーム

！」
「あ、それ知ってる！前、ゲームセンターで一緒にクレーンキャッチャーやってた！」
後半はほとんどアリサの耳に届いていなかった。
導かれたのは、ひとつの結論。
「すずか、今から綺羅の家に行くわよ。」
「え？」
聞きなおしたすずかに、アリサはきっぱりと言い切った。
「アイツは知ってる。なのはの怪我のこと、あたし達が知らないことを、全部！」
言うか早いか、鞄を攫み、ついでにすずかの腕も攫んで駆け出す。
途中で教員に呼び止められたが、『家の用事を思い出しました』と言って駆け抜ける。
ただ、駆ける。
真実を知るために。

同時刻　綺羅宅
「じゃあ、行って来ます、キラ。」
「ああ、気をつけろよ。ホントは、俺も行ければ、いいんだけど。」
綺羅は玄関先でフェイトを見送った。ダイダロスは自動修復を終え、起動できる状態にあるものの、ＡＩは綺羅の怪我の容態を知るや否や『そんな状態で出撃させるわけにはいけません。休んでいて下さい』と言い放ち、怪我がある程度治るまではセットアップしない、と主張しているのが現状だ。
フェイトが笑顔で首を振った。
「いいの。キラは休んでて。怪我が治ったら、いっぱい頼りにさせてもらうから、ね？」
そう言われてしまえば、綺羅に言い返すことなどできはしない。『分かった』とだけ言うと。アルフに向き直る。

「アルフ、フェイトのこと、頼む。」
アルフは笑う。
「誰にモノ言ってんだい。アンタに会う前、フェイトのサポートをしていたのはこのあたしだよ？任せておきなさい。」
それに、と続けた。
「アンタが待っててくれる、それだけでフェイトは元気になれるんだよ。だから、帰りを待っていてあげな。」
綺羅は自分のことを幸せだと思った。頼りにしてくれる人がいる。
必要としてくれる人がいる。
だから、自分には生きている意味がある。
「分かった。待ってるよ。」
最後にフェイトの頭を撫でると。彼女は頬を染め、立ち去った。
一人残された綺羅はリビングに向かった。フェイトといつも並んで座るソファ。彼女が途中で寝てしまい、綺羅の膝を枕にしたこともあった。ヴィジュアルバンドの曲を2人で聴いたこともあった。そのソファも、彼女がいないだけで何か寂しく見えた。
（アイツに頼ってたのは、俺のほうだったんだな・・・）
綺羅が何度か分からないため息をついた、その時。
インターホンが鳴る。手元にコンソールを寄せ、玄関のカメラ映像をアップすると。そこにいたのは。
肩で息をしている、アリサだった。
「どうしたんだよ？」
アリサが間髪要れずに言った。
「どうしてもなにも、話してもらうわよ、全部！」
綺羅は悟った。全て知っているのだと。
それでも、怖かった。話すのが。その結果が、
だから、拒絶する。
「話すことなんて――！」
「綺羅君、お願い！」
「ッ！」

すずかが悲痛な声を上げる。
「お願い、私達は知りたいの。綺羅君となのはちゃんにいったい何があったのかを。どうして、あんなに仲が良かった綺羅君達があんなことになっちゃったのかを。お願い、教えて！」
強引に閉めようとドアにかけた手が固まった。彼女の叫びは、それだけの威力を持っていた。
それと同時に、絶望に似た罪悪感が彼を襲う。自分が欺いていたのは彼女達なのだと。フェイトの笑顔のためと、悟った振りをして切り捨てたのは、これだったのだと。
『上がるわよ』そう言ったアリサの声すらも、彼には遠い異世界のもののように感じた――

「全部、話して。」
ソファに座るなり、アリサは言った。その目には一切の嘘を許さない意志の力があった。隣のすずかも然りだ。
それに、こうなった以上、綺羅に選択肢など残されていない。話すしかなかった。
だが、彼は恐れていた。何を今更、ともう一人の彼が哂う。こうなることは、覚悟していなかったのか？と。
彼は渇ききった口を開いた。
「全部話せと言われても・・・何から話せばいいのか・・・・・・・・・」

全て、話した。
フェイトのこと。
魔法のこと。
ジュエルシードのこと。
なのはのこと。
そして―戦ったこと。

「これで、話は終わりだ。もう何も、話すことなんてない。」
暗い目で語った綺羅に、アリサは怒鳴った。
「どうして・・・どうしてそうなるのよ！なんで殺しあわなきゃいけないのよ！あんた達が！」
綺羅は言い返した。
「何も、知らないくせに！フェイトのことも！俺のことも！」
綺羅の目からは、大粒の涙がこぼれた。アリサは胸倉を攫みあげた。
「ええ、知らないわよ！けどね、あんた達が戦っていい理由なんて何一つないって事くらいは知ってるわよ！！」
彼女もまた、泣いていた。しかし、同時に知っているのだ。綺羅がどれほど優しい少年であるかを。そうでなければ、見ず知らずの少女に傘を貸してあげたりするはずはない。
「けど・・・あの時のなのはは敵だった！キルモードのレイジングハートでフェイトを撃った！対話なんてありえなかった！なら！戦うしかないじゃないかッ！」

パシン――

言葉は返されなかった。
アリサが、涙を流して喚き散らす綺羅に平手打ちをしたのだ。
それは、罰ではなかった。
綺羅は、見えていないだけなのだ。いや、見ようとしないだけなのだ。
ただ、それだけだった。
アリサは、初めて綺羅のことを理解した気がした。
彼は仔猫だった。雨に打たれ、凍え、だが差し伸べられた手を恐れてしまう。
そして、きっとそれに克てるのは、彼自身だけなのだ。

「・・・待ってる」

「アリサ？」
アリサの言葉に、綺羅は何を求めているのか。赦しか。それとも罰か。
そんなことは、知ったことではなかった。
彼女は元来口下手なのだ。
「待ってるわよ。あんた達がまた、笑い合えるようになるまで、あたしは怒りながら待ってるわよ！」
行くわよ、とすずかの腕をつかむ。

これで、いいような気がした。

一連のやり取りを、ブッシュからフェイトが聞いていた。
携帯を忘れて、取りに戻ろうとしたところ、玄関先に少女達がいるのを見たのだ。
負い目を感じていたのかもしれなかった。
そして、知った。
綺羅が自分のために捨てたものを。
自分に向けてくれた笑顔の裏で、彼がどんなに傷ついていたか。
だから。
「アルフ、私、母さんのところに行く」
「な、何を言ってるんだい！あんな女のところに行ったら・・・」
「もうこれ以上、キラが傷つかなくていいようにお願いするの。そのためなら、私はどうなってもいい・・・」
「フェイト・・・」

少年も少女も、傷ついていく。
そして物語は進んでいく。
歪んだ方向に。誰も望まない方向へ。

ごく一部の者だけが望む、歪んだ泥水に満ちた方向へ・・・・・・・・・・・・・

＃　２０　誰がために

次元海

時空管理局所属多目的攻撃空母【アースラ】船橋

「ひどい・・・」

中空モニターに綺羅となにはの戦闘映像を映し出したオペレーター、エイミィ・リミエッタが呟いた。画面の中の２人は、防御や回避などを全く考えずに、ただ相手を殺せばよしという意識がありありと窺えた。

「どうして、こんなことに・・・」

エイミィに同意したのは、立って映像を閲覧していたクロノ・ハラオウン執務官だ。管理局員として多数の現場を見てきた彼にそう言わせるほど、これは苛烈なモノであったと言わざるを得ないだろう。

「戦闘の原因はやはり、特定遺失捜索物か」

「そのようです。両者共に、ジュエルシードの封印現場で数回確認されています。」

「どうしますか、艦長？」

クロノが振り向く。艦長席に座っているのは管理局提督であり、彼の母でもあるリンディ・ハラオウンだ。彼女はティーカップを傾け、淡々と言う。

「どのような理由があるにせよ、本人達の事情を聴かなければどうすることもできないわ。それを最優先して。クロノ、行けるわね？」

クロノははっきりと頷く。

「はい、リンディ提督。」

これもまた、ほんの始まり。

しかしまた、綺羅を巻き込む、誰も望まなかった始まり・・・・・・

同日　２３：３０

「本当に行くのかい、フェイト？」
アルフはフェイトにかれこれ１時間ほど、同じことを聞いていた。
それほど彼女の身を案じていたのだが、フェイトは頑として聞かなかった。
「大丈夫だよ。母さんはちょっと不器用なだけ。ちゃんと話せば、分かってくれるよ。」
フェイトは母の元へ、ジュエルシード収集の報告と、もうこれ以上綺羅が関わらなくていいように頼むつもりだった。
無論、彼女の母にそんなことが出来るはずもないのだが、フェイトに底まで考えることは出来なかった。
いや、その余裕すらもなかった。
フェイトの決意が変わらぬことを悟り、ならばとアルフは彼女を励まそうとする。
「そ、そうだよ。こんなに短い時間で、たくさんジュエルシードを集めたんだ。あの人も、きっと・・・」
「そうだね、ありがとう。」
フェイトは微笑を浮かべる。アルフはそれを見て胸が痛くなった。
アルフは知っている。フェイトが母親からどんな仕打ちを受けているかを。今回とて、うまく行く保障はない。寧ろ可能性は低いだろう。
そして。
「フェイト、もしそれがうまくいったとしても、もう綺羅とは一緒に・・・」
そうだ。もし綺羅が救えても、フェイトの心は？綺羅はフェイトを放っておけない。必ず助けようとするだろう。そうすればまた巻き込むことになる。ならば、別れるしかないのだ。

「もう、十分だよ。キラにはいっぱい迷惑かけて、いっぱい元気にしてもらったから・・・」
「フェイト、無理しなくても・・・」
「私は、キラを助けてあげたい。このままじゃ、キラが可愛そうだよ。」
「そこまで言うなら、止めはしないよ。」
アルフは頷いた。
フェイトは扉を開ける。
母の元へ。
【時の庭園】へ――

海鳴市立病院　なのはの病室

なのはが意識を取り戻してから、5日が経った。
級友や教師の見舞いは絶えず、その盛況ぶりに彼女の家族も目を丸くしたものだ。
なのはは、誰にも真実を語っていない。通り魔に逢った、当時の記憶は一切ない、の一点張りだった。
同時に、彼女は自分の罪について責め続けていた。

ユーノ・スクライアには、怪我ひとつなかった。

簡単なことだった。綺羅があの時放ったブーメランは鎮圧（クエル）モードだったのだ。ユーノが気を失った原因と言えば、魔力刃から放たれた膨大な魔力流に強い肉体的ショックを受けただけである。

それなのに、自分は。

激情に任せ、レイジングハートを振るった。

綺羅の、大切な人を傷つけた。
彼を、殺そうとした。
咆哮して。
獣となって。
殺戮を、求めた――

「思いつめないで、なのは・・・」
ベッドサイドに座る、栗色の髪をした少年が語りかけた。ユーノである。なのはが目を覚ましたとき傍にいたのは彼だ。
見たことのないその姿に絶句した。
彼だと知った時には、不意にも泣いてしまった。
そして彼の無事を喜んだ。
そして、気が付いた。
自分のやったこと。
犯した罪。
なのはは、絶望の淵にいた。顔を上げることすら出来なかった。
見舞いに対して笑顔で応じるものの、あの笑顔はとても不自然だったに違いない。
言われれば、泣いてしまうだろう。
そして、彼女が積みの意識に苛まれているのには、もうひとつの理由があった。
「今日も来てたよ、綺羅って人・・・」
「うん、分かってる・・・」
ユーノの言葉に、頷くことしか出来ない。
この病室からは、エントランスが見えてしまうのだ。そう、なのはの病室の手前まで来ては引き返す、綺羅の姿まで見えてしまう。
毎回、泣きそうな顔をして、振り返ってしまう。
「綺羅君、どうして私なんかを・・・」
責めてくれればいいのに。そのほうが楽なのに。
お前がフェイトを奪ったと、怒鳴ってくれれば楽になれるのに。

（どうして、お見舞いに来てくれるの？）
哀れんでいるのだろうか。冷静な判断力を失うほど、綺羅との決着に固執した自分を？
いや、違う。
彼は、本当に心配してくれているのだ。
嬉しかった。
でも、痛かった。
胸が―痛かった―

翌日　朝

綺羅は起きてすぐ、異変に気付く。
家の中が、寂しかった。
まるで大切なものが、根こそぎ奪い取られてしまったような・・・
思い当たる節は、あった。
「フェイト・・・！」
決して当たって欲しくない予想は、当たった。
いなかった。
ベッドにも。
シャワールームにも。
リビングにも。
ダイニングにも。
どこにも―
「フェイト、一体どこへ・・・」
と、綺羅はダイダロスの待機形態である携帯のディスプレイが光っているのを見つけた。
―新着メールがあります―
「・・・？」
綺羅にメールが来るのは珍しいことではない。後にしようとも思ったが、今はどんなメッセージでも欲しい。

メールを展開する。
差出人は、フェイト。

ｓｕｂｊｅｃｔ　言い忘れていたけど
本文　今日、母さんにジュエルシード収集の報告をしてきます。
　　数日は帰って来れないかもしれません。心配しないでね（^^）／

本文の最後に、笑顔の顔文字が入っている。
「何だよ・・・心配した俺が馬鹿みたいじゃん・・・」
綺羅は安堵した。彼女の母親、プレシア・テスタロッサと言うらしい―について、フェイトはよく話をしていた。
聞いた印象はよかったし、悪い人間だとは思えなかった。
綺羅はスマートフォンのタッチパネルを巧みに操り、メールを返す。

ｓｕｂｊｅｃｔ　Ｒｅ：言い忘れていたけど
本文　今メール見たよ。
　　了解。
　　たまには、親子でゆっくりしてきなさい。

まるで兄貴みたいだな、と笑う。
ソファに身体を沈め、テレビとＰＣを交互に眺める。
学校に行く気はまだ起きない。アリサたちに会うのが嫌なわけではない。寧ろ、もう一発激を飛ばしてもらってもいいかもしれない。
けど、なぜか学校に足が向かない。
（分かってるくせに、な・・・）
進むしかないということくらい、わかっている。
けど、ここで待っていればフェイトが帰ってくる。笑顔を向けてくれる。
そんな微温い安心に、彼は既に溺れてしまっていた。

（馬鹿みたいだ・・・）
彼女を守るのが自分だったはずなのに。
いつのまにか、自分が彼女に守られている。
（ホント、馬鹿みたいだ・・・）
眠気が襲ってきた。
逃げるように、彼は睡魔に従う・・・・・・・・・・

ドンドンドンドンドン！

「・・・？何だ、一体？」
綺羅は誰かが玄関を叩く音で目が覚めた。少しだけ、と思っていたが、窓の外は西日で染められていた。随分長い間、寝ていたらしかった。
玄関の暴力的なコールはまだ続いている。
「はいはい、どちらサマですか・・・・って、アルフ！？」
「綺羅・・・良かった・・・！」
玄関先にいたのはアルフだった。フェイトと共にプレシアの元へ向かったはずだったのに、忘れ物だろうか？
いや、それにしては様子がおかしかった。
「どうしたんだ、お前？」
アルフは地獄の底でも覗いてきたかのような真っ青な顔でガタガタ震えていた。
とりあえず家に上げて。水を1杯飲ませる。
「落ち着いたか？」
数日前にアルフに言われたそのままの言葉を掛けると、それになど構っていられないと言わんばかりに、綺羅に頭を下げた。
「ッ！？どうしたんだ、急に！？」
「頼むよ、綺羅。フェイトを・・・フェイトを助けてあげておくれ！！」
綺羅の脳がそれを理解するのには、数拍の時間を要した。

フェイトを助ける？
プレシアのところへ行ったのではなかったのか？
彼がそれを尋ねると、返ってきたのは綺羅の想像を絶する言葉だった。
「そのプレシアから助けて欲しいんだ。あの子は・・・プレシアに痛めつけられてるんだ！」
「ッ・・・・・？」
今度こそ、彼の脳が活動を停止した。
そういうことだ？
優しい母親ではなかったのか？
「どういう・・・ことだよ・・・」
アルフはまくし立てた。
「おかしくなったのは、ジュエルシードの存在をあの女が知ってからだ。フェイトに収集を命じて。報告に行くたびに痛めつけて・・・そんなに大事なものなのかい。アレは！？」
「待てよ！じゃあ、フェイトが話してた優しい母親ってのは何なんだ！？」
途端に、アルフは涙を流す。
「あの子は・・・プレシアがいつか、優しい母親に戻ってくれるって信じてるんだ。今の状態だって、病気で不器用になってるだけだって言い張って・・・ッ！あたしがどんなに言っても聞かなくて・・・。もう見てられない。あの女が正気に戻る前に、このままじゃフェイトが死んじゃうんだ。だから、頼むよ！」
綺羅は、何も言わずに立ち上がった。
擦れ違う瞬間に、言った。
「アルフ、フェイトは、ここにいて幸せだったのか？」
アルフが顔を上げた。
「当たり前だよ。あの子は、ずっとここに居たいって言ってた。」
「ここにいれば、あいつはもっと幸せになれると思うか？」
「何言ってんだい。当たり前じゃないか！あんたにとっても、あの

子にとっても！」
「・・・座標を、教えてくれ。」
「行って、くれるのかい？」
綺羅は迷わず答えた。
「ああ、行くよ。全てを失った今、俺にはこれしかないんだから・・・」

『システム起動。全ロック解除。動力系、出力系異常なし。』
何日ぶりかのアナウンスを綺羅は聞いていた。向かうのは時の庭園。
プレシアが、フェイトを痛めつけている場所。
『魔力供給量、規定値を確認。全武装フリー。システムオールグリーン。長距離座標移動準備完了。発進どうぞ！』
綺羅は目の前にあいた時空の穴を見つめる。彼は行くのだ。フェイトを救うために。
絡まりきった糸を焼き尽くすために。
「ダイダロス、発進する！」
彼は―

#21　綺羅（前書き）

期末考査、修学旅行と続いて更新止まってました・へ・

またちまちま上げていきます

#21　綺羅

時の庭園。
次元海にポツリと浮かぶ、小さな世界。
プレシア・テスタロッサの居城。
その空間に、鞭が空気を切り裂く音が響いた。

「あなたは、私の娘・・・」
プレシアが、読み上げるように呟く。
目の前には、光の鎖で宙吊りにされたフェイトが浮かんでいた。
「大魔導士プレシア・テスタロッサの一人娘。」
鞭が振られ、抵抗できないフェイトにまた裂傷が刻まれた。
「なのにせっかく地球に出向き、上がってきた成果がこれだけでは・・・」
プレシアはテーブルに投げ出されたジュエルシードを一瞥した。
「お話にならないの。」
また、鞭が振られる。道具に罪はない。ただ、行使者の意志に基づき目的を果たすのみだ。
そんなことを、フェイトは思った。
綺羅の話どころではなかった。
だが、これもいつも通り。
フェイトにとっては、慣れたものでしかなかった。
しかし、今回は。
助けて欲しいと、願ってしまう。
この苦痛から逃れたいと思ってしまう。
彼に―救って欲しいと。
「ジュエルシードは大切なもの。もう、一刻の猶予もない。」
プレシアが腕を振り上げた。

「だから、次こそは全て、集めてこなければ――」
振り下ろされようとした、その瞬間。
大広間の奥から打ち出された2本の光条が、光の鎖を撃ち抜いた。
それだけではない。高速移動してきた何かがフェイトを抱きかかえ空中に離脱、振り下ろされた鞭は虚しく空を切った。
「！？」
そして、フェイトを肉体的苦痛から救い出したのは。
左腰に実体剣を、右腰にライフルを下げた、黒衣の少年だった。
「キラ・・・どうして・・・？」
フェイトは思わず訊いた。どうしてこんなところに来たのだろう。
回廊を守護する倶術兵はどうしたのだろう。
そして何より、どうしてまた、魔法を使っているのだろう・・・
「約束、したからな。」
「約、束？でも、あれはジュエルシードを・・・」
綺羅はフェイトに向かって微笑んだ。あの時と同じように。彼女が心を奪われた、あの微笑みを浮かべた。
「そんなこと、約束してないよ。」
「え？」
綺羅は、プレシアを睨めつけた。プレシアが巨大な捕食者の意思を感じたように、一歩下がる。
そしてフェイトに振り返り、綺羅は言った。
「俺が約束したのは、フェイトを助けること。どんなときも、お前の味方でいること。だから。」
「キラ・・・！」
「お前を助ける。お前をこんなに痛めつけた奴を、俺が、倒す・・・！」
綺羅はライフルを抜いた。照星の先にプレシアを重ねる。
「あんたが、フェイトをこんな目に・・・！」
倒す。
許さない。

学習しないな、と自嘲する。だが、その前にやるべきことがある。
対してプレシアはフ、と笑った。
「お前が、フェイトの現地協力者・・・」
「違う。ただの友達だ。」
言い返した綺羅に、プレシアはまた笑った。
「何も知らないくせに、知ったような口を！」
綺羅は激昂した。
「ああ、知らないさ！けどな！自分の娘をこんな風に痛めつけることの善悪なんて俺だって知ってる！あんた、母親なんだろ！どうしてこんなことが、平然と出来る！」
綺羅の怒りに、プレシアの笑いは大きくなるばかりだった。
どこか調子のずれた口調で、言い返す。
「母親？娘？違う。そんなものじゃない。・・・そこにいるのは・・・人形だ。」
「だめ！言わないで！」
フェイトが絶叫した。絶対に聞かれたくなかったことを、目の前で言われたときのように。
そして、綺羅は。
「人形、だと・・・！？」
踏みしめている地面が抜けてしまうような感覚を味わうのは、今日何日目だろうか。
フェイトが、人形？
偽りだったのか？
あの笑顔も。
あの言葉も。
全て――
だとしたら、自分がしてきたことは？
綺羅が聞きたいと欲した真実の続きは、プレシアが語った。
「私の娘・・・本当の娘ならば・・・ここにいる！」
瞬間、大広間に照明が灯った。そして、薄暗かった空間を嘲笑うか

のように照らし出した光は、あるものも同時に、綺羅の視界に映し出した。
それは、人が直立できるほどの内部空間を擁したカプセルと、その中で液体に浸って眠っている――――一フェイトと同じ顔をした、人の少女だった。
「何だ・・・これは・・・」
思考が追いつかない。
自分は、何を見ている？
「これが、私の本当の娘、アリシア・テスタロッサ。そこにいるフェイトは、アリシアのクローン、劣化コピーでしかないの。」
「クローン・・・・・・」
綺羅はフェイトを振り返った。フェイトは綺羅に顔を見られないように、大理石の床に顔を押し付けていた。だが、洩れてくる嗚咽で、フェイトがどんな表情をしているかなどすぐに分かった。
「アリシアは、死んだのよ。フェイトは、アリシアを生き返らせるために生み出した人形。ジュエルシードさえあれば、私の願いは、私の娘は・・・」
――ジュエルシードは、発動者の願いを叶えるもの・・・
その声が響いた瞬間、綺羅は全てを理解した。
フェイトが生み出された理由も。
プレシアの目的も。
「フェイトにジュエルシードを集めさせ、あんたはそれを使って、アリシアを生き返らせる・・・」
プレシアがようやく理解したか、という風に鼻を鳴らした。
「そう。そうして私は取り戻すの。全てを・・・あるはずだった日常を！」
綺羅は、再び激昂した。こいつは何を言っている？それが叶えられたとして、フェイトの負った傷はどうなる？アリシアがいるにせよいないにせよ、フェイトが生まれ、生きているという事実に変わりはないのに！

「ふざけんな！何があるはずだった日常だ！そんなもののために、フェイトが傷ついていい理由があるのかよ！クローン？劣化コピー？関係ないだろ！フェイトはあんたの娘だろう！フェイトが生きている事実は、何も変わらないだろうに！」
プレシアは哀れだ。娘の死を受け入れられずに、それに縛られたまま、今度はフェイトを殺そうとしている・・・
「ダイダロス、目標を破砕する――！」
ライフルをフルオートで撃ちかけ、一気に肉薄する。プレシアを応戦体制に入ったらしく、鞭が大柄な杖に変化した。
「若造が、調子に乗るな！――スパークウェブ！」
プレシアの足元に魔方陣が展開した瞬間、空中に超電圧の網が張られた。触れた者を焼き焦がす、美しく殺意に彩られた網。
綺羅の脳が、今度こそ怒りに沸騰した。こいつは、自分を殺せばまたフェイトを傷つけるだろう。フェイトは、またこいつの意に従ってしまうだろう。だから。
未来への禍根を断つため、ここで倒す！
「あんたは、あんただけは・・・・墜とす！」
綺羅の中で何かが弾けた、あの感触だ。海上で、なのはと殺しあったあのときの。だが、今度は不思議に殺戮衝動は沸いてこなかった。ただ、視界がクリアに澄み渡り、思考回路が活性化する。
綺羅は致命的な電撃で織られた布を突破するように回避運動を取る。網目と網目の間をすり抜け、プレシアに接近した。
「食らえ！」
実体剣を抜き放ち、そのままの勢いでプレシアに斬りかかる。
「そんな攻撃が！」
プレシアは防御フィールドを展開し、これを迎え撃った。
フィールドとエシュリデータとの間に凄まじいスパークが走り、照明で照らされた大広間をさらに煌々と照らし上げる。
「甘い！」
プレシアが急にフィールドを消した。綺羅がつんのめる。

「頂く！」
杖が振られた。至近距離用に刃が装備されている杖を綺羅はエシュリデータで受けたが、プレシアは巧みに得物を操り、綺羅の手から剣を弾き飛ばした。
「何っ―！」
そのままプレシアは杖に装備された刃と魔力弾を巧みに使い綺羅を追い詰める。突きと同時に魔力弾を放ち、蹴りと同時に撃ちこむ。
「どうした、勢いは口だけか！」
「くっ・・・」
反撃のため、ブーメランをアタッチメントから外しそのまま振ったが、逆にそれが仇となった。プレシアが身体をそらして魔力刃を避け、返しの杖の一閃が両手のブーメランを弾き落とす。
「しまった・・・！」
体勢を崩されながら綺羅は、自分の背後に回ったプレシアが最大出力の魔力刃を振り上げているのを感じ取っていた。
「身の程を知れ、青二才！」
逃れられない、絶対的な死が綺羅を襲う。
暴力的な光が、綺羅の視界を埋め尽くす。
そして。
綺羅は・・・・・・・・・・・・・・・

同時刻　ヴァルハラメインターミナル

「この程度で終わりか？」
少年は呟く。モニターには追い詰められていく綺羅が映されていた。
「情けないな、人類の英知。」
また呟き、彼はコンソールを操作する。
「それではあまりに、つまらないじゃないか・・・」
彼には、もっと絶望を知ってもらおう。
その上で、極限まで闘って、死んでもらう。

そのために、彼はプレシアに干渉しようと・・・
した瞬間。
彼の視界が突如赤く染まり、緊急を知らせるサイレンが鳴り出す。
同時に、クリアだったヴァルハラへのアクセスが全て落ち、ウインドウも尽く閉じる。
「何だ・・・まさか！」
彼は思い出す。自分が戦っていたニンゲンの名を。
彼はコンソールに拳をたたきつけた。
「その肉体を失ってなお・・・俺の邪魔をするか、神近翼！」

横薙ぎに走らせた刃が空を切った。
「なんだ！？」
プレシアは我が目を疑った。完全に自分の間合いだった。逃れるすべなどなかったのに！
だが確実に両断されたはずの若造の肉片など存在せず、残滓のように魔力粒子が輝いているだけだ。
そんな中、プレシアは視界の隅を横切る光を認めた。
「そこか！」
魔力弾を連射するが、当たらない。それどころか、恐るべき速さで接近してくる！
「なんだ、あれは！？」
瞬間、プレシアは吹き飛ばされた。少年が体当たりをしてきたのだ。
「この・・・ッ！」
杖を振り回すが、虚しく空を切るばかりである。
（何の・・・冗談だ・・・！）
プレシアが見上げた先で、少年は紅く輝いていた。
まるで、胸に抱いた思いを発散させるように・・・・・・・

#22　託されたもの

プレシアに魔力刃を振り下ろされたとき、もちろん綺羅はそれを甘受するつもりなど毛頭なかった。
もちろん、すばやく剣先を避けて反撃に移るつもりであった。例えその一撃で、彼自身が重大なダメージを負ったとしても。
ダイダロスは彼が思ったとおりに、いやそれ以上の性能で応えてくれた。
自分が瞬間移動したかとでも思うほどの加速力。想像するだけで無理だと思っていた程の軌道性能――その全てを、彼が望んだことを、それ以上に体現した。
「これは――」
彼は今まで何度も見てきたメインモニターを、初めて目にしたような思いで見つめていた。と、モニターに通信ウインドウが開き、何者かが回線を開いてきた。そして、そこに移っているのは。
「兄さん――！？」
そう。記憶はおぼろげでも、僅かな記憶に残る特徴と、モニターの中の青年の特徴は全て一致する。間違いなく彼は、綺羅の兄、神近翼であった。
翼は静かに語り始めた。
『綺羅、お前がこれを見ていると言うことは、お前は俺の望んだ道を歩まなかったということだろう。』
綺羅の知りえぬことであるが、このときアースラにも言葉を変えて、翼のメッセージが流れていた。
『だが俺は、お前を信じ、最後の力を、リンカーコアの最後の力を託そうと思う。』
リンカーコア――。綺羅がダイダロスに幾度か聞いた、彼の魔力のコア。これは、リンカーコアの新機能なのか？だが、綺羅はそんなことを考えることもなく、ただ縋るように翼の言葉に耳を傾けてい

た。
『お前が、お前の意思で、お前自身のために戦うことを願う。誰の意思でもなく、おまえ自身の意思で――』
そこで通信は途切れ、メインモニターに静寂が戻った。
綺羅は幾度も、翼の言葉を反芻する。
（俺のために、俺の意思で・・・誰のためでもなく、誰の意思でもなく、俺のために・・・）
そのための力。自らの剣。
（俺は・・・）
しかしそこでアラートが鳴り響き、彼の思考は寸断された。
モニターに目を戻すと、魔力刃を纏った杖を構えたプレシアが急迫してくる。
「どんな手品か知らないが！」
だが、裂帛の気合で振り下ろされた攻撃力の塊は虚しく宙をきるばかりだ。一撃分の空白で、綺羅は大きく距離を取り、抜き放ったライフルの連弾を浴びせる。プレシアが防護フィールドを張ったが、魔力圧縮率を超えた光弾がフィールドを貫通し、ダメージを与える。
「ッ・・・調子に乗って！」
「！」
最大出力のスパークウェブが放たれ、空中に張られた細かく織られすぎた網。綺羅は向上した機動性に物を言わせ回避運動を取り続けるが、いささか網目は細かすぎた。ライフルが電撃に食いつかれ、爆発を起こした。咄嗟にライフルを手放し、煙に紛れて急迫する。プレシアが認知したときには、彼はフォトンサーベルを両手に握り踊りかかっていた。
「こ・・・の・・・ッ！！」
十分に引きつけ、魔力弾を放ったつもりだった。しかし少年は鋭角的な動きで無駄弾たらしめ、宙に残像さえも残すほどの速度で再接近してくる。
直後、彼女は蹂躙された。赤色の光輝を放つ綺羅に、突き上げ、蹴

られ、叩き落される。
「この・・・私が・・・ッ！」
「うおおおおぉぉぉッ！」
そのまま綺羅はプレシアに体勢を立て直す暇を与えず、光剣を閃かせた。
そして、防護フィールドごとプレシアの身体が切り裂かれた。行き場を失くした圧縮魔力が吹き荒れ、彼女の持つ杖ごと、デバイスが爆発を起こす。黒煙を切り裂くようにプレシアの身体が吹っ飛ばされた。数回バウンドし、外壁を抉って停止した彼女の身体は、もう二度と動かない。
煙が晴れると、両手にサーベルを携えた綺羅が悠然と姿を現す。紅く輝くその姿は、ある種の神々しさを感じさせる。
綺羅はダイダロスがこの高機動性を発揮し始めたときから、モニターに黒地にルビー色で点滅する表示を認めていた。視線を向けると、そこには【ＴＲＡＮＳ－ＡＭ】の文字が輝いていた。
「トランザム・・・」
彼が読み上げる。
「トランザムシステム・・・」
『最後の力を託そうと思う・・・』
彼の脳内に翼の声がリピートされる。託された力。トランザム・・・
「俺は・・・」
彼の、彼のためだけの力。
「俺は・・・託されたんだ・・・」
彼は、静かに拳を握る。翼は言っていた。お前の意思で、お前のために戦えと。
ならば。
「俺は・・・フェイトのために・・・」
その、瞬間。
ぐらり。
世界が暗転する。モニターを見ると、魔力残量がほぼ空になってい

た。
（くそ・・・なんて燃費の悪いシステムだよ・・・ッ！）
そのまま膝を突いてしまう。魔力が底をつくことが生命活動にどれだけ影響を与えるかを、知らない彼ではなかった。
（クソ・・・ッタレ・・・が・・・）
そのまま、彼の意識は闇に堕ちた。

「キラ！」
倒れた綺羅に、フェイトが駆け寄る。全身が痛むが、そんなことを気にする彼女ではない。しばらくして、転移してきたアルフも綺羅に寄って行った。
フェイトが綺羅を抱きかかえる。
「しっかりして、お願い！」
だが、彼からの応答はない。フェイトの悲痛な呼びかけのみが木霊する。
さらに―
「ッ！？」
急に、立っている場所が、空間が激震した。大地震が空間自体を揺らしたらこうなるだろうか？いや、そんなことを考えている余裕すらない。立っていられず、フェイトとアルフはその場にしゃがみこんだ。
「まずいね、戦闘の余波で次元震が起きてる。庭園が崩壊するよ！」
アルフが叫ぶ。
「フェイト、早く脱出するよ！綺羅を寄越しな！」
しかし、激震の中、フェイトは闇を睨み続けていた。
「でも、母さんが・・・！」
アルフは怒鳴った。
「言ってる場合かい！このままじゃみんな仲良くお陀仏だ！プレシアは探しようがないよ！急がないと、綺羅まで死んじまうよ！」
綺羅、で正気を取り戻したのか、フェイトも空間転移の術を組み始

める。アルフとフェイトの両方の術が組みあがる頃には、空間の崩壊が始まっていた。
崩れてゆく。フェイトの過去が。プレシアと、アリシアの世界が。
全て。
「転移するよ！」
「転送――！」
アルフとフェイト、そして抱えられた綺羅は、間一髪のところで、空間崩壊が起きている庭園から脱出した。

夢を、見ていた・・・
兄と、２人で仲良く暮らす夢。
だが。何か足りない。
その何かに気付くとき、兄は姿を消す。
そして、暗闇の彼方に、彼女の姿が見える。
何よりも大切で、誰よりも愛おしい彼女が。
手を伸ばす。
叫ぶ。
そこで、目が覚める――

「う、あ・・・」
「キラ！？」
意識を取り戻した綺羅は、自宅のソファに寝かされていた。目を開けて最初に視界に映ったのは、大きな瞳いっぱいに涙を溜めてこちらを見つめる、フェイトだった。
「俺は・・・あの場所で・・・」
「大丈夫。私も、キラも生きてるよ。ちゃんと、ここにいる。」
「そう、か・・・」
綺羅は身体を起こす。フェイトは私服姿に戻っているが、綺羅には分かる。
あの場所で、フェイトは全身に傷を負っていた。その傷は、治って

いるはずがない。
事実、フェイトはしばしば顔を歪めていた。
それが、痛々しくて――
気付けば、綺羅は彼女の身体を強く、強く抱きしめていた。
「キラ・・・？」
「良かった・・・けど、こんなにされちまって・・・俺のせいで・・・」
彼女の細い身体を必死で抱きとめる。そうしていなければ、彼女が消えてしまいそうで。
「俺が、守るから。もう、誰にもお前のこと、傷つけさせたりしないから。だから・・・」
その先は、言葉にならない。守ると誓った人が、目の前で傷ついている光景がフラッシュバックする。
何故気付けなかったのか。彼はまた、自らを責める。
すると・・・
ふわり、と。
柔らかい何かが、綺羅を包み込んだ。それが、フェイトの身体だと理解するまで数拍の時間を要した。
「フェイト・・・？」
「私・・・分からないの」
「え・・・？」
訊ねた綺羅に、フェイトが続けた。
「もう、これからどうしたらいいか分からないの。今までは、母さんの行ったことが絶対だった。でも、もう母さんはいないの・・・」
「フェイト・・・」
「私、どうしたらいいの？キラ、教えてよ・・・」
フェイトも、キラの胸に顔を埋めた。綺羅は、彼女が泣いているのだと知った。
やはり、フェイトにとってプレシアの存在というのはそれだけ重かったのだ。彼女の生き方を決定させてしまうほどに。

だから。
彼は語りかけた。
「お前が、やりたいと思ったことをやればいい。」
「え・・・？」
綺羅は顔を上げた彼女に微笑みかけた。
「自分がどうすればいいかを知ってる奴なんていないよ。そんなこと、分かるはずないんだ。生きてるんだから。」
そうだ。自分だってそうだった。なのはだって。アリサやすずかだって。自分がどうすればいいかなど分かるはずがない。分かっていたら、こんな悲しい衝突は起きない。
でも。
分かっていたら、自分達が自分達として存在する意味なんて無いのだ。
だから。
「だから、俺たちは生きてるんだろ？何をするか、それを見つけるために。」
「キラ・・・キラぁ・・・・」
フェイトの瞳から涙が溢れた。それは、きっと意味のあるもの。彼女が彼女らしく生きていく、そのための涙。
「それでいいんだ・・・。人は、泣けるように出来てるんだから・・・」

２３　心（前書き）

あけましておめでとうございます・へ・
今年もよろしくお願いします

＃　２３　心

「リミットを解除し、蓄積された圧縮魔力を前面解放することで一定時間、スペックの３倍に相当する出力を得る・・・」
アースラの船橋では、先ほど神近翼からメッセージと共に送られてきたデータの解析が行われていた。中身は、彼が生前研究していたリンカーコアの全性能。全てのブラックボックス。
「リンカーコアを持つもののみに認められた機能・・・」
「トランザムシステム・・・」
誰のものかもわからない呟きが宙に浮かび、次々と消えていく。それほど、送られてきたデータは彼らの想像を絶するものであった。トランザムシステム、これがあれば管理局の戦力は一気に増大する。彼らの術式、装備は適を一撃で撃破しうるものであるし、システムによってもたらされる３倍という出力は、その一撃を量産できる可能性を秘めている。
ただし、デメリットはつき物である。蓄積された圧縮魔力を使い切ってしまえば、武装面だけではなく駆動、出力系にまで影響が出る。最悪、敵の只中で動けなくなってしまう・・・
だが、用は使い方なのだ、とそこにいる誰もが思っていた。賭ける価値のある劇薬、という認識をしていれば用法を誤ることはないはず。
リンディはそこまで思いを馳せた後、オペレーターに声をかけた。
「もうひとつのデータは？」
オペレーターがはきはきと答える。
「もうひとつは、新システムを採用したデバイスの設計図のようです。まだ解析は進んでいませんが・・・メインシステムは、現在確認されていないものが使用されています。コードネームは・・・＜ツインリンカーコアシステム＞。」
「ツインリンカーコアシステム・・・？リンカーコアをひとつの機

体に複数搭載すること自体は、試験的ではあるけど管理局も行っていたはずだわ。」
オペレーターが眉をひそめたまま答えた。
「これは、それとも毛色が違う機体のようです。出力は、２倍ではなく２乗・・・？」
再びコンピュータによる解析が進み始めたらしく、画面が切り替わる。オペレーターは再び画面のチェックに忙しくなったらしくディスプレイとのにらめっこを再会した。
トランザム。そして謎の新技術。これをどう処するべきか。通常であれば上層部に報告、後は上の判断に任せる――これが通例であり、常識だ。しかし彼女は、この途方もなく大きな力が時空管理局の上部へ流れるのを是と思わなかった。
提督ともなれば、当然上層部の話も流れてくる。清いものも、醜いもののである。そして彼女が聞いてきた話は、限りなく醜いものが１０割に近かった。
反目的な管理世界に対する、指導という名の弾圧。友好的な時空世界でのみの技術の共有。急ぎすぎた＜漸次食う世界の統合＞は、確実に歪みを生み出していた。
そして、このデータが彼らの手に渡れば。結末は火を見るより明らかである。
彼女は命じた。
「このデータは、管理局の共用サーバーには入力しないで。アースラの独立サーバーに保管。これは私の独断であり、貴方達に責任はないものとする。」
得たデータの独占など、下手をすれば軍法会議ものだろう。だから彼女は、自分以外のクルーに追及が及ばないように自らの独断命令とすることを忘れなかった。
（あとは、翼の弟・・・ダイダロス・・・）
翼から送られてきたデータには、彼が生前建造していたデバイス＜ダイダロス＞のデータも入っていた。それは彼らが得た海上の戦闘

映像に映っていた少年が使用した機体と一致、今は完全にアースラに位置特定されている。その追跡データはクロノが持つ端末にも送ってある。発見も時間の問題だろう。
「本当に、これで終わりに出来ればいいのだけど。」
リンディは艦長席に腰を沈め、コンソールの操作音のみが響く船橋を眺めなおした。
まるで、我が子を見守る慈母のように。

地球　海鳴市

綺羅がトランザムを起動し、プレシアを倒してから3日が経っていた。綺羅の魔力不足はすぐに解消し、またフェイトの傷も完治していた。
今日も、彼らは笑顔で食卓を囲む。
「キラ、本当に料理上手だね。」
「ありがと。でも、俺が自分で作るようになったのはお前が来てからだよ。」
フェイトは首をかしげた。
「その前はどうしてたの？」
「いや、面倒だからコンビニで買ったり外食したり、なのはの家でご馳走に・・・っと悪い。」
なのは、という名前に反応したフェイトを見た綺羅がすまなそうに首を縮めた。
フェイトは寂しげに笑った。
「ううん、いいの。キラにはキラの暮らしがあったんだから。そこに私が割り込んでるだけ。」
綺羅はかもな、と首肯した。
「けど、割り込まれてる気分は、悪くない。」
それを聞いたフェイトは大輪の笑顔を咲かせ、

「ありがとう、キラ。」
笑いかけられた彼は、顔を真っ赤にしてしまう。
「どういたしまして、だね。」
精一杯虚勢を張った。
テーブルに肘を突いていたアルフにからかわれたが、これに対応する余裕はなかった。
「ほんとに、純情なんだか鈍感なんだか。」
呆れたような表情。
だが、彼ららしくていいのかもしれない、とアルフは思った。
もし、魔法など関係しない世界で彼と彼女が出会っていたなら。
きっと、こうなっていたに違いなかったのだから。

「ね、キラ。」
「なんだ？」
食事も終わり、皿洗いやもろもろの片付けも終わり彼らがリビングでくつろいでいたとき、フェイトがおもむろに言った。
あたしはいないほうがよさそうだね、とアルフが退席する。それを横目に、フェイトが続けた。
「この前、言われたこと。ずっと、考えたてんだ。」
「お前のやりたいこと、か？」
うん、とフェイトは答えた。綺羅をじっと見つめる。これを言って、彼が嫌だと言ったら、と散々悩み、その度にアルフからそんなわけないじゃんと笑われた。
でも、と思う。考えるのと実際に言うのでは全然違うんだよ、と。
面と向かって言うには、こんなに勇気がいるんだよ、と。
綺羅がテレビを消す。彼も、彼女の瞳を見つめる。この場面を、もし誰かが見ていれば、それが誰だったとしても2人を恋人同士だと思っただろう。
フェイトは、綺羅の瞳に映る自分の表情が泣き出しそうなのに気付く。当たり前だ。自分が言おうとしていることは、それだけ大事な

こと。彼女が自分の意思で考えた、とても大切なこと。彼女が望むこと。誰でもなく、彼女が叶えたいと思うこと。
だから。
「私は・・・」
口が渇く。舌が絡まる。言わずにいられたら楽かもしれない。けど、言わなかったら。伝えなかったら後悔する。
だから。
「私は、キラと一緒にいたい。ずっと。ここにいたい・・・」
たったこれだけの言葉が、無限の永さに感じられた。
でも。
言えた。
伝えられた。
彼女の望んだことを。
これで綺羅が色恋沙汰に敏感だったなら、『好き』と言えたかも知れない。しかし、それを言うには彼はあまりにも幼かった。
彼は言った。
「いいよ。」
それだけで。
フェイトは泣きそうになった。彼が認めてくれる。ここにていいと言ってくれる。
「お前がここにいたいなら、ずっと、ここにいればいい。お前の居場所は、確かにここにあるんだから。」
それに、と彼は一度言葉を切る。
「俺も、お前にここにいて欲しい。お前と、一緒にいたい。」
もう、堪えられなかった。彼女の瞳から涙が溢れる。無我夢中で、綺羅に抱きついた。
綺羅もまた、フェイトの細い身体を抱きしめた。
「俺はここにいる。お前の傍にいる。いつでも。どんなときでも。」
愛しかった。自分の胸に顔を埋め震えている彼女が。

想いを、伝えたかった。
でも、と彼は思ってしまう。躊躇ってしまう。
それは微温い安寧。このままの距離なら彼女はここにいてくれる。
自分の傍に帰ってきてくれる。
それで十分だと、思ってしまう。
でも・・・そう彼は思った。
そうだ。
あの時だって。
決めたじゃないか。
自分に正直になるんだと。
そう思って、彼女の手を握ったじゃないか。
それに、彼女は答えてくれたじゃないか――
なら。
もう一度。
自分に素直になろう。
そう、綺羅は決めた。
フェイトの身体を、自分に向き直させる。彼女の大きな紅い瞳を、じっと真っ直ぐに見つめる。嘘なんてない。これが、俺のほんとに気持ち。ずっと抱いてきた、想いなんだから。目をそらす必要なんてない。
「キラ・・・？」
「俺は・・・」
好き、の2文字が遠い。
「俺は・・・」
唇が震えているのが分かる。
当たり前だ。
誰にも、本心を曝け出したことなんてなかった。
ずっと、俺は嘘つきだった。
けど、お前のおかげで。
素直になろうと。そう思えたんだ・・・

だから。
好きに、なれたんだ――
自分が。
そして。
お前が――――
「フェイトのことが、ずっと好きだった・・・」
言った。
言ってしまった。
もう、後戻りは出来ない。
もう、元の関係の戻ることは出来ない。
彼女を抱きしめたまま、彼は思った。
フェイトを見つめる。
彼女は、信じられないような、今起こったことが理解できていないような表情をしていた。
表情が二転三転し、少しずつ、落ち着きを取り戻していく。
回答は来ない。
もしかして、聞こえていなかったのだろうか？
そんな疑問を、彼が抱き始めたとき。
「・・・ね」
「フェイト？」
彼女の唇が、微かに音を奏でた。綺羅は思わず聞き返す。今、彼女は何と言ったのだろう・・・？
「ごめんね、キラ。」
「――――ッ」
時が、止まった気がした。
綺羅は自分が固まったまま、どれほどの時が流れたのだろうかと、ぼんやりとした意識の中思った。数秒か、数分か。それとも数時間だろうか？
気付くと、彼の口元は笑っていた。まるで狂ったかのように。
「は・・はは。そう、だよな。お前が、俺のことなんて・・・」

自虐的な台詞を、かれが奏でようとしたとき。
ふわり。
彼の身体を、柔らかくて暖かい何かが包んだ。それがフェイトの身体だと気付くまで数瞬かかった。
え――――？
彼女は、自分の想いを拒絶したのではなかったのか？
一体なにがおきているのだ？
せめてもの情けだろうか？
彼の脳を疑問が渦巻く中・・・フェイトが言った。
「そうじゃないよ。」
「え・・・？」
フェイトは、さらに彼を抱く手に力を込めた。想いが伝わりますように、と。こんなに弱くて情けない自分を好きでいてくれるキラが、私の想いを受け取ってくれますように、と。
「私から、好きっていえなくてごめんね・・・」
再び、時が止まったような気がした。
つまり、今彼女は。
自分のことが好きと、言ってくれた・・・？
「私、ずっとキラのこと好きだった・・・傘を貸してくれたあの時から、ずっと・・・！だから、一緒に暮らせるようになって、すごく嬉しくて・・・！ずっと、好きって言いたくて、でも言えなくて・・・！」
綺羅は、ただ聞いていた。彼女の告白を。彼女の言葉から、彼女が彼を抱く腕から、痛いほど伝わってきた。
だから、彼もまた彼女を強く、強く抱いた。
「ほんと、馬鹿みたいだな、俺たち・・・」
フェイトもまた、泣き腫らした瞳に笑みを浮かべた。
「うん、馬鹿みたいだよ・・・ずっと、想いは一緒だったのに・・・ね。」
綺羅は、そっと彼女の唇に自らのそれを重ねた。まるで心と心を重

ね合わせるかのように、フェイトはただ目を閉じてそのキスを受け入れた。
「もう、お前を離さない。お前は、俺だけのものだ・・・」
フェイトは頷く。
「うん。もう離れないよ・・・ずっと、キラの隣にいるよ・・・」
彼らは誓い合うように、再びそっと唇を重ねた・・・

窓の外には、満天の星空が広がっていた。
そして、満月がそっと彼らを照らす。
重ね合わせた心を象徴するかのように・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2403t/

＜新訳＞魔法少女リリカルなのは～空っぽの少年の物語～

2012年1月4日22時48分発行